

教育に新聞を



Newspaper in Education

2022 年度 実践報告書



教育に新聞を ～N I E～

2022 実践報告書

「生きる力」を育むために

- 主体的・対話的で深い学び
- 体験的な活動
- 言語能力の育成
- 地域・家庭との連携



北海道N I E
推進協議会編



2022年度「北海道NIE実践報告書」の発刊に寄せて

北海道NIE推進協議会
会長 菊池 安吉
(日本NIE学会理事)

NIE実践報告書「第26集」を刊行することになりました。

今年度の実践校37校の先生方が、全道各地において地域や学校の立地条件、児童・生徒・学生の実態などを考慮し、創意工夫したNIEの実践の成果と課題がまとめられています。報告書には、2020年から順次実施された学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえて、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の取組が多数掲載されています。昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染拡大の波を受けて、学級閉鎖や学年閉鎖、オンライン授業など数々の制約の下で学校行事や授業形態など多くの変更を余儀なくされました。その中でも、創意工夫を重ね「生きる力 学びの、その先へ」「社会に開かれた教育課程」をより具体化し、目指す資質・能力を整理し、新聞活用をしたNIEの実践が全道各地で行われました。

2022年度のNIE活動で特筆すべき事項は、記念誌「北海道NIE25年のあゆみ」が発刊されたことです。1996年に産声を上げた「北海道NIE推進協議会」は、各地区セミナーや2度の全国大会札幌大会開催を経て見事に成長してきました。草創期のメンバーであったアドバイザーの方々や事務局の苦労は、並大抵のものではなかったと想像されます。その土台があって現在の「北海道NIE」の実践につながっています。全国の5分の1を占める8万3424㎢の広大な面積を持つ北海道には、小さな都府県が10数個入るほどの広がりがあります。NIEの裾野を広げるために、全道各地で活動している実践校の取組をまとめたものが、この実践報告書です。

今回の実践報告の中には、2021 NIE 全国大会札幌大会のスローガン「家庭・教室・地域を結ぶ」を継承し、NIEの実践を通して育てたい力を学校経営計画の中に位置づけた取組も見られます。別海町のように、月に一度の「新聞の日」を設定して町内の児童生徒全員が新聞に触れ、学びの土台づくりの取組もあります。また、全校上げての継続的な取組が学力向上の一助となっていることを実感した教職員集団の報告もあります。学校全体で実践することの効果と有用性が証明されています。さらに、小・中学校のつながりや地域との連携、高大連携、探求活動の中で新聞を活用した実践も見られました。学校司書との協力・連携、児童生徒会の委員会活動と連動したり、特別支援学級や高等支援学校でも実践も多くなってきました。今後、紙媒体とデジタルの活用をどのように進めていくか、新たな実践課題もありますが、実践の成果と課題を共有しながら今後のNIEの広がり期待します。

例年、北海道各地で開催されてきた「NIEセミナー」は、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、今年度も開催が制限されました。初の離島開催となった「宗谷セミナー」(会場：礼文小学校)では、オンライン開催により、荒天でフェリーが欠航したために現地に足を運ぶことができなかった参加者の交流ができたことと大学生の参加などもあり、例年とは違う光景が見られました。「NIEの種蒔き」を継続し、メディア・リテラシーを身につけさせ、批判的な思考を育て、新聞の持つ信頼性や一覧性のよさを改めて再確認したいと思います。

最後に「実践報告書」の発刊に当たったNIE事務局をはじめ、NIE実践校の先生方、新聞関係者の皆さんに大変お世話になりましたことを報告しお礼申し上げます。

目 次

巻頭言	2022年度「北海道NIE実践報告書」の発刊に寄せて	3
	北海道NIE推進協議会 会長 菊池 安吉（日本NIE学会理事）	

日本新聞協会認定・NIE実践指定校

小 学 校

●「デジタルとアナログの融合 ～必要な情報を必要な方法で集め、活用できる子どもたちに～」	8
札幌市立福移小学校（新規校）	福本 勇太
●「新聞を読んで自分の考えの幅を広げる」	12
札幌市立緑丘小学校（新規校）	長谷川 美雪
●「新聞を活用した分かる・できる・楽しい学習の展開」	16
札幌市立明園小学校（新規校）	檜 克博
●「0から1へ～学校に新聞を持ち込む中で感じたこと～」	20
旭川市立永山小学校（新規校）	牧野 広太
●「新聞に親しむ小学校の実践 ～自分の思いをもち、主体的に課題に取り組む態度の育成～」	24
日高町立厚賀小学校（新規校）	大平 真紀
●「新聞を読み、要約する活動を通して、子どもたちの書く力を高める」	28
帯広市立愛国小学校（新規校）	平岡 あゆみ、大石 秀雄、松倉 彩加
●「新聞に親しみながら、情報活用能力を養う」	32
札幌市立桑園小学校（継続校2年目）	竹内 緑、木田 孝紀
●「新聞を通して、子どもの言語世界を広げる」	36
札幌市立栄南小学校（継続校2年目）	上野 裕子
●「新聞を活用したメディアリテラシーの育成」	40
芦別市立上芦別小学校（継続校2年目）	中西 亜美、大林 幸子、澤田 菜央
●「情報をつなげて読む～知って、伝えてうれしい～」	44
別海町立中西別小学校（継続校2年目）	本間 智子
●「NIEが学校にもたらす効果」	48
岩見沢市立中央小学校（継続校4年目）	富樫 いずみ
●「資質・能力を形成するNIEを考えよう」	52
夕張市立ゆうばり小学校（継続校5年目）	富樫 忠浩
●「要 約」	56
登別市立富岸小学校（継続校5年目）	磯部 美優

中 学 校

- 「新聞を読み比べよう」 60
 札幌市立真栄中学校（新規校） 遠藤 翔太
- 「学校図書館発のNIE
 ～生徒の学びとメディアをつなぐ学校司書が取り組むNIE活動～」 64
 札幌市立栄町中学校（新規校） 児玉 優子
- 「新聞を『読まざる』ようになるサンマ」 68
 標津町立標津中学校（新規校） 外川 篤司
- 「NIEで資質・能力を育成する」 72
 別海町立上西春別中学校（新規校） 早瀬 香織
- 「総合的な学習の時間を中心とした新聞を活用した実践」 76
 幕別町立忠類中学校（新規校） 石山 敬史
- 「実社会とのかかわりを意識した新聞教育」 80
 芽室町立芽室西中学校（新規校） 掛水 成幸
- 「新聞を活用した授業実践～総合的な学習の時間・国語科での実践～」 84
 札幌市立北辰中学校（新規校2年目） 加藤 香織
- 「『時事を知り、意見をもつ』ための新聞の活用
 ～より多様な方法で情報を得るために～」 88
 札幌市立あやめ野中学校（継続校2年目） 桑山 美由紀
- 「本校生徒の実態に合わせた新聞活用の取組」 92
 平取町立平取中学校（継続校2年目） 金丸 剛輝
- 「情報収集力の獲得から、情報編集力に広げる新聞活用の実践」 96
 浦幌町立上浦幌中学校（継続校2年目） 中村 宏喜
- 「新聞記事を読んで地域と社会への理解を深めよう」 100
 函館市立銭亀沢中学校（継続校2年目） 平沼 和彦
- 「生徒が主体的に新聞を活用し、SDGsの17の目標に迫る」 104
 札幌市立もみじ台中学校（継続校3年目） 佐藤 尋之
- 「新聞が身近にある日常を感じ、『読む力』と
 『社会を知り、考え、つながる力』を育む」 108
 むかわ町立穂別中学校（継続校3年目）
 片岡 日菜子、北村 拓海、日下 剛、タケオ 菜々子
- 「報道からふりかえる震災学習～1枚の報道写真が物語る被災者の思い～」 112
 むかわ町立鵲川中学校（継続校4年目） 片岡 鉄也
- 「新聞を読んで読解力、思考力、表現力を高める」 116
 小樽市立北陵中学校（継続校6年目） 窪田 達大

義務教育学校

- 「義務教育学校1年目のNIE活動」 120
富良野市立樹海学校（継続校4年目） 西川 博司

高等学校

- 「新聞に親しみをもたせるための実践」 124
北海道函館高等支援学校（新規校） 山本 正彦
- 「新聞から情報を読み解く力」 128
市立札幌みなみの杜高等支援学校（継続校2年目）
本間 崇嗣 他1学年担当教諭
- 「新聞記事を活用した地域探究学習の取組」 132
北海道釧路東高等学校（継続校2年目） 山本 憲一、山岸 皇
- 「新聞を読む、活かす。」 136
北海道富良野高等学校（継続校2年目）
北村 智裕、清野 俊也、石川 佳奈、浅野 浩
- 「新聞を活用した学びの実践～朝のSHRでの
新聞記事の活用と高大連携探究活動における取組み～」 140
北海道科学大学高等学校（継続校3年目） 山下 卓
- 「『日常的・継続的』な新聞活用の取組の実践」 144
北海道札幌手稲高等学校（継続校4年目）
渡邊 昭博、嶋崎 俊樹、櫻井 智行
- 「新聞記事を利用した授業づくり」 148
星槎国際高等学校帯広学習センター（継続校4年目）
高橋 知行
- 「新聞を通じた出会いと原体験」 152
札幌新陽高等学校（継続校4年目） 高倉 沙希

編集後記

- 北海道NIE推進協議会 NIEコーディネーター 上村 尚生 156



Newspaper in Education

2022

NIE 実践報告

＜中学校 国語科 新聞ワークシート＞

「物価対策」要望倍増
内閣府調査 最多は社会保障整備

内閣府が24日付で発表した国民生活に関する世論調査によると、政府への要望で力を入れるべき分野（複数回答）で「物価対策」と答えた人が64.4%に上り、昨年1月に公表した前回調査の32.9%からほぼ倍増した。内閣府によると、調査方法が異なり単純に比較できないものの、第2次オイルショック以来最も高い割合という。

政府への要望は「医療・年金などの社会保障整備」が64.5%で前回同様トップ。他に「景気対策」62.6%、「高齢社会対策」52.0%だった。物価対策は前回8位から2位に急上昇した。内閣府の担当者は「ロシア

アのウクライナ侵攻以来顕著に物価が上がったではないか」と分析し、一方、前回の「新型コロナウイルス対応」は0%にとどまり、前回8%から大きく下げた。日常生活での悩みや不安を感じている「どちらかといえば感じている」との回答は78.0%で、この質問項目の記録がある1981年以降、過去最多だった前回はさらに0.4ポイント上回った。悩みや不安の具体的な内容（複数回答）は、「老後の生活設計」63.5%、「自分の健康」59.1%、「今後の収入や資産の見通し」57.1%の順だった。

2023年1月25（水）朝刊

- ①内閣府が発表した国民生活に関する世論調査で、前を入れるべき分野は何か、記事の中から見つけなさい。

「救国坑夫の像」あすまや設置へ
茨城県
「救国坑夫の像」は、戦時中、戦死した兵士の遺骨を収容する慰霊施設として、1942年に茨城県日立市に設置された。像は、戦死した兵士の姿を模したもので、その姿を看取する人々の心を揺るがす。像の設置は、戦時中の歴史を後世に伝える重要な役割を果たしている。茨城県は、この像を「救国坑夫の像」として、あすまやとして設置することを検討している。像の設置は、戦時中の歴史を後世に伝える重要な役割を果たしている。茨城県は、この像を「救国坑夫の像」として、あすまやとして設置することを検討している。

夕張 風雪の劣化防止、来月完成
夕張市は、市内の風雪の劣化防止のために、来月に完成予定の工事について、関係者らと協議している。夕張市は、市内の風雪の劣化防止のために、来月に完成予定の工事について、関係者らと協議している。

備」「景気対策」「高齢社会対策」と様々あるが財障はどうあるべきか、考えを書きましょう。



デジタルとアナログの融合

～必要な情報を必要な方法で集め、活用できる子どもたちに～

札幌市立福移小学校 教諭 福本 勇太

1. はじめに

本校は、北海道札幌市の東区に位置しており、各学級1学年、全校児童67名の小規模特認校である。また、札幌唯一の小中併置校であり、次年度からは「札幌市立義務教育学校福移学園」として新たなスタートを切る。

2. 児童（生徒）の様子

本校は、小規模特認校のため、ほぼ変わらぬメンバーで9年間を過ごすことになる。環境が変わらないため安心して学校生活を送れる一方で、ずっと一緒だからこそ集団をよりよくしていこうという意識や社会に参画しようとする意識を高めていくことが難しい実態もあった。そこで、新聞を活用することで社会を知り、社会に目を向け、社会に参画しようとする子どもたちにしたいと思い、今年度からNIE 教育実践指定校として取組をスタートした。その第一歩として、GIGA スクール構想により一人一台端末が実現したので、今年度はデジタルとアナログの両面から新聞をどのように活用できるのかを探ることにした。

3. 実践の内容

① 新聞オリエンテーション

子どもたちに新聞を読んだことがあるかを聞いたところ、ほとんどの家庭で新聞を取っておらず、読んだことがない児童が多いことが分かった。そこで、まずは新聞の特徴や読み方を知るために、5年生国語科「新聞を読もう」と関連させて、オリエンテーションの時間を取った。じっくりと新聞の記事を読むことで、なんとなくしか知らなかった新聞の

を詳しく知ることができ、多くの児童が新聞に興味をもつようになった。



② 朝の会での新聞記事紹介

新聞の特徴や読み方がわかったところで、新聞を読む機会を全員に作るために、日直の当番活動として朝の新聞記事紹介を行うことにした。毎日、日直が一つの記事を選び、要約し、感想を発表する。発表後は、みんなが見られるところに掲示し、繰り返し読むことができるようにした。当番活動にすることで、学級全員が新聞に親しむことができ、朝から教室で新聞を読む子どもたちの姿が見られるようになってきた。



③ クラスルームで新聞記事を紹介

本学級では、毎日、一日の予定や連絡をクラスルームに書き込むようにしており、子どもたちは、登校するとすぐにクラスルームを確認し、一日の目標を入力している。クラスルームを活用する習慣が身に付いたので、デジタルでも新聞に親しめるように、連絡とともに教師から一日一つ新聞記事を紹介することにした。記事を読んだら、コメントに感想を書くことにしている。当番ではなく、時間があるときに読んでみてねと伝えたところ、少しずつ感想を書き込む子が増えてきており、デジタルでも新聞を読む習慣が身に付いてきた。

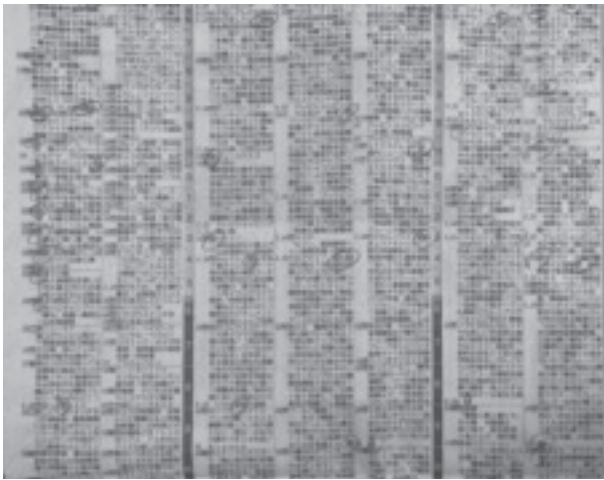


④ 国語科の学習として北海道新聞小学生新聞グランプリに挑戦

新聞というメディアに普段から親しむようになったことで、学習のまとめとして「新聞を作りたい」という声が子どもたちから上がるようになった。そこで、国語科「みんなが過ごしやすい町へ」「新聞を読もう」と関連させて、自分たちが考えた「札幌市民みんなが過ごしやすい町にするために大切なこと」を新聞にまとめ、小学生新聞グランプリに応募した。情報を集める際には、新聞、インターネット、取材などさまざまな方法の中から自分で選択し、主体的に情報収集する姿が見られた。また、記事を書く際には、北海道新聞社に出前授業をお願いし、新聞の作り方を教えてもらった。新聞のプロに教えてもらうことで、新聞をより深く知ることができ、新聞作りに熱中する姿が見られた。学校賞をいただき、新聞を通して達成感も感じることもできた。

⑤ 社会科「情報産業とわたしたちの暮らし」における活用

社会科の学習では、新聞のテレビ欄を活用した。今のテレビは、ボタンひとつで番組表が表示され、見たい番組を簡単に選ぶことができる。そのため、子どもたちは新聞のテレビ欄をじっくりと読むことがなかった。そこで、テレビではどんな番組を放送しているのかを知るために、一人一つ新聞を手に取り、テレビ欄をじっくりと読み込んでみた。すると、『N』とか『天』っていうマークがたくさんある。」「みんながテレビを見ることができる時間帯に人気のバラエティー番組を放送しているのではないか。」「よく見たらすごいたくさんの番組が一日で放送されている。」「ニュースは一日の中で何回も放送されている。」など、今まで気付かなかったことに気付くことができた。



4. 成果と課題

(1) 成果

① 情報収集の手段を広げた新聞

一人一台端末の実現により、子どもたちは、「どのような方法で情報を集めるか。」を考えると、インターネットが最も身近な情報収集手段となっていた。もちろん、インターネットは瞬時にさまざまな情報を集められる便利な方法だが、便利であるがゆえにそれ以外の方法を子どもたちが選択しなくなっていた実態もあった。日頃から新聞に触れ、新聞にはインターネットとは違うよさがあることに気付いたことで、情報収集の場面において、新聞を活用したり、図書室の本を活用したり、インターネットを活用したりと、自分たちで調べる方法を選択して学ぶ姿が見られるようになった。また、「インターネットだと、サイトによっては信用できないものもあるね。」「新聞は、記者の方が取材しているから信用できるよね。」と、たくさんある情報をそのまま使うのではなく、情報が信用できるものなのかを考え、取捨選択することができるようになってきた。今では、教室に行くとき当たり前のように新聞を読んでいる。



② 新聞を通して生まれた社会参画の意識

毎日、新聞記事を通してさまざまな社会の出来事に触れ、社会を知ること、学校外のことに目を向けることができるようになってきた。教室に行くと、「先生、2月からまた値上げですね。」「コロナが2類から5類になるみたいですけど、マスクが個人の判断は難しい気が…。」「この前の暴風雪でけがした人がいたんですね。」など、社会のことに興味をもつ姿がたくさん見られるようになった。そういった視野の広がりから、「自分たちも学んだことを学校外に発信してみたい」という思いが生まれ、小学生新聞グランプリへの挑戦につながった。小規模校であるがゆえに、一人一人が自分のよさを発揮し、力を伸ばしていけるというよさがある一方で、その力を発揮する場面がなかなかないという実態があった。新聞のおかげで、学校で身に付けたことを学校内で終わらせるのではなく、学校外で発揮しようとする思いが生まれ、子どもたちの世界が広がった。

③ 他学年への広がり

5年生が日直の当番活動として取り組んでいる新聞記事を廊下に掲示していたところ、「わたしたちの学年でも新聞の取組をしてみたいのですが、一緒に取り組んでもいいですか。もっと社会に目を向ける子どもたちになってほしいんです。」という声をいただいた。そこで、廊下に新聞記事コーナーを設置し、他の学年も見ることができるようにした。

一年間取り組んできたことで、他の学年でも新聞に興味をもつ児童が見られるようになった。



④ 係活動への広がり

新聞の取組は、係活動にも広がった。普段から新聞に触れてきたことで、「係活動で学級新聞を作ったら楽しいのではないかな」という意見が出され、前期にはなかった「新聞係」が後期に発足した。タブレット端末でみんなにアンケートを取ったり、直接取材をしたりして情報を集め、月に1～2回、紙の新聞とデジタルの新聞を発行している。新聞が、「学級をより楽しく豊かにする」ことに繋がった。



(2) 課題

① 各教科における新聞の活用

日頃から新聞に触れる機会を作ることによって多くの成果があった一方、各教科における新聞の活用については課題が残った。社会科以外の教科ではなかなか実践することができなかった。今年度の取組を通

して新聞が身近なメディアの一つになったので、次は、新聞を各教科においてどのように活用していくのか、各教科で新聞を活用することでどのような資質・能力を育むことができるのかを考えていきたい。

② 義務教育学校としての取組へ

一年間取り組んできたことで、他学年にも新聞の取組が広がったが、まだ学校としての取組にはなっていない。本校は、次年度から「義務教育学校」として新たなスタートを切る。小中一貫校、小規模特認校という学校の特徴を生かし、中学生（次年度からは7年生～9年生）も含め、1年生～9年生の全ての学年で取り組んでいけるようにしたい。

5. おわりに

新聞を活用することで、子どもたちの世界は大きく広がる。学校は小さな社会であり、子どもたちは小さな社会人としてたくさんのことを学校で学ぶが、学校内で完結してしまうことも少なくない。学習のまとめとして新聞を作ることがあると思うが、なんとなく作って掲示して終わりということがないだろうか。それでは、社会に参画しようとする子どもたちにはならない。普段から新聞に触れることで新聞とはどのようなものかを知ることができ、情報を活用する力がつき、そして新聞記事を通して社会のことを知ることができる。社会を知り、社会が分かることで、自ら社会に関わろうとする態度を育むことができる。今回、NIE 実践指定校としてたくさんの新聞に触れる機会をいただき、子どもたちの視野は間違いなく広がった。新聞を通して、情報の信頼度を考えるようになった。いろいろな情報収集の方法から、自分で選択して学ぶようになった。そして、社会を知り、社会と関わろうとする姿が見られるようになった。小規模校だからこそ、学校で身につけた力を学校外で発揮し、社会に参画する子どもたちになってほしいと願っている。それを実現する一つの重要なツールが、新聞であることを実感した一年だった。

新聞を読んで自分の考えの幅を広げる

札幌市立緑丘小学校 教諭 長谷川 美雪

1. はじめに

本校は、27 学級 児童数約 900 名で、中央区の中でも大規模校と呼ばれる学校である。「心が動く学校～あこがれとありがとうでつながるみどりっ子」を重点に教育活動を進めている。日常の授業研究を推進するにあたり、研究主題を「学びに自分の意志をもつ子」、副主題を「自己決定力を高める」とし、子どもが自分自身の行動を決めるときによりよい行動を選択できるように研究を進めている。

新聞は国語科などの教育課程にも含まれていることもあり、その場合は活用することがある。しかし、子どもにとっては、絵の具のときに机に敷くものや遊びに使うものとしてのイメージが強く、新聞の中身のよさの実感薄い。また学習で使うこともさることながら、新聞で他の人の考えに触れることで、本校の研究副主題である、「自己決定力」を高めていきたいと考えている。



2. 新聞に対する意識調査

本実践を行うにあたり、児童が日常からどれだけ新聞に親しんでいるか、新聞に対してどのようなことを思っているのかの調査を Google form を利用したアンケートで行った。以下が結果と分析である。(34人が回答)

設問1：新聞を家ですべて読めますか。



設問2：新聞は好きですか。



設問3：新聞のよいところどんなところですか。

- ・いろいろな情報が5分で分かる欄があること
- ・自分のペースで読めること
- ・とくにない
- ・テレビを観なくても(見逃しても)情報が手に入ること
- ・見出しが大きくてすぐわかること
- ・子ども新聞が読みやすい
- ・面白い

- ・ いっぱい文字が書いてあり、分かりにくい
- ・ ない
- ・ 字が小さい
- ・ 記事と記事の仕切りが分かりにくい
- ・ 直近のニュースが載っていない
- ・ 漢字が多くて読めない
- ・ 開きにくい

アンケート調査から、半数以上の家庭で新聞をとっておらず、読む機会がないことがわかった。また新聞は大人が読むものとしての意識が強い。子ども新聞も見ることがない子が多く、情報はテレビで知ることが多い。(社会科の学習から)

- ① 新聞に親しみを感じる
- ② 考えを広げ、自分の行動を決める力を高める

朝の会や時間が空いた時などの10～15分間で10回ほどの実践を重ねた。初めは記事を紹介し

2022. 7. 5 北海道新聞

T 考えたことをそのまま書いてみよう

1871は、そのに賛成で、
新政府、かみいそう、たかみ、すそ、たふとて、新たにきまぬ
命、かみい、あな、かん、境、下、なまて、い、か、け、れ、お
たふ、ない、とて、に、き、肉、得、た、と、ほ、く、も、か、み、い、さ、う
た、か、さ、を、た、け、ど、に、変、て、少、し、で、も、か、み、い、さ、う
う、命、を、減、ら、ぬ、と、思、い、し、た、と。

これからのために自分から「ありがとう」といわれるのは心の中で
こがあたりまえだと思っていたけれど、この文を読んだあつためて
「ありがとう」という言葉にありがとうをみえおんじました。

これを読んで「ありがとう」はみんなを笑顔に
させる言葉なんだと思いました。たが自分
も「ありがとう」は一つ一つに「ありがとう」といっていき
たいです。あと、自分も「ありがとう」を言てま
いるように「ありがとう」をいってま。

私も「ありがとう」と言われたが
うれしいです。みじかなことでも
「ありがとう」と言われたらいい
気持ちになるので大切な言葉だと思
います。

日常から常に「ありがとう」という
言葉をたくさん言えるように
がんばっていきたいです。

一つ目の実践より、自分の生活と比べての記述が
増えたことが分かる。

4. 成果と課題

成果

・「今まで～だったけど」や「これから～していきたい。」と自分の生活と関係させて考えている人が増えた。

・野良猫の実践では、新聞に書かれているものを何でも鵜呑みにするのではなく、「批判的にみる」視点が情報教育につながっていくと感じた。

・子どもの実態に合わせて記事を活用することで、学級経営にもつながる。実際にいる人の考えだからこそ、より現実的に受け止められる良さが新聞にある。

課題

- ・書いて終わりになってしまったので、もう少し交流場面を増やすとより考えが広がる。
- ・10分～15分だとしても日常的に時間を確保するのが難しいと感じている。
- ・正直、新聞離れを感じている。テレビの方が情報分かりやすいという児童が多い。

今回の実践にあたって、北海道新聞、毎日新聞、朝日新聞を中心に教材を探した。時事を敢えて取り上げずに実践を行ったが、新聞は様々な年代の様々な考えに出合えることが分かった。学級経営で大切にしている「挨拶」「感謝の言葉」「相手意識」「自分から」などに関わる考え方や、高学年で生まれる悩み「恋愛」「友達関係」「勉強」などの考え方を知ることができる。新聞の良さについて改めて感じられた実践であった。



新聞を活用した分かる・できる・楽しい学習の展開

札幌市立明園小学校 教諭 檜 克博

1. はじめに

本校は札幌市東区に位置する中規模の学校である。今年度は「一人一人がキラリ輝く子の育成」に重点に置き、学ぶ力の育成に向けた教育活動を行っている。具体的な改善策の取組として「子どもたちが必要感をもって関わり合う対話の工夫」について共通理解を図り、全教職員で推し進めている。

そこで、本校の目的とする教育活動を推し進める手段として、新聞活用の有効性を探った。NIE 実践校初年度として次の2点を重点に教育活動を行った。新聞に親しみながら子どもたちが主体的に学ぶ姿を目指すこと。また、新聞を活用することで、必要感をもって学び合う姿を醸成すること。これら2点を通して、子どもたちが必要感をもって関わり合う対話が成立する学びになっているかを検証していく。

2. 児童（生徒）の様子

素直で明朗な児童・生徒が多く、のびのびと学校生活を送っており、仲間と協力し集団行動やきまりを遵守する姿勢もみられる。一方、自ら進んで問題を発見し解決しようとする主体的・積極的に取り組む意欲が課題である。

本校の児童は新聞を読む機会がある子は少なく、新聞に初めて触れる子も多い。国語の学習で新聞の特徴や読み方などを学習しているが、実際には新聞を継続的に読んだことがない子が多く、親しむ機会が必要であった。幸い日常生活でテレビなどを通して、社会面や地域面の話題に関心がある子も少なからずいる。学びに対して子どもたちの関心が広がる姿や新聞に親しむ姿、新聞を活用することで意欲的

に学び合う姿を期待している。

3. 実践の内容

新聞を活用した教育活動を行うに当たり、新聞に触れる機会が初めての子が多いので、次の2点を基本として、新聞活用を行った。1つ目は、日常的に触れる機会を確保すること。2つ目は、学習活動の中で新聞を活用する必然性をもった上で行うこと。実践内容は以下の4点である。

① 学ぶ意欲を喚起する掲示物

新聞にどんな話題が書かれているのかを知らない子が多いという実態があった。そこで、日常的に新聞に触れる機会を確保しつつ、視覚的な面から学ぶ意欲を喚起することをねらい、環境整備を行った。



上記のように、見てほしい記事を壁に掲示した。記事の内容はいじめ撲滅、地域の問題など、学ぶ必要性のあるものを選択した。また、記事には、着目点に罫線や一言などを添え、全文を読まなくても把握できるようにした。幸い、教室隣が図書室であり、児童が通行することもあり、掲示場所に適していた。

全校児童にも新聞に触れる機会を得る事ができ、学習と社会との接点を自然と知る機会になった。

② 新聞活用を広げる ICT 機器の活用

朝読書や授業中に関連する記事について子ども達に配付し、読んでもらった。その際に、新聞記事の PDF を Google クラウドに掲示し、それぞれが同じ記事を読むことをした。以前であれば、必要な記事を切り抜き、印刷をして配布していた。ICT 機器の活用によって、配布が容易だということと学びの履歴を残す事ができるという利点があった。



読売新聞
2022 年 5 月 31 日

った。その場所にもよるし、あまりじぶんの顔で判断する人はいないかなと思ったからです。

・マスクをすれば素顔が見えなくてメリットだけど、初対面だと顔が分からないから顔を覚えてもらえないデメリットもある。

以上から分かるように、子ども達は多方面からよく考えられた発言をしている。自分と立場が異なる意見の違いを認識し、理由を理解しようとしている。単純に両極端の違いを感じているわけではなく、様々な考え方があつたことに気付いている。

このように、ICT は瞬時に多くの考えを集約する特性を持っていることから、学習環境整備の容易さだけではなく、子ども達の学びにおいても思考力を育てることに寄与することができると言えるだろう。

③ 教育課程で新聞を活用する必然性をもたせる

小学校では様々な教科間で学習の関連を踏まえ、季節や地域の実態を活かした教育活動が行われている。子ども達が主体的に学習するためには、児童の実態を把握し、学ぶ上で必然性をもたせることに力を置いていることが多い。新聞活用する際には、学んでいる内容と関連を図り、実生活でどのような形で表れているのかを見えるようにしている。

実践1 国語：聞いて考えを深めよう

話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめる学習である。新聞記事を読んで、自分の考えをまとめた。そして、各班で交流後に、自分の考えが変わったのかを Google フォームズに記入し、自動集計したものを子どもたちと共有した。

<子ども達の声>

- ・この班ではマスクを付けない生活に戻れる人が多いんだなと思った。
- ・話し合ってみても、自分の意見は変わらない。グループのメンバーに目から下をコンプレックスに思っている人もいるという、意見に共感しました。
- ・戻れない人が多かったし、やっぱりマスクは無理に外さなくてもいいと思う。
- ・班で話し合っ、戻れないから分からないに変わ

実践2 社会：子育て支援の願いを実現する政治

政策の内容や計画から実施までの過程、法令や予算との関わりなどに着目して、国や地方公共団体の政治の取組と国民生活を関連付ける学習である。



北海道新聞 2022 年 6 月 1 日

自分たちの暮らしに関わる重要政策はどのように決議されているのかを知らないという実態があった。そこで、市議会報告について新聞記事にあったので、子どもたちに Google クラスルームで見るように活用した。

<子ども達の声>

- ・本当に決めているんだ。
- ・市議会議員さんを初めて知った。
- ・学校にクーラーを付けることを決めているなんて驚いた。
- ・自分たちのくらしのことを考えて決めていることが分かった。

以上のように、教科書で学んだことが実際の生活でどのようにつながっているのかは、新聞記事でなければ知ることができない。教科書には書いてないので、自分の実生活との関連を図るうえで有効なツールとなった。

実践3 総合：ともに生きる（福祉）

社会には様々な方が暮らしており、知ることを通して自分がどのように関わっていくのかを考えることを学習の目的としている。

子どもたちは、障がいをもって暮らしている方や高齢者の方の暮らしの実態を知らないので、映像視聴や疑似体験をすることで学びを深めた。

当事者の話を聞く活動を行おうと考えていたが、コロナ禍で難しいこともあり、新聞記事を扱うことによって、暮らしぶりや思いに迫ることを意図して扱った。



北海道新聞

2022年12月09日



北海道新聞 2022年6月8日

体験を通した学習をしているので、子どもたちは分かった気になっている子が多い。「目が見えないことは怖い。」「歩くのも大変だ。。」ということは感じている。しかし、実際はそういうものではなく、他の人と楽しみ方が違うことや周囲の誤解から困ってしまう経験があることが、記事を通して理解を深めていた。特に、新聞記事が取材に基づく生の声をきちんと届けている特徴があるので、当事者の実際に学ぶ良い機会になった。

④ 答えのない学びを自分事として考える

学校の学びには解があるものが多い中、実際の社会問題には簡単に答えが出ないものが多い。まずは自分の立場を決めることや仲間と話し合うことで、様々な考え方に触れる機会を増やしていく活動を行った。

実践4 国語：筆者の考えを読み取り、社会と生き方について話し合おう

文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめ、意見の交流をしながら自分の考えを広げる学習である。

教科書を扱う前に学習する題材として自分の考えをまとめる経験することと、意見の交流を通して様々な考え方を知る楽しさを経験した。それは、コロナ禍でマスク生活をしている中、今後自分はどうすべきかを考える学習を行った。

5月にすでに扱った新聞記事を再度活用した。なぜ同じ記事を活用したかという点、マスク着用について社会の認識の変化を捉え、仲間との話し合いによって自分の思考の変化を認識していただろうと考えたからである。

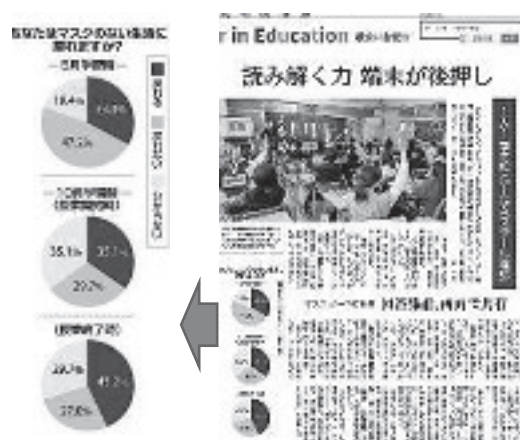
記事を再度読んで話し合った後、下記の「どう思いますか」という記事を読んで、様々な立場を知ることができた。



朝日新聞 2022年6月8日

<子どもたちが書いた考えの一部>

- ・戻れる→コロナがはやる前はみんなマスクをしていなかったから。
- ・戻れない→今の生活に慣れてしまったし、今はマスクを家以外で外すとすると、ありえないという気持ちになってしまったから。
- ・分からない→マスク生活に慣れすぎてマスクを外して顔を見せることが恥ずかしいけれど、みんながマスクを外していたら戻れるかもしれない。



北海道新聞 2022年11月28日

上記は学習前後に行った Google フォームズで表したアンケートの割合である。5月学習時には、マ

スクのない生活に戻れないが約半数を占めていた。また、11月の学習前では全てが拮抗していた。学習後、「戻れる」が約半数くらいに増えた。

以上のことから分かるように、新聞記事を活用して話し合ったことで子どもたちに迷いや思考の変化が生まれ、自分事として考えていた。

4. 成果と課題

(1) 成果

今年度、新聞を活用することを通して、自分自身と社会とのつながりの視点を広げ、必要感をもって関わり合う対話が成立する学びをすることができた。

- ① ICTの活用による記事配信、集約の手軽さ
- ② 学習に新聞活用の必然性をもたせる
- ③ 自分の立場を決め、思考を促す活動

上記の3点のように、新聞を活用することで、「分かる・できる・楽しい学習」の展開に寄与することができた。今後も主体的に学ぶ一つの方法として、可能な範囲で新聞を活用していきたい。

(2) 課題

記事を読み解く難しさがああり、個人差があったので、読み込む場所を限定したり、子どもたちが理解したりできるものにした。子どもたちが主体的に学ぶ上で、継続して活用方法を考える必要がある。

- ① 発達段階に即した記事活用の在り方
- ② 学ぶ必然性が伴う記事活用の在り方

上記2点のように、小学生においては記事の活用の在り方には慎重にしなければならない。読むことができることと理解できるようにすることが、主体的な学びには大切な条件であるので、今後も大切にしていきたい。

5. おわりに

本校の実践について北海道新聞の記事に掲載していただいた。育てる力や指導の意図を汲み取った取材をしていただいた北海道新聞社 森田記者に重ねてお礼を申し上げたい。

2022年度 NIE実践報告

0から1へ ～学校に新聞を持ち込む中で感じたこと～

旭川市立永山小学校 教諭 牧野 広太



1. はじめに

本校は平成29年度に開校120周年を迎えた、歴史ある学校である。

今年度よりNIE実践校に指定され、子ども達が新聞を身近なものとして感じられるような取組を進めてはきたものの、まだその活動は細々としており、学級内での少しの取組に限られている。前任校での実践があったため、まずは同様のことをやってみようと試みた1年間であった。

経験上、いざ実践校になったからといって、すぐに学校全体が変化するものではないことは理解していたので、まずは学級内に新聞の文化を浸透させようと活動してきた。今後、「学校」や「地域」へと、少しでも対象が広がっていくことを願っている。

紙媒体としての新聞に触れる機会は、図工や書道の際のみと言っても過言ではない。児童にとって、タブレットが欠かせぬ相棒となった今、学校現場からは新聞が急速に失われつつある。新聞にはどのようなよさがあるのか、小学生にとって、紙とデジタルをどのように使い分けるのがよいのかなど、様々なことを考えながら、この1年を過ごしてきた。

2. 児童の様子

本校の児童数は589名（R5. 1. 1現在）であり、市内一の規模だが、年々減少してきている。

新聞を購読している家庭は、およそ32%となっ

ており、新聞離れが著しい。一方、市内のほぼ全家庭と近郊の町（約17万部）には、週2回フリーペーパーがポスティングされており、これを新聞と思っている児童も多数いる。

本校には、所謂「フリースペース」と言われる場所が存在せず、教室と廊下と体育館のみといった校舎である。コロナ禍においては実現が難しいにせよ、子ども達が自由に集まって好きなことができる開放的な空間がない。本来であれば、そのような場所に新聞コーナーを設置できれば、もう少し身近なものとして新聞を手にとることもできるのかもしれない。そのため、図書室の一角を貸していただき、簡素なNIEコーナーを設けた。学校司書によると、展示の仕方をいろいろと工夫してはいるものの、なかなか足を止めて新聞を手にする児童は少ないという。しかし、アニメのキャラクターが前面に出てくるような記事は割と注目されることが多いとのことだった。



本校児童の新聞購読の割合

低学年	約25%	中学年	約27%
高学年	約43%	全体	約32%

3. 実践の内容

① 学級新聞

過去に個人的に取り組んでいたもので、本校に着任してから、頃合いを見て開始できないかと考えていた。主に高学年の担任時に実践を重ねていたため、今年度6年生を担当することになり、ここがチャンスと再挑戦した。

本校にとって馴染みのない活動だったため、最初は様々な面で困難を伴ったが、少しずつハードルを上げていき、2学期末には発行の頻度も高まり、学級内は全員分、その他全クラス、全職員に子ども達が配布している。過去には学級全員で取り組んだこともあったが、今年度は係で製作することにした。

ひとつの目標として、全国コンクールに応募することをめざしていたが、そのコンクールが前年度で終了したということが12月になって判明し、係の児童は大変ショックを受けていた。しかし、上川・旭川NIE研究会に「実践特別賞」として表彰していただけることになり、校長室で賞状を受け取ることができた。

NIE実践校になったことで、より新聞が身近な存在となり、みんなに伝えたいニュースを選択する力、丁寧な字と正しい文章で書く力、情報を発信する力等、様々な能力が向上したと感じている。今後どうなっていくかは分からないが、学級新聞を上手に活用さえできれば、非常に効果的な取組だと考えているので、形にこだわらず、実態に照らし合わせて次年度以降もどこかで継続する場があればと思っている。



② まわしよみ新聞

毎日帰りの会で班毎（3～4名）に発表している。考案者の陸奥賢氏が、自由にアレンジして活動してよい旨をお話されているので、その言葉を都合良く受け入れ、本来の方法とは大きく変更して実施している。学級の実態に合わせ、そして継続性を第一に考え、無理なく楽しみながらやるのが大切だと考えている。



取組の意図として、次のような順番で考えた。

- 〈1〉 広く社会に目を向けてほしい。
- 〈2〉 タイムリーな活字に触れてほしい。
- 〈3〉 情報を選び詳しく読む力を付けてほしい。
- 〈4〉 文章を要約する力を付けてほしい。
- 〈5〉 集団の前で声を出す経験を積んでほしい。
- 〈6〉 集中して話を聞く力を付けてほしい。

改めて、国語科の重要なポイントが網羅されていることが分かる。僅かな期間ではあったが、6年生のこのタイミングで上記のような力を少しでも向上させることに、ある程度の意義はあったと考えている。また、コロナの影響が大きいのだと思うが、とにかく人前で声を出すことに対する抵抗が非常に大きかったので、〈5〉の収穫が大きかったと感じている。

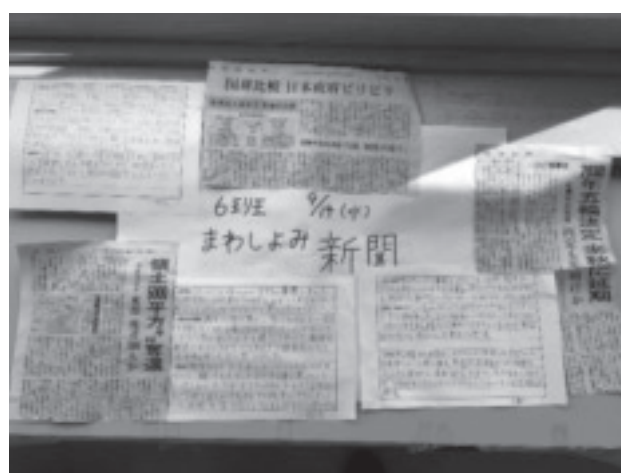
実践校となったことで、様々な新聞が届くようになり、学ぶ土壌が豊かになったことはよかった。通常の授業にプラスされる要素が大きく、活用できる場面が増えたことは、それなりの意義があったと考えている。

【事実の要約】
【感想】
【記事タイプ】
【タイプの正誤】

【事実】
【意見と根拠】
【読後】

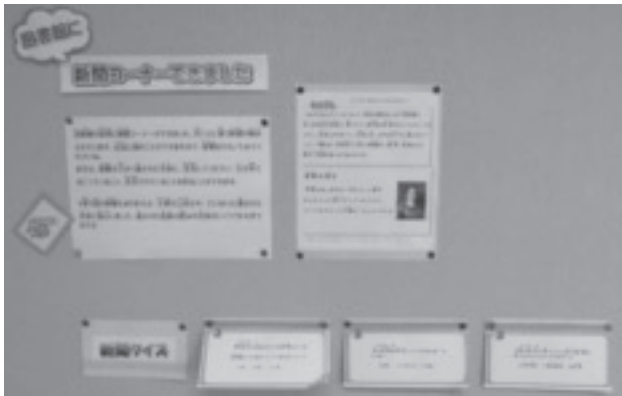
【ジャンル】（政治・経済・スポーツ・社会・地域・教育・文化・国際・その他）
【事実の要約】
【意見と根拠】
【読後と理由】
【読後と感想】

↑ 学期ごとに項目をレベルアップ。



4. 成果と課題

本校では、図書館にしか新聞を置くことができないことから、学校司書には数多くの協力をいただいている。児童が実際に新聞に触れる場面を直接見ている学校司書から聞いた話には、本校の実態を踏まえた今年度の成果と課題、そして今後の本校におけるNIE活動のヒントがあると感じた。



～司書教諭から～

- 図書館に新聞が置かれていても、利用している様子はなく、何が置かれているか見る子どもも少なかった。しかし、授業で利用してくれた学年があったことはよかった。
 - 新聞は様々な分野の情報が載っているので、ゆっくり見ていけば児童も興味をもてる内容も多いと思うが、膨大な文字に抵抗があるようだった。写真には目がいくようだが、文章が長いと何のニュースか分からないという声も聞かれた。
 - 本校の児童は読書の習慣がある児童が少ないと感じていて、文字だけの本は敬遠されがちである。文章量が多いと読む気持ちにならないというのは、新聞も同じなのかもしれない。
 - 図書館で聞かれる「興味ない」という言葉が気になる。本を薦めても「それは興味ないから」と断られてしまい、好きなものの幅が狭いと感じる。「文字を読むのが面倒くさい」という言葉も聞かれ、これでは新聞にはつながらないと思う。
 - 文字の苦手な児童に新聞を手にとってもらうには、仕掛けを工夫しなくてはいけないと感じている。漠然と見せても関心をもってもらえない。
- 少しでも世の中のことを知って関心をもってほしい。情報がたくさんあり複雑な世の中なので、興味関心がないからと無知でいることで、世の中との繋がりをもてなくなってしまうのではないかと不安になる。様々な知識を得る中で思考を広げてほしい。図書館に新聞があるということが、誰かの小さなきっかけになるとよいと思っている。

最後の話にすべてが集約されているのではないかな。



5. おわりに

「1から10は簡単だけど、0から1は難しい。」そんな話をよく聞く。大昔から、学校現場に新聞はあれど、あまり有効に活用できないまま、紙は一見時代遅れのような扱いを受けるようになった。本校におけるNIEは、とりあえず0ではなくなったと考えているので、あとはデジタル活用との両立を図りながら歩みを進めていけたらと思っている。

学校司書の話にあったように、この世の中を生きるのに、新聞が誰かの小さなきっかけになることができればそれで十分だと感じている。次年度も、必要だと感じた時に、ずっと新聞を手にとることができる環境をつくり出すことから始めていきたい。



新聞に親しむ小学校の実践

～自分の思いをもち、主体的に課題に取り組む態度の育成～

日高町立厚賀小学校 教諭 大平 真紀

1. はじめに

本校は、全校児童53名の小規模校である。今年度から複式学級が2学級に増え、児童の減少は進んでいるが、その分学年に関わらず広く交流している様子が伺える。校舎は海や漁港に近い立地にあり、周囲には牧場も多い土地柄で軽種馬産業も盛んな地域である。

今年度の重点目標を『創造力と創造力を育み、経験を活かした教育活動の展開』とし、その中で総合的な学習の時間のカリキュラム改善に取り組んできた。「探究的な学び」の場をつくることを課題とする自校研修の取り組みと連携して、情報活用能力や自分の考えを明確にする力、主体的に課題に向き合う態度の育成に、新聞を使った取り組みが役立つのではないかと考え、NIE教育に向き合うこととなった。実践指定校としては1年目であり、本年度は環境整備や国語の授業実践から取り組み始めている。

2. 児童（生徒）の様子

本校は、町内の図書館からバスで本を運び、学校で図書館の本を借りる「移動図書」を楽しみにしている児童も多く、読書に意欲的に取り組んでいる様子も伺える。一方、児童や対応できる教員数の少なさもあって図書室の開館日が限られていることや図書室の冊数自体が少ないこともあってか、興味のない児童においては全く読書をしない様子も見られる。

NIEの取り組みを開始するにあたって、ただ新聞を見えるところに置くだけでない、興味を引くことの出来る工夫や取り組みが必要であることが課題の一つであった。

3. 実践の内容

（1）新聞に親しむ環境づくり

①新聞コーナーの設置

まず、日常的に新聞に触れる場を設けるために、校舎内の最も人通りの多い場所に書面台を置き、「地元の情報が載っている面」「子ども向けの新聞」を中心に新聞コーナーに設置した。地域の情報や同年代の活躍する記事などに赤い囲みをつけて掲示すると子どもたちは興味をもって立ち止まっていたようだった。



【児童の反応】

- ・家で読むことがなくなるくらい読んでいる。
- ・新しいことを知れていい。
- ・小学生新聞は読みやすくて良い。

②記事の感想紹介

3・4年生学級では、記事の感想を掲示し紹介する取り組みを行った。自分の興味・関心に基づいて新聞記事を選んだり、引用したりして自分の考えを書くことができるようになり、友達の考えを読む事に楽しみを感じる児童も増えた。

ワークシートとして、北海道新聞の「楽習シート」を活用した。



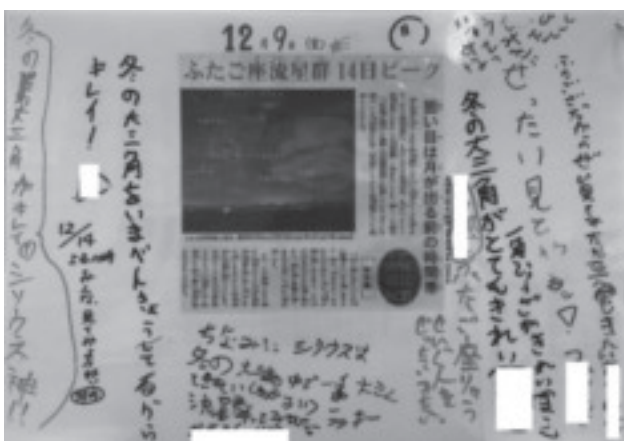
↑ 3・4年生の紹介文を読む、1・5年生

【児童の反応】

- ・こんな見方をするんだなって思って、おもしろい。

③回し読み

同じ記事を読み合って、感想を交流し合う取り組みも行った。学校の読書月間に合わせて実施し、用意された記事の余白に自分のコメントを自由に書き込めるようにして、新聞コーナーに設置した。



北海道小学生新聞 2022/12/8

【児童の反応】

- ・友達と読めると楽しい。
- ・他の人のコメントを読めるからおもしろい。
- ・他の人が書きすぎて、書くスペースがなくて残念。
- ・同じことを考えている人がいて、うれしくなる。

（２）新聞から影響を受ける児童

回し読みの活動を行っている、「みんな同じようなことを書いているから、同じ事を書かなくちゃと思って自分の考えが書けない。」と相談してきた児童がいた。自分の思いを書いたり発表したりすることに苦手意識をもっており、先生に確認するか、友達と同じ意見でないと不安に感じる児童だった。



北海道小学生新聞 2022/12/15

ある日の新聞の記事に、小学3年生からの「自信って何？」という疑問に答えるコーナーがあることに気づき、「先生、今日の新聞わたしのことだ。しかも3年生だって。」と担任に伝えると、それから1週間「自信とか全然ないんだけど、やっぱり言った方がいいのかなー。」などと休み時間ごとにつぶやき担任の周りをうろうろとして過ごした。1週間後、「今日の日記読んだ？わたしずっと思ってたんだよね。先生、みんなに読んでもいいよ。」と本人が伝えてきたのは、クラスのみんなに給食を残さないでほしいという思いの詰まった日記だった。思っていることがあっても言えないけれど、書くことを通じて自分が伝えないと、と気持ちに変化していた。



（３）授業における取り組み

①４年国語「新聞を作ろう」

新聞の構成（リード文、見出し、トップ記事など）や5W1H、物事を伝えるときに必要な情報について新聞を用いて学習した。新聞を書くための知識と簡潔に伝えるための知識を得て、まとめ方を知ると新聞を作成するために必要な情報が見えてくるため、子どもたちは主体的に情報を集めたり、情報を取捨選択したりすることができるようになった。

新聞を書くための知識

簡潔に伝えるための知識

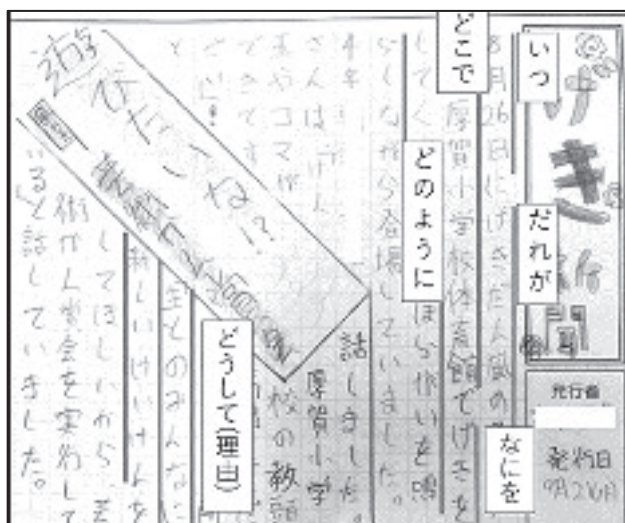
活用

まとめ方を知ると

必要な情報が見えてくる

主体的に情報を集めたり、
取捨選択したりすることができる。

芸術鑑賞会についてまとめた次の新聞では、「なぜ」開催されたのか理由を書く必要があると感じた児童が、インタビューをして新聞にまとめている。



②４年国語「要約しよう」

特別支援学級では、Wordの無料テンプレート「文章要約練習シート」を活用し、新聞の文章を要約する練習に取り組んだ。キーワードや5W1Hを意識して要約し、宿題にも出すことで簡潔に伝えるために必要な情報を見つけることに慣れることができた。

③５年国語「新聞を読もう」

「情報ノートを作ろう」

新聞の仕組みや内容に興味・関心をもつとともに、同じできごとを扱った新聞記事を読み比べて気づいたことについて話し合い、新聞の特長や仕組みを知り、表現による伝わり方の違いに気づくことができた。また、自分の興味のある記事を見つけ、記事を読んで感じたり、考えたりしたことについて、さらに情報を集めてまとめた「情報ノート」を作成し、自分の興味、関心から課題を決めて、考えたことを表現することができた。最後には、宿泊学習で学習した内容について、図や写真の使い方、見出しなどを工夫して新聞にまとめた。

仕組みを知る

主体的に調べ、
表現する

まとめる



（４）新聞グランプリに挑戦（ICTの活用）

バス通学児童の多い学校のため、夏休みに子どもたちが自由に集まることが難しかったが、中には事前に新聞のテーマや記事の分担を相談しておいて、調べたり書いたりする作業を夏休み中に行い、進捗状況の確認や表現の相談のため、タブレット端末を用いて情報交換を行った児童もいた。

これをきっかけに、写真コンテストなど何かに応募しようとする児童が増えた。

(Microsoft Teams を使用)



⑤新聞折り込みチラシの配付



地元の新聞店の協力を得て、3年生の総合的な学習の時間に作成した厚賀の良さをアピールするチラシを新聞に折り込んでいただき、550部を地域の家庭に配付することができた。読んだ人が感想を送れるように表紙にQRコードを添えたことで、地域の方の思いを知った子どもたちは、自分たちの活動に自信をもつとともに、来年度への意欲につながっていた。紙面を活用するものではなかったが、児童が新聞という媒体の良さに気づくきっかけにもなった。

4. 成果と課題

(1) 成果

これまでNIEの実践を通して授業に限らない場面でも、日常的に文章を読む活動、書く活動に親しむ機会を多くもつことができ、**表現することの良さや楽しさを感じていた。**

また、学んだ知識を活用して表現する場面も多く見られた。国語科の学習の中でも取り組むことによって、**情報を活用してまとめ、主体的に活動に取り組もうとする場面につながった。**

(2) 課題

今年度の実践は一部の職員からスタートしていたが、1年間の実践を経て、来年度からは全校での取り組みとして考えていける環境になった。

今年度の実践のどんな部分が児童のためになっていて、どんな取り組みが不足しているのか考えて、来年度の実践につなげていきたい。

5. おわりに



友達とSDGsについて新聞で知った直後の児童はゴムを使って動く図工作品を作る活動で、汚れた海に浮かぶゴミと泣いている亀を作っていた。読むだけでは理解できない内容でも、詳しい友達に教えてもらったり、図や表を見たりすることで理解が深まり、また、**知ったことは使いたい、みんなに知っていることを知らせたい、**という意欲にもつながっていた。今後の実践でも子どもたちの言葉の交流の場を大切にしていける必要性を感じている。

2022年度 NIE 実践報告

新聞を読み、要約する活動を通して、 子どもたちの書く力を高める。

帯広市立愛国小学校 教諭 平岡 あゆみ、大石 秀雄、松倉 彩加

1. はじめに

本校は、明治 37 年に開校し、今年で開校 119 年目を迎えます。かつて広尾線で「愛の国から幸福へ」のキャッチフレーズとともにブームを巻き起こした愛国駅がある農村地帯の小規模校で、全校児童数 25 名である。

全国学力状況調査の結果から、本校は要約する力を高めることが必要であることがわかった。そこで、国語の授業だけではなく継続的な取り組みで、子ども達の要約の力を付けるために、朝学習で新聞を活用して書く活動に取り組んだ。

以下に、本校の NIE 実践指定校 1 年目の実践内容を紹介する。

2. 実践の内容

(1) 新聞記事の掲示

図書室に、低学年でも楽しめるような、新聞記事を紹介している。写真が多く分かりやすい記事を掲示することで、どの学年の児童も抵抗なく、最近の話題や出来事に触れることができるようにしている。



(2) 手に取りやすい新聞

子ども達の目に止まりやすいように廊下に掲示している。



図書室の中には、新聞を置いて読みやすい場所も設置している。



(3) 小学生新聞（子ども新聞）を使った取り組みについて ～愛国小学校 3・4 年生の実践～

① 児童の実態

本校 3・4 年生児童は、3 年生 5 名、4 年生 3 名の合計 8 名の複式学級である。3 年生

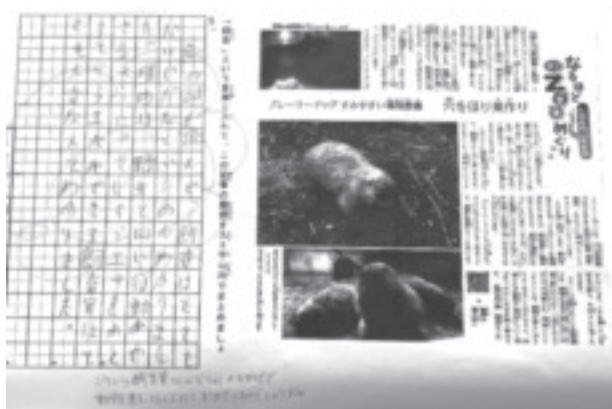
は2年生まで単式学級だったので、手厚い指導が行われてきた。子どもたちは、先生に頼ることに慣れており、受動的な児童が多い。4年生は複式学級を経験してきているので、自分たちで勉強を進めようとしたり、お互いに教えあったりすることができる学年である。

② 朝の会での「要約文」の取り組み

《1学期》

3・4年生は、4月から毎週水曜日の朝学習に、小学生新聞を使った「要約文」の取組を行ってきた。全国学力学習状況調査の結果から、本校は要約する力を高める必要があること、そのためには、国語の授業時間以外にも、継続的な取組が必要であると考えたからである。複式学級ではあるが、3年生、4年生ともに同じ課題での要約文の作成に取り組むことにした。

4月当初は、3・4年生ということもあり、新聞を読むことに慣れていない児童が多かったので、写真のように取り上げた新聞記事を読んで、『〇〇〇』という言葉を使って、90字以内で感想を書く。」という形で1学期間取り組んだ。



③ 要約文の成果

「〇〇〇」という言葉を使った感想を書く形をとったことにより、以下4点の成果がみられた。

- ・新聞記事のどこに指定された言葉があるのかに気を付けて記事を読めるようになった。

- ・新聞記事に触れる機会が少ない児童に、さまざまなニュース（話題）に触れさせることができた。
- ・現在の日本や世界で起こっている出来事の現状を知ることができた。
- ・90字以内で書くという制限を設けることにより、使う言葉を考え書くようになった。

《2学期》

2学期以降は、感想を書くだけでなく、「記事に書かれた内容や取り組みについて〇〇字以内で答えなさい。」といった形で課題を与えるようにした。



④ 要約文の考察

感想は、自分の考えを書けばよいので、記事の内容から離れても、写真やグラフなどを

見て書くことができる場合が多かった。しかし、書く内容をある程度指定する課題となると、記事を読まないで、写真を見た感想をそのまま書いてしまうという要約文となる児童が多かった。このような課題は、中学年には難しく、高学年向きと考える。前任校で高学年を担当した時には、全国学力学習状況調査のように「①・・・②・・・に触れて〇〇字以内で書きなさい。」といった要約文に取り組みさせたが、慣れてくるまで半年近くを要した。新聞記事を使った要約文を課題として出す場合は、以下のような発達段階を踏まえて課題を出す必要があると考える。

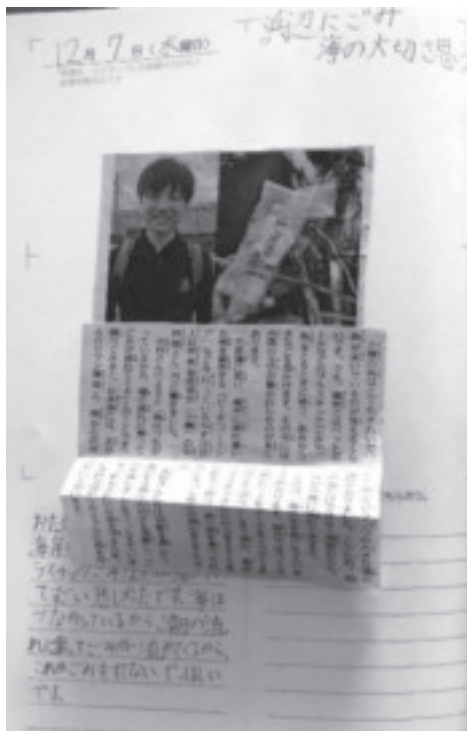
- 第1段階 字数を設けずに記事を読んだ感想を書く。
- 第2段階 字数を設けて、感想を書く。
- 第3段階 字数を設けて、「〇〇〇」に触れる、などして感想を書く。
- 第4段階 「〇〇」とはどういうことか（記事の内容に触れる）について〇〇字で書く。
- 第5段階 （記事の内容から）①・・・②・・・の2つについて〇〇字以内で書く。

⑤ 要約文以外での取り組み ～スクラップ～

児童が興味のある新聞記事をスクラップして感想を書かせた。

要約文で使った新聞がある程度たまってから、この取り組みを行った。

また同じ新聞をたくさんいただく機会があり、全員が同じ新聞から興味のある記事を選んで、感想を書かせることも行った。



⑥ スクラップの成果と課題

○成果

- ・要約文とは違い、時数制限を設けないことにより自由な感想を書くことができ、児童が記事のどこに興味や視点をもっているのかがわかった。
- ・記事を読んでみての率直な感想を書けるようになった。
- ・新聞の記事がどこまでが最後なのかを考えて読むようになった。

○課題

- ・A4版ノートに貼り付け、感想を書いているので、写真のように、記事が多いと感想が読みづらい。
- ・記事を読んでいるわけではないので、記事が書かれているところを切り抜くのではなく写真だけを切り抜いて感想を書く児童がおり、指導が必要である。

(4) まとめ

新聞の記事を使って要約文や新聞スクラップに取り組んだことで、児童が新聞記事のどこに指定された言葉があるのかに気を付けて記事を読めるようになった。また、新聞記事に触れる機会が少ない児童に、さまざまなニュース(話題)に触れさせることができ、現在の日本や世界で起こっている出来事の現状を知ることができた。

今後も、このような新聞の良さを生かしながら、継続的に、発達段階を踏まえながら、新聞を活用し、要約文の力が高まるように取り組んでいきたい。

新聞に親しみながら、情報活用能力を養う。

札幌市立桑園小学校 教諭 竹内 緑・木田 孝紀

1. はじめに

本校は、児童数950名を超える大規模校であり、マンションが多く立ち並ぶ桑園地区に位置する。NIEの実践指定校となり2年目になるが、近年デジタル化が進み、新聞を取っている家庭が減少してきており、新聞を目にする機会も減ってきている印象がある。今年度は、平仮名や片仮名を覚えてたての1年生と、調べ学習4年生のクラスで実践を行った。

2. 実践報告① 1年生

(1) 児童の実態

桑園小学校では、登校時刻から10分間、「いそしむ時間」という時間があり、全校で読書活動を実施している。1年生は、平仮名は1学期にすべて覚えていたので、絵本を読んでいる子が多くいたが、文字の多い本にチャレンジしている子もいた。そこで、早い段階から新聞に親しんでもらおうと、学級文庫に子ども新聞を置いていた。興味をもつ子は多くいたが、初めは漫画や絵、写真を中心に見ている様子が多く見られた。

(2) 実践のねらい

- ・片仮名を読み、書くとともに、片仮名の長音、拗音、促音、撥音などの表記を理解して文や文書の中で使うことができる。
- ・どんなときに片仮名が使われているのかを知り、片仮名を使った言葉に慣れ親しむ。

(3) 実践内容 1年『かたかなを みつけよう』

〈第1時〉

- ・片仮名の唱え歌を音読し、その中から片仮名を確認する。

〈第2時〉 新聞を使用した学習

- ・全員に子ども新聞を配付し、制限時間を決めて「片仮名探し」を行った。見付けた片仮名は、前時で学習した拗音や促音などに気を付けながらノートに書いていった。制限時間が終わった後は、鉛筆を置き発表タイムを行った。個々に違う子ども新聞を配布していたため、身近なニュースや動物の名前など、様々な言葉が出てきた。



（４）成果と課題

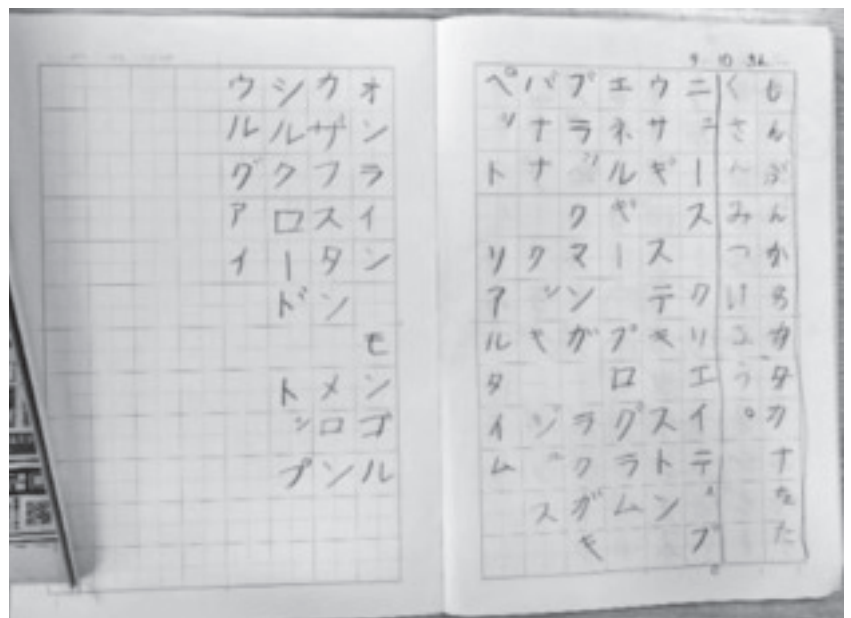
〈成果〉

- ・「たくさん見付けよう」という活動にしたため、新聞（小さな文字）に苦手意識をもつ子も、楽しく活動することができた。
- ・前時に拗音や促音などの書き方をしっかりと学習していたため、ノートに書く時も正しい書き方を意識することができていた。
- ・全員に同じ子ども新聞ではなく、違う子ども新聞を渡したことで、新聞に載っている内容についても興味をもたせることができた。「野球の言葉ばかり出てくるよ。」「エリザベス女王のニュース知ってる！」などと、片仮名を見付けながら、また、友達の発表を聞きながら新聞の内容にも親しむ様子が見られた。
- ・ほぼ初めて新聞の内容に触れた子もいたが、意外と難しくないことに気付き、朝読書の時間に子ども新聞を読む子が増えた。また、空き時間に、自分から片仮名探しをしている子もあり、新聞を身近に感じる機会となった。



〈課題〉

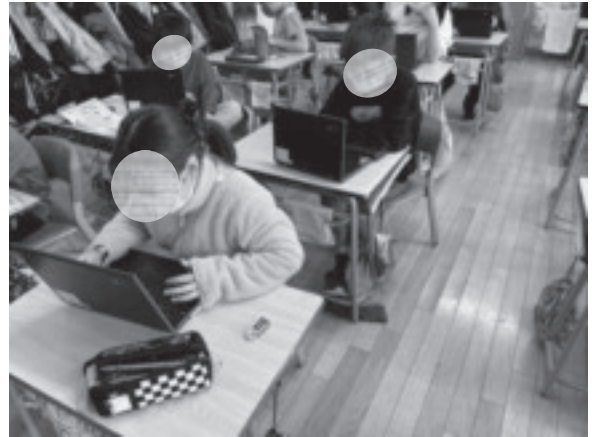
- ・書くスピードに差があり、何個しか書けなかった子もいた。見付けて印を付ける活動と、ノートに書き出す活動を分けてもよかった。
- ・この活動をした後すぐに、子ども新聞の配達が終わってしまったため、子どもたちの興味が最大限継続しなかった。購読期間をもう少し遅め、興味を継続させられると、もっと新聞に親しませることができた。



3. 実践報告② 4年生

(1) 児童の実態

4年生は、社会科や総合的な学習の時間で一人一台端末を活用した調べ学習に取り組んでいる。しかし、情報の質や量が精査されていない、インターネットを使った調べ学習には行き詰まりを感じていた。そこで、「どうしん記事データベース」を活用している。年度当初は、タイピングや検索スキルで大きな個人差があったが、ある程度スムーズに必要な情報を集めることができるようになってきた。



(2) 実践のねらい

社会科『大雪からくらしを守る』について、小学校学習指導要領には、「過去に発生した地域の自然災害に着目」することが大切であると示されている。それは、県内で発生した自然災害の種類や場所、時期について調べることでありとされている。

副読本を中心に活用していくことになるが、子どもたちのより主体的な活動を促すために、インターネットを活用することも考えられる。しかし、インターネットを使った調べ学習では前に述べたように情報の質が担保されず、そこで、「どうしん記事データベース」を活用した調べ学習を行えないかと考えた。

(3) 実践内容 4年社会科

『自然災害からくらしを守る』

単元の導入として、北海道内で実際にあった災害事例の写真を見せ、災害について知っていることを発表しあった。その中で、「北海道は他地域に比べて災害が少ない」という子どもの意見があった。この発言がきっかけとなって、子どもたちが北海道の災害に関する予想をしはじめた。北海道は雪が多く降るので、雪害が特に多いのではないかと予想や、津波災害はなかなか起きないのではないかと予想が出た。そこで、「どうしん記事データベース」を使って、地震災害、津波災害、風水害、火山災害、雪害の発生場所、時期を調べる活動を行った。子どもたちの協同的なかかわりを生むために、模造紙とカラーシールを使ってマッピングした。



（４）成果と課題

〈成果〉

- ・白地図にマッピングしたことで、位置的・空間的な広がりに着目しながら、北海道の過去の災害をまとめることができた。

- ・子どもたちの調べた過去の災害のうち、雪害がほかの災害に比べて少なかった。「北海道は雪が多いはずなのに、雪害にならないための取り組みをしているはずだ」と、小单元「大雪からくらしを守る」に向けて子どもの問題意識を醸成することができた。

- ・誤った場所にシールが貼られると、「海沿いじゃないから津波は変だよ」や、「ここに目立つ火山はないのに」など、災害の発生条件や、起きやすい地域の特性に目を向けることができた。

〈課題〉

- ・学習指導要領では、過去の災害をまとめる学習活動として年表が取り上げられている。白地図だけでなく年表も取り入れることで、雪害などの甚大化や地震火山災害の大体の周期など、時間的な見方・考え方も働かせることができたと考える。

- ・調べた災害や記事になった災害が重複するため、シールの多さが災害発生回数の多さと必ずしも結びつかない。ただ、子どもたちはこの点に気づき、シールの多さは被害の大きさや重大さであると理解しながら調べていた。



4. おわりに

本校では、他の学年でもどうしんデータベースや新聞を活用している。今まで、図書館の本を主に活用して調べ学習を行っていた総合的な学習の時間や、社会科などの時間に新聞も活用することで、社会情勢の動向や具体的な地域の取り組みなどについて知ることができ、子どもたちの興味が高まったように感じる。また、調べる力、情報を読み取る力などを養うことができ、「情報活用能力」の向上にも効果的である。

紙面の新聞を読む家庭が減っている中ではあるが、活字に触れ、物事に対する興味関心を高め、情報を活用していくために、今後も新聞に触れる機会を大切にしていきたい。

新聞を通して、子どもの言語世界を広げる

札幌市立栄南小学校 教諭 上野 裕子

1. はじめに

本校では、学校教育目標「未来を拓く、創造性豊かで主体的な人間の育成」のもと、「あったかい心で笑顔いっぱい 夢いっぱいの子どもを育てる学校」を重点に教育活動を進めている。19 学級、550 名の児童一人一人が、なりたい自分を思い描き、その実現に向けて挑戦や努力を積み重ねていくことができるよう、学習面・生活面の双方で教育的支援を施していくことを大切にしている。日常の授業研究を推進するにあたり、研究主題を「つながる！広がる！深まる！」とし、対話を通して深い学びを実現するために日々、授業改善を推進している。2019 年度より、研究の中心となる教科を道徳とし、教材や他者とつながり、様々な見方・考え方が広がることで多面的・多角的に考える力を養い、自己の生き方を深めていくことで研究主題の実現を目指している。

2. 児童（生徒）の様子

本校の児童は、学びに対する主体性が高く、「勉強は楽しい」「分からないことも分かるようになるまで努力したい」と感じている児童が多いことが、児童アンケートから明らかになっている。友達の発表をよく聞こうとしている一方で、自分の考えを積極的に発表することに関しては自信がもてない様子も見られる。そこで今年度は、自分の思いや考えをのびのび表現できるようになることが、豊かな対話の実現につながるものと考え、表現の場を意図的に設定することを重点としている。各学年の実態に応じた対話の形態を工夫し、ペア交流やグループ交流を意図的に設けることで児童の表現の場を確保し、

自分なりの言葉で考えをのびのび表すことができるよう手立てを思案している。

3. 実践の内容

① 遊びを通して新聞に親しむ

本学級の児童は、学ぶことにも遊ぶことにも主体的で、なぞなぞやクイズなど、頭を使った遊びやゲームにも楽しんで取り組むことができる。係活動の中で、中休みに学級みんなにクイズ大会を企画する子もいる。

そこで、担任からも新聞を使ったゲームをしようと提案した。それは、『大きな数探しゲーム』である。新聞の記事や広告の中から、最も大きな数字を見つけた人の勝ち、というものである。4年生のはじめに算数で「大きな数」の学習をし、億や兆の単位を学んでいる子どもたちは、「よーい、スタート」の合図で一斉に数字探しを始めた。政府が動かすお金や、新型コロナウイルスの感染者数、「購入者累計〇万人突破」と謳った広告など、様々なニュースやPRに触れながら、子どもたちは230億や1000兆円などという数を見つけていくことができた。一見、数字にしか注目していないようにも見えるが、子どもたちは読める漢字が少ないながらも「こんなにたくさんのお金、何に使うのだろう。」「もうコロナ（禍）になって3年かあ…。」などとつぶやいていた。新聞を通して、世の中の動きに目を向けていることが分かる。そして「新聞には、いろいろな情報が載っているんだね！」と新聞そのものや社会への興味を高めている様子が見られた。小学4年生の子どもたちにとって、読み取れる情報が少ない大人の新聞でも、遊びを通じて大きな社会の一端に触れることがで

きたのではないかと考える。子どもたちは、さらに遊びを発展させ、『人』という漢字が1ページにくっつくか探すゲーム」や「カタカナの言葉探しゲーム」などを発案し、新聞に親しむ姿が多く見られるようになった。まだ遊びの範囲を抜け出せてはいないが、家庭で新聞を取っている子が半数に満たない現状の本学級にとって、「新聞を読む」以前に「新聞に親しむ」態度を養うには十分効果のあった取り組みだったのではないかと考える。



② 国語科における実践

本学級の児童は、自分の考えを友達に聞いてもらいたい、友達の意見を聞かせてほしい、と対話に対する意欲の高い児童が多い。特に国語や算数などの時間においては、答えが分からなかったり自信がもてなかったりするときに他者の助けを求めることが多い。そうして自分なりの答えを導き出せたときや、自分にはなかった見方や考え方に触れることができたとき、学ぶことが楽しいと感じる姿が多く見られる。そこで、本授業においても、新聞記事を活用することで、児童の見方や考え方を刺激し、記事から得たり発見したりしたことを友達に伝えたいような場面をつくることができるとねらっている。

本実践は、光村図書小学4年国語（下）「熟語の意味」の発展的な学習として新聞から熟語探しをすることが中心の活動としている。子どもたちは、本単元の1時間目に、教科書での学習を通して熟語には次の4つの種類があることを学んでいる。

- ① 似ている意味の漢字の組み合わせ
例：
- ② 反対の意味の漢字の組み合わせ
例：
- ③ 上の漢字が下の漢字を就職している
例：
- ④ 下の漢字が「——を」「——に」を表す
例：

本実践である2時間目は、上記4種類の復習をした後、新聞から熟語を見付け、その読み方や意味を漢字辞典や国語辞典を用いて調べる活動を取り入れ、教科書より多くの熟語に触れる時間とした。

子どもたちは前期に漢字辞典の使い方を学習しているので、読めない漢字の熟語にも挑戦することができる。授業者が支援しながら積極的に読めない熟語にもチャレンジするように促すことで、国語辞典と比べて使う機会の少なかった漢字辞典にも慣れる時間になることをねらっている。

4. 成果と課題

（1）成果

ここでは主に、国語科「熟語の意味」の実践について、その成果と課題を振り返る。

① 子どもたちの意欲を引き出す未知の言葉との出会い

これまで、国語科の学習において、こういった言葉の学習は教科書の内容に沿って進めることがほとんどであったが、新聞を活用することによって、子どもたちの学習に活動が生まれ、また、たくさんの言葉に触れる時間をもつことができた。知らない言葉に出会うことで、「調べてみたい」という意欲が生まれ、「分からない」と壁にぶつかったときには友達の助けを必要とし、そこに対話が生まれる。知らなかった言葉の意味が分かったとき、読むことはできたが意味を知らなかった言葉を理解できたとき、なんとなく知ってはいたけれど意味をはっきり説

明できない言葉の意味を知ったとき、子どもたちは「ああ、なるほどな。」「ねえねえ見て、この言葉はね…。」と教材である新聞と向き合ったり、新聞を通して友達とつながり合ったりして、自己内対話や他者との対話を通して学びを深めていった。

新聞によって、世の中の様々な言葉に触れることは、子どもたちの語彙力だけでなく視野も広げることにつながる。なんとなく耳にしていた言葉を文字として認識し、その意味を説明できるようになったとき、子どもたちの言葉の獲得は、さらに深いものになったと言える。「これって、そういう意味だったんだ。」と、子どもたちが言葉を自分のものに行っている瞬間が何度となく見られたことは、何よりの成果であった。

② 新聞を読むことや社会への興味関心の増大

もともと新聞を使った遊びを通して、新聞に親しみをもっていた子どもたちであったが、新しい言葉についての知識を獲得することで、記事や広告の中身やその意味にも興味をもつ子どもが増えた。言葉の意味を紐解いていく中で、どんなことが記事や広告に書かれているか、概要が見えてくるものもあったようだ。「感染が拡大したって、どこの地域のことだろう？」「なにを早急に行わなくちゃいけないのだろう？」と、見出しの言葉を調べて理解できたことで、さらにその言葉が使われている新聞記事の内容を知ろうとしていた。

さらに、「外国では、捕虜や虐殺があるところもあるんだね、怖いね。」「環境問題について考えているのは、日本だけじゃないんだね。」と、日本各地や世界各国で起こっているニュースの大体の内容をつかみ、感想を述べる子どももいた。言葉を調べて終わりではなく、言葉の意味をつかむことによって新聞記事の文章全体へ目を向ける視野を獲得し、記者の伝えたいことをキャッチしようとする主体性も喚起されているように感じられた。

その中で、「新聞を読めるようになると、読むのが楽しくなってきた。」「先生、この新聞、持ち帰ってもいいですか。」と、新聞記事を読むことそのものに

興味をもち、主体的に新聞を読もうとする子どもも現れた。

(2) 課題



① 熟語と造語のちがいが

この実践を通して、子どもたちは新聞に親しみ、新聞記事や広告から熟語を探して調べることで熟語への興味や理解が深まった。しかし、新聞にはたくさんの熟語があり、中には記者や広告主が短い言葉で内容を伝えるために作ったものも多い。(例: 感染拡大、限定特典など) 国語科の学習として、辞書にはない造語もあることも子どもたちには解説しておく必要がある。しかし、実際のところ子どもたちは「記者さんは、決められた文字数で伝えるために、そういう工夫もしているんだね。」と、書き手に思いを馳せている子どもの発言も聞かれた。国語科のねらいとは異なるが、言葉を知ること、言葉を紡ぐことへの興味関心が深まっていることは、子どもの言語の世界を広げるという点で成果だったとも言える。

5. おわりに

今回の実践では、子どもたちに一人一冊の新聞をそのまま配付して読ませた。漢字辞典の使い方を学習した後だったので、読めない漢字も自分で調べて読み方や意味に辿り着くことができたが、新聞を読みながら辞典を引くことが難しい児童もいたため、個別的で継続的な支援が必要である。新聞を使った実践を積み重ね、計画的に行うことで、新聞をもとにした学びを深めていきたい。

【単元の目標・指導計画（単元構成）】		
時間	児童の学習活動	教師のかかわり
1/2 時間	○ 漢字を二つつなげて、言葉にできるかな。 木 流 人 刀 力 星 熟語のつくりには、どんなきまりがあるのかな。 ① 似ている意味の組み合わせ ② 反対の意味の組み合わせ ③ 上の字が下の字を修飾する組み合わせ ④ 下の字が「～を」「～に」を表す組み合わせ 熟語のつくりには、4つのパターンがあるんだね！	○ 教科書に例示されている8つの二字熟語を一字ずつばらばらにしたカードにして、オクリンクで児童に配付する。 ○ 熟語の成り立ちについて、具体的な熟語を児童とともに探しながら例示し、解説する。 ○ 教科書の問題に取り組むことで、理解を深められるようにする。
2/2 時間	○ 新聞には、たくさんの熟語があるね。 新聞には、どんな熟語があるのかな？ 「早急」って、漢字は習ったけど正しくは何と読むのだろう。 「排除」は、手偏で調べれば読み方がわかるかな。 たくさんの熟語を見つけて、意味も調べられたよ！	○ 国語辞典、漢字辞典を用意し、使い方を復習した上で、読み方が分からない言葉にも挑戦できるようにする。 ○ 中には書き手によって作られた熟語もあることを説明し、判断のつけられない児童には個別に支援する。

新刊には、いろいろな三十字熟語（あやや四）字
熟語（あやや四）があることがわかったからこれ
いかいのも調べないともった。

新聞には、いろはうなむずかしい。三宅宗太
が、あつたものとあつたといふ。三宅宗太は、さういふ
ことをした。

初めて今日で、たけれどとしても
深しとて新體に二人なに文字が
あると思はれていなかつたのひ、
すがつた。

☆新聞の記事や広告から熟語を探して、読み方の意味を調べよう！

【見つけた熟語】

常識

【読み方】

じょうしき

【意味】

ふつうの人なら、だれびとにもとける常識

新聞を活用したメディアリテラシーの育成

芦別市立上芦別小学校 教諭 中西 亜美、大林 幸子、澤田 菜央

1. はじめに

本校は、昭和 61 年に旧上芦別小学校と東芦別小学校が統合し、芦別市立上芦別小学校として開校した。全校児童数は 68 名で、校下を流れる空知川と国道 38 号線の間に位置し、自然豊かな地域にある学校である。

継続校として 2 年目の実践に取り組んできたが、学年の実態に合わせて取り組む難しさを感じた 1 年となった。昨年度に引き続いた 6 年生担任となったことから、前回の反省を生かした授業作りに取り組むことができた。文字を読むことに抵抗がある児童が少しでも興味を持ってくれるのか考えながら実践を行ってきた。

2. 児童の様子

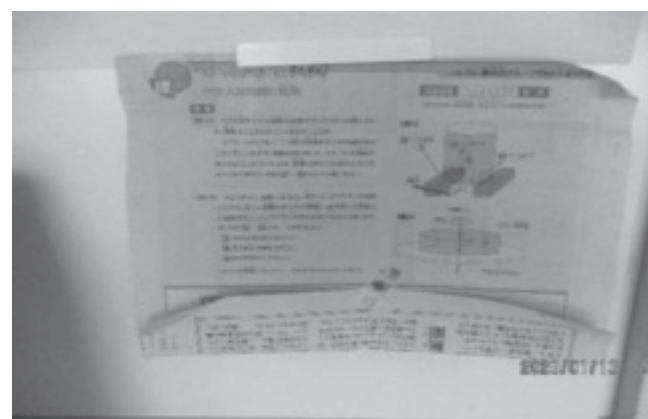
6 年生の児童 12 名を中心に取り組みを進めてきた。日頃から文字を読むことに抵抗があり、調べ学習時もインターネットの音声検索や記事の読み上げ機能を利用する傾向にある。読書をする習慣がない児童も多い。

ニュースには関心の高い児童もあり、社会情勢等が話題に上ることもある。しかし、一方的な情報で物事を捉えがちである。すぐにインターネットで調べるが、最初に目にしたもので判断する傾向にあり、情報の真偽を確かめようとする意欲が低いいため、情報の偏りが心配である。

3. 実践報告

(1) 新聞を身近にする取り組み

新聞を読む習慣がない児童がほとんどであったため、まずは新聞を目にする機会を増やすことから始めた。様々な授業での取り組みを新聞社の方に取材していただき、記事となったものを掲示した。また、キャリア教育を意識し、「のびゆく君へ」など様々な職業の方の記事や週刊まなぶんに掲載される算数の問題、有島青少年文学賞の受賞者が書いた小説の記事も掲示していた。時折、足を止めて見てくれる児童もあり、興味を引く手立てとなったと感じている。

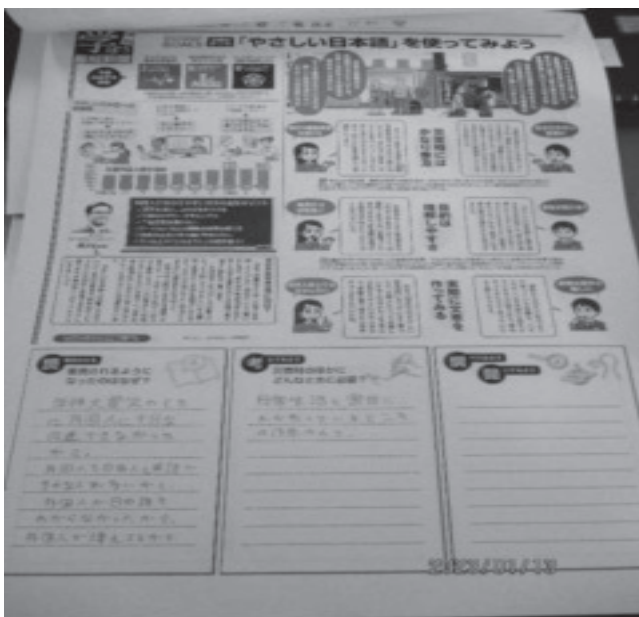




（２）朝の活動を利用して

次に取り組んだのは、週に一度、朝学習の時間に新聞を読み、わかったことや考えたことを交流する活動である。記事とワークシートが一体となっているものを活用し、児童が興味を持っている内容や各教科での学習内容に合ったものを選ぶよう心がけた。

このワークシートは、記事を読んでわかること、考えたこと、もっと知りたいことの３つの欄に分かれている。そのため、あまり興味がない児童でも、読んでわかったことの欄は書けるだろうと考えていた。しかし、多くの児童が、「どこからどのように読むのかわからない」「何を言っているのかわからない」と言って、書くことができなかった。



そこで、別のワークシートに変えて取り組んでみた。そのワークシートには、記事の題名と「いつ・どこで・だれが・何をした」などを書くことになっていた。書くことがはっきりしているので、書きやすいのではないかと考えた。また、読むのが難しい児童も多くいたので、新聞記事を児童に配布した後、どこを読んでいるか説明しながら、私が音読することにした。すると、多くの児童が記入でき、内容の把握をすることができた。記事を読んで自分の考えを持ってほしいところではあるが、まずは文章から大切なことを見つける・読み取る力をつけなければならないことを痛感した。



（３）授業での新聞活用

６年生の国語科に『説得力のある文章を書こう』という単元がある。昨年度の反省から新聞の扱い方を変更し、自分の意見を書く活動を行った。

昨年の反省としては、テーマを自由にしていたため、①選んだ記事の内容に影響されて

しまう、②テーマが決まらないなど、書く以前で混乱する児童が多く出てしまった。

また、記事の説得力があると思う部分を生かすように指導したが、どの表現を生かしたかが不明確となり、意見文ではなく感想文になってしまう児童も多く見られた。

これらを改善すべく、昨年の NIE 研修会で学んだ「テーマは一定の制約がある中から選ぶようにすること」「意見文とは何かをしっかりと押さえること」「説得力をもたせるために必要なことを示すこと」の3つに気を付けて授業を組み立てた。

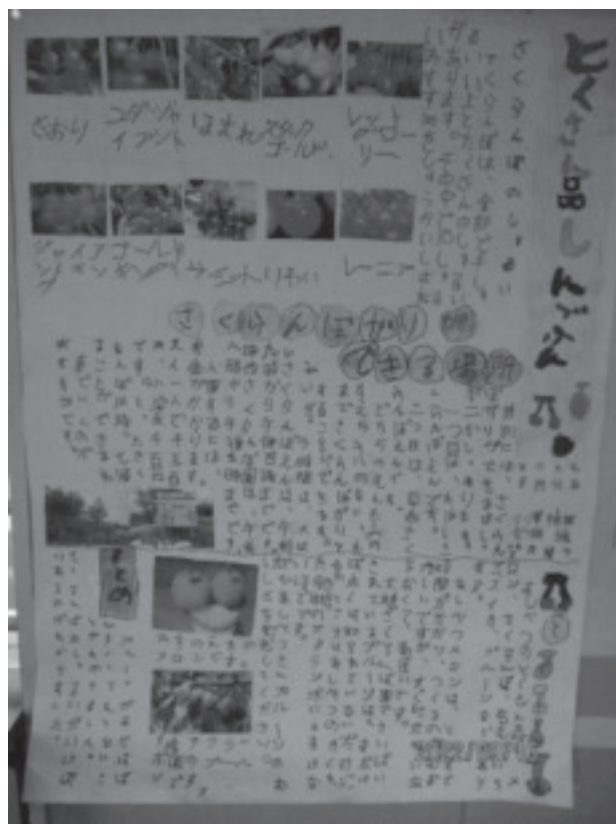
この学習の1時間目に、北海道新聞に掲載の読者の声から同年代の児童が書いた意見文を選んで提示し、意見文のイメージを持てるようにした。1つの記事を選んで提示したことで、全員で共通のイメージを持つことができた。その後も、書き方の工夫や言葉の使い方などについて説明する際に活用することができた。

昨年度の校内研修で公開した際には、課題として「新聞の活用が見えない」「推敲のポイントがしぼれない」「書けない児童への支援が不足している」などがあげられた。しかし、今年度の公開では、「文章構成ができています」「タブレット活用の良さが出ている」「推敲の交流がしやすい」などの意見をいただいた。また、全ての児童が時間内に書き終えることもできた。

昨年度は実際に投稿することを目標とすることで、意欲が低下する児童もいた。しかし、今年度は「人に見られてもよい文章を書かなければ」という意識を持つなど良い方向に働き、推敲まで集中して取り組むことができていた。今年度は実際に投稿することができたので、掲載された時には児童に紹介し、自信を持ってもらいたいと思う。

(4) 新聞作り

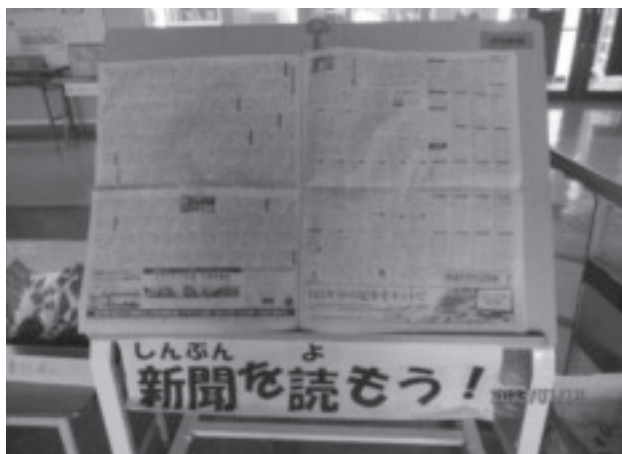
3年生では毎年、総合的な学習の時間を使って新聞作りを行っている。



今年度は2回取り組むことができた。1回目はインターネットを中心に調べ学習を行い、芦別の良いところをまとめた。膨大な情報の中から伝えたいことを選び取って書くことが難しかった。難しい言葉も出てくるので、自分のわかる言葉で書くことを意識させた。原稿作りの段階でA3用紙に本番と同じマスを作ったことで、文字数を考えながら書くことができた。2回目は体験したことを題材にした。すると、原稿作りもしやすく、読み手を意識した表現もできるようになった。全く同じ方法で取り組んだ効果もあり、作業が早く飾り線や見出しを工夫する余裕もあった。新聞作りは文字の制限があるため、大事なことを選び取って書く力がつく実感した。今年度は、総合学習発表会での新聞発表も行った。

（５）その他の取り組み

以前より継続して、玄関前での新聞掲示を行っている。朝学校に来てすぐに立ち寄ってくれる児童もいれば、休み時間や帰る前に読んでくれる児童もいる。現在では家庭で新聞をとっていないことも多いので、学校で新聞に触れる機会はとても貴重であると感じている。子ども新聞であれば、どの学年でも読むことができるので、今後も継続して取り組んでいきたい活動の一つである。



4. おわりに

NIE実践指定校となって2年目の取り組みであったが、昨年度以上の取り組みはできなかったように思う。児童の実態に応じて、取り組みを工夫する大切さも改めて感じた。

自分自身は継続して2年間新聞を読み続けていることで、知識の幅が広がったように思う。役立てようと意識していない情報でも、様々な教科を教えている中、突如記憶の中で結びつくことがあり、児童の思考を深める手立てとなることがある。新聞だけに限らず、教師が様々な情報をもっていることは大切であると感じた。

文字を読むことに抵抗がある児童に対しては、読み聞かせが効果的であることがわかった。自分で読んで考えることも大切であるが、まずは様々な情報に触れる機会を増やすことが必要であると感じた。児童自身では難しいことも教師の支援があれば乗り越えることができる。日頃の児童の様子を把握し、情報の足りていない部分について補うものや違う視点の情報を提示できるようにすることを意識していきたい。

次年度はインターネットの情報と新聞の上の違いやそれぞれの良さにも目を向けて、メディアリテラシーを身につけていきたい。

2022年度 NIE実践報告

情報をつなげて読む～知って、伝えてうれしい～

別海町立中西別小学校 教諭 本間 智子

1. はじめに

本校が位置する別海町は、北海道東部に位置する人口1万5千人ほどの町である。内陸では酪農、沿岸では漁業がさかんな町だ。本校は、町の内陸側に在り、在籍児童の95%の家庭が酪農業を営んでいる。

本校の位置する中西別地区では、幼稚園、小学校、中学校が集まっており、12年間を見通した教育活動の充実を図っている。今年度は、1・2学年が単式学級、3年生以上が複式学級の小規模校である。豊かな自然を生かした野生生物の観察や保護活動、近隣の川の研究など特色を生かした教育活動を行っている。

また、本校は、全校遊びやたてわり掃除、いも植えなどの全校での取り組みも盛んで、学級や学年をこえての交流を大切にした教育活動を行っている。

2. これまでのNIEの取組

NIE実践校1年目となる昨年度は、新聞や児童のワークシートの設置など、いつでも新聞と関われるように環境を整備した。新聞を活用した教育活動を通して、自分の気付きや考えを表現するだけでなく、友達との考え方の違いや、記事を通して当事者の思いに目を向けるなどの変容が見られた。

NIE実践校2年目となる今年度は、より他者の考えに目を向けられるよう、「まわし読み新聞」に取り組むこととした。また、11月の地区セミナーでは、全校児童によるまわし読み新聞の実践を目指し、段階的に活動を積み重ねてきた。

低学年は、8月からまわし読み新聞に取り組み、写真から記事の内容を説明し、選んだ理由を伝たりしてきた。9月からは、全校での取り組みに移行した。各学年で目標とする姿について、職員での協議を通して、身に付けさせたい力を明確にしてきた。

3. 学習活動案～児童について～

全校児童
・第1学年5名、第2学年5名、第3学年4名、第4学年3名、第5学年6名、第6学年4名の児童数27名の小規模校である。 ・在籍児童の95%が酪農家であり、校区に幼稚園、小学校、中学校が集まっており同一集団で12年間を過ごす。 ・第3・4学年、第5・6学年は複式学級であり、日常的に異学年と過ごしている。 ・日常的に縦割り班による清掃活動を行っており、下学年の面倒を見ようとする児童が多く、休み時間には学年・学級の枠を超え、体育館や保健室などで一緒に遊ぶ姿が見られる。 ・2年前から『別海町新聞の日』が始まり、月に一度、朝の活動の時間に新聞を読んできている。 ・まわし読み新聞については、朝活動の時間を2日～3日分を使い、学級単位で行っている。そのため、児童は、新聞記事を選び、選んだ理由を交流するという一連の活動に対して慣れてきている。 ・縦割り班によるまわし読み新聞は、今年度、初めて実施した。本時は、朝活動の3日分（15分×3）として、1単位時間を計画した。

4. NIE 活動を通しての年間目標及び評価規準

学習活動案を作るにあたり、本校では、まわし読み新聞という活動のゴールだけではなく、年間を通した NIE 活動の目標を作成した。

(1) 年間目標

第1・2学年（低と表記）	第3・4学年（中と表記）	第5・6学年（高と表記）
新聞を読んで、伝えたい写真や記事を選んで伝えることができる。記事について尋ねたり、質問したりして、情報を集め、感想をもつことができる。	新聞を読んで、記事の見出しを手掛かりに、だいたいの内容を要約して伝えることができる。	新聞を読んで、記事の感想を伝え合い、自分の考えを広げるとともに、トップ記事にふさわしい内容を考えて話し合いを進めることができる。

(2) 年間評価規準

観点	第1・2学年	第3・4学年	第5・6学年
知識及び技能	新聞には、記事に合わせた写真が選ばれていることに気づいている。	新聞には、伝えたいことに合わせて見出しがつけられていることに気づいている。	新聞には、出来事に対する事実や原因、結果がわかりやすく書かれていることに気づいている。
思考力 判断力 表現力	写真から新聞記事の内容に興味をもち、伝えたい記事を選んでいく。記事について、知りたい情報を落とさず聞くことができる。	写真や見出しから新聞記事のだいたいの内容をとらえ、伝えたい記事を選んでいく。	見出しやリード文から新聞記事のだいたいの内容をとらえ、伝えたい新聞記事を選んでいく。
主体的に学習に取り組む態度	新聞を読んだ感想から、自分の意見と似ているところ、違うところを考えていく。	新聞を読んだ感想から、他者の感想と比べていく。	新聞を読んだ感想から、他者や記者の意図に気づき、自分の感想と比べていく。



5. 本時案

学習過程	学 習 活 動	○指導の留意点 □ 評価規準（低・中・高） ◆教師の支援
つかむ	◎今日の流れを確認する。 ◎課題をつかむ 伝えたい・教えたい・知って欲しいを伝え合おう	○地域の方に新聞、のり、はさみを配付する。 ○新聞、のり、はさみをもって全校朝会のように整列する。 ○各班、模造紙とブロックーを用意しておく。 ◆本時の流れを掲示し、児童と共有する。
考える	◎ 個の学び 自分の興味のある記事を選び、切る。記事がトップ記事に選ばれるよう、意見や感想の伝え方を考える。 ◎ 協働的な学び 各グループで、記事を読んだ意見や感想を伝え合う。	○低学年は、全員が新聞を切り終えるまでの間に、新聞記事について周りの人に尋ね、情報を集めさせる。 【低・思】B：選んだ記事について、知りたい情報を落とさず聞いている。 A：知り得た情報から尋ね返している。 ◆写真を指し示したり、記事のどこに書かれているか指し示す。 【中・思】B：選んだ記事について、だいたいの内容を伝えている。 A：記事の内容に合わせて、選んだ理由を述べている。 ◆記事について尋ね、選んだ理由をはっきりさせる。
まとめる	◎ 協働的な学び 各グループで、感想を基に、トップ記事・レイアウトを決め、はる。	○協働的な学びの充実を意識し、トップ記事の選出、レイアウトの話し合いを充実させる。 【高・思】B：みんなに質問や感想を聞いたり、記事の内容について聞いて聞いている。 A：みんなに感想を聞いて、みんなが知ったそうなこと、役立ちそうなことをトップ記事に選ぼうとしている。
深める	◎ 個の学び 自分の記事に意見や感想を書く。友達の記事にも意見や感想を書く。 ◎ 学びの全体化 他クラスのまわし読み新聞に付箋で感想を書きこむ。 ・他クラスのまわし読み新聞を見たり、感想を書いたりする。	○一人ずつ違うペンの色を選ぶと、誰の意見・感想が見やすくなる。 ○意見や感想だけでなく、タイトルやフキダシなどを付けてもよい。 ○進度に差が出るので、早く終わった班から掲示する。（ボードを6枚用意する）

6. 地区セミナーまとめ

研修だより

令和4年11月29日
NO.19
文部・学 局

第10回～NIE 事後研まとめ～

研究協議をまとめたので、ご関心ください。

	○成 果	◎研 究 経 緯
個別最適な学び	① 記事を選ぶ ○学びのプランにより、まわし読み新聞作成の手順が明確に。 ○理由をつけて選んでいた。活動を通して身近な出来事に興味をもっていた。 ○一年生は新聞を読むことが難しい→大人への問い直しや質問でだいたいの内容をつかんでいた。 ○理由を伝えるために、記事を見直す・文章に目を向ける機会が増えた。	① 記事を選ぶ ●前もって、感想を書いていけば、交流にもっと時間ができた。 ●一年生は新聞を読むことが難しい→詳しく知りたい情報を質問する方も必要、わからなかったらまた問い直す方。
協働的な学び	② トップ記事を決める(選んだ理由を伝え合う) ○ 模造紙、反転する方、もっと聞きたいという気持ちの向上が見られてきた。 ○ 対話が高学年の問い直しで広がった。 ○ 意見が分かれた時に、みんなに伝えたいからこれにしようと考えていた。 ○ 高学年に下級生へ書き方や記事への下書きなどアドバイスする方が増えた。 ○ 地域の方に、記事から昔の出来事や慣習を知ることができた。	② トップ記事を決める(選んだ理由を伝え合う) ●理由を伝えて満足、新聞が完成して満足ではなく、会話の発展に貢献 ●教師や地域の方の入り方→交流の深まりへのアドバイス、六年生の問い直し方 ●作って満足、読して満足→話し合いを促進するための手立てが必要 ●トップ記事決定理由の伝え方→記事選択時の思い→みんなに知ってほしい記事と自分が好きな記事の区別
個別最適な学び	③ 付箋交流 ○新聞が完成し、他校の新聞を見る時間が確保できた。 ○見方・考え方の広がりにつながった。	③ 付箋交流 ●いよいよ、すごい話を違う言葉で表現できる児童ができた。 ④ 評価と手立て ●発達段階の違う児童それぞれのゴールの達成度と教師の手立ての明確化

今後の方向性

☆ まわし読み新聞 ～ 相手に理由を伝えるために記事を読み直したり、重要な文章に線を引いたり等、文章に興味をもつようになった。

☆ 全校活動 ～ 児童同士だからこそ生まれるつながり、関わりがある。特に高学年のリーダー性を見て一歩となった。高学年の問い直し方、複数の記事の共通点を見付けられる力が伸びた。

☆ 評価と手立て ～ 高学年活動の中で評価それに応じた手立てを講ずることは簡単ではないが、職員間、地域の方との連携を図ることで、充実させることができるのではないかと。

アンケートより

あてわり組活動について

- ・上級生がリーダーして進めている組が多く、和やかなムードでもあり、保護者からの関係の良好さがうかがえました。
- ・低学年の児童も安心して活動に取り組んでいると思えました。
- ・高学年同士での交流では、普段学校では見ることのできない表情を見ることができると感じました。(特に高学年の役割)
- ・実践例として、「共同・協働・協同的に学びたい!」と書いていた中で、ぜひチャンスを作

って取り組んでみたい。

地域の方との関わりについて

- ・この地区ならではの地域の方との密な関係性を感じてほしいと思えました。
- ・児童のリーダー性や主体性を育てるためには地域の方が介入する程度なども入意な打ち合わせが必要なのだろうと感じました。
- ・コミュニティスクール等の学校と地域とのつながりを活用した指導が大変魅力的だと思えました。(地域の方に教えてもらいたい方々)

その他・感想等

- ・研修室に参加させていただき、ありがとうございました。NIE 教育を把握せずに参加してしまっていました。小学校教師の一部を知ることができ、また学ぶことができてうれしかったです。研修室で、特に新聞が読めました。
- ・新聞を読む機会を作ることは、色々な面(社会への目、多様な考え、価値)で効果があると思います。私もぜひ子ども達に読ませたいと思います。

全校での新聞活用について

- ・風通しで新聞を取り付け、コメントを書き入れる指導を行っている先生がいました。私も12月からは3年生と参観員研修室に向けて同じ取り組みをしようと考えています。

参事・指導主事より

参事参事より

- ・付箋交流を通して、事実を受けて感想(いいな、すばらしい、こわい)を伝えられていた。
- ・まわし読み新聞の前の要約の活動ができていた。
- ・新聞の内容が自分と結びつかないなら、身近な内容を選んでいい。
- ・低学年にとっては、わけのわからないもの→新聞だが、大人や高学年と同じものを読まれている。一緒に悩んでいるのはいい。
- ・新聞を読んで、感じていることは違うけど、大人も一緒に学んでいることがよかった。
- ・地域、5・6年が意見をまとめたり、よい感想をくれることで、下級生の悩みの存在になっていた。
- ・要約と意見の違い→人の話、考え方の違いでもある。
- ・要約→ダイエット、意見→資格者、両方の考えを理解・身につけてほしい。

指導主事より

ONIE 活動・まわし読み新聞について

- ・各グループに数員(ファシリテーター)、地域人材の積極的活用
- ・指導と評価の一歩化→発達段階の違う子に相手に、ちがうゴールを評価していくが、教師がどのような指導を、どこまでかわっていくのがよいのか。
- ・地域人材の活用→協働的な学習の時間での目的の共有を行うが、本時ではどうだったか。
- ・他の新聞と比べることで活動はもっと広がりがあがる。
- ・5・6年読むこと→読み比べる中で多角的な事象の記事の見方を身につける
- ・系統性を理解して教養課程に位置付ける
- ・本時は②の意見の形成、高学年には「他校との比べる活動」が大変

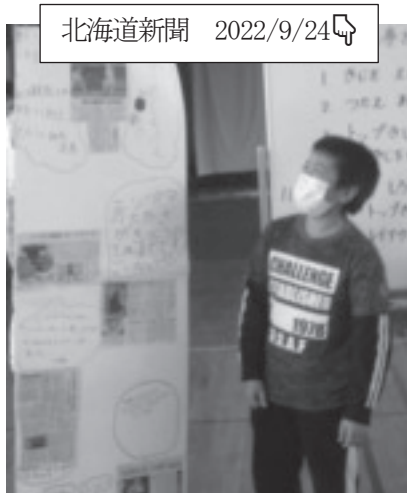
今後に向けてほしいこと

北海道の教育→読書活動の推進、読書から読書、書業を基盤思考力を高めることが求められている。低学年が記事の内容を聞いていたのはいい。今の時代はAIが読み自分の興味以外から情報が入られることが特に重要だ。

○教育課程→読書、読書活動の一つ、児童の力が伸びるならねらいを明確に。本時で培われた力を学校で生かせるように、活動に活用できるようにして欲しい。

○読活動→総則63・64 授業時間設定の留意点4つ 短い時間の指導を活用した部類に入りそうなので、指導すべき指導事項に限りながら、本活動を継続してほしい。

7. NIE 活動の様子



～初めてのまわし読み新聞活動～
リーダーが班の記事をまとめて発表した。



～地域の方とのまわし読み新聞活動～
地域の方が、記事と関連させて地域の歴史を語ってくれた。児童にとって、地域の歴史を知る貴重な時間となった。



～地区セミナー当日の様子～
完成したまわし読み新聞を掲示した。他の班の新聞にも目を通し、付箋に感想等を書き加えた。

8. 成果と課題

<成 果>

- ・縦割り班や地域の方との活動により、高学年のまとめ、つなげて読む力、低学年は自ら記事について質問する力が高まった。
- ・相手に伝えたいと、新聞記事を繰り返し読む姿勢が見られるようになった。
- ・大人と同じものを読んでいるという自信が自己有用感を高める一助となった。
- ・「いっしょに読もう！新聞コンクール」に1年生が取り組んだ。参観日等を活用すれば、低学年にも記事を読ませ、家族の意見を聞き、自分の意見をもたせることができた。

<課 題>

- ・自ら新聞を活用して学習しようという素地を育てていきたい。
- ・新聞や読書など、活字に親しむ活動をさらに充実させていきたい。
- ・社会科や道徳など教科学習での新聞活用を目指していきたい。

9. 次年度に向けて

2年間、NIE実践校の指定を受けたことで、読む力の育成に新聞の活用が役立つことの理解は高まった。しかし、児童自ら新聞を活用して学習しようという素地を育み、活字に親しむ活動をさらに充実させる必要があると考えている。

低学年から新聞を身近なものにするための教育活動の充実を図り、様々な教科で新聞記事を活用できるよう教職員への情報発信を続けていきたい。

児童に新聞を読む力は確実についてきている。家庭学習で新聞を活用した学習ができるよう教育活動を工夫していきたい。

NIE が学校にもたらす効果

岩見沢市立中央小学校 教諭 富樫 いずみ

1 はじめに

今年度、岩見沢市立中央小学校は NIE 実践指定校 4 年目となった。今年度も中央小では、356 名の全校児童に対する NIE の取組を進めている。

NIE 実践校となってから、標準学力検査（NRT）や全国学力・学習状況調査の国語学力のポイントがどの学年も全国平均を上回っており、年々上昇している。この結果は、全校をあげての NIE の取組が学力向上の一助となっていることを改めて教職員が実感している。

実践校としての 1 年目、まずはやりやすい場面から全学年で NIE の取組を行った。学年の実態に応じて、教職員の創意工夫により、のべ 34 項目にわたった授業・活動（家庭学習での切り抜き、コラム書き写し、新聞作成等）を行い、児童にとって NIE が身近なものとなった。アンケートから実態把握を行い、客観的に児童と教職員の効果の実感を得る工夫を行った。



2 年目、全学年による取組を継続すると



ともに、年度に 1 枚以上の個人作成している新聞を一斉に掲示して鑑賞し合う校内新聞展示会を行った。コロナウイルス感染拡大防止のため、新聞作成の際に行っていた校外での取材活動や校外からの外部講師の招聘がなかなかできず、それ以外の場面でも他学年との関わりが極端に少なくなった。このような状況下だからこそ、実生活ではなかなか出来ない異学年交流の一場面として、作品に付箋で感想を付け合うことで交流を図った。また、外部の方に新聞を見て審査をしていただき、講評をいただく取組も行い、意欲喚起と共に外部との連携も深まった。

3 年目、教職員の入れ替わりは毎年あるが、学校として NIE に対する効果の意識が定着していることを感じてきた。これまでの取組を継続すると共に、特別支援学級での取組や新聞販売所さんとの繋がりから空知こども新聞の発行に携わらせていただいた。北海道新聞本社から記者をお招きして、記事の書き方の指導や実際の記事の添削をしていただき、全道の小学校に『炭鉄港』を

題材としたこども新聞を配布することが出来た。

学校全体で NIE 実践を行える学校は、実践校の中でも数少ない。本校は幸運にも、教職員が価値を実感して全校で取り組む体制が整い、新聞展示会をはじめ定着した活動が軌道に乗っている。学校全体で、NIE の効果を実感できる取組を継続して行うこと、それを一つの事例として発信することが、中央小としての NIE への貢献になると捉え実践を続けている。



2 各学年の取組と教職員の意識

以下は、各学年の国語担当者が、今年度の取組と NIE の効果について記述してもらったものである。実践校継続の意向を確かめる意味もあって、全学年に実践で困っていることなども含めて自由記述としたが、どの学年の担当者も困難より効果を実感していること、NIE の継続が本校児童にとって有意義であると捉えていることが再確認できた。

学 年	取組と効果等
1 年	国語のインタビュー学習のまとめとして作成する予定です。

	一年に一度しか取り組みませんが、大きな新聞など一覧性のあるものを作る経験や、見合う活動はとても良いと思うし、はがき新聞など限られた字数で学んだ事を振り返る学習はまとめの学習として有効だと思います。
2 年	書く活動としては、2 学期に 2 回、はがき新聞での生活科のまとめ（円山動物園での見学旅行・市役所と郵便局見学）を行いました。1 回目よりも 2 回目の方が、記事の選び方や見出しなど向上している姿が見られています。2 回のミニ新聞の経験を経て新聞展示会に向けて、生活科の自分探し新聞を画用紙に作成しました。また、家庭学習ノートに新聞記事を切り抜いて意見を書く、一人一台端末を活用した NIE の取組なども行いました。
3 年	3 年生は、見学旅行のまとめとして新聞を作りました。まとめの学習といえば、やはり新聞を作るのが一番かと思います。年間に一つくらいしか取り組みませんし、中身の濃い物は作れませんが、続けていくべきと思います。
4 年	4 年生は、国語科の新聞を作ろうに合わせ、社会見学旅行で調べたことと社会科のアイヌに関する学習のまとめとして新聞作りに取り組みました。年に 1

	度は継続して書かせることで、力がついてくるのは明白だと思います。
5年	新聞についての学習(国語科)と関連させることができること、調べた事や学んだことを新聞にしてまとめるということは、とても大切だと思います。
6年	6年生は、修学旅行【炭鉄港】新聞を作成しました。社会科では歴史人物のミニ新聞等を作りました。余裕があれば、3学期の共友タイム(総合学習)・キャリア教育にて、もう一枚大きな新聞を作成したいと考えています。これまでの実践が土台にあるおかげで、子どもたちはスムーズに作業を進めることができました。来年度も、ぜひ取組を継続できたらと思います。
特別支援 4・6年 知的学級	(知的学級なので簡単な内容ですが・・・)なかよし学級(特別支援学級)でNIEに取り組み3年目になります。今年度は、今まで学習してきたことのまとめとして自分の好きなものをテーマに新聞を書き、北海道新聞コンクールに参加しました。 交流学級での新聞づくりはかなり教師の手が入りますが、コンクールに出した新聞は自分の言葉や自分の得た知識を自分の言葉でまとめたものとなり、達成感も今までと違ったように感じました。また、評価されたいという気持ちも強かったようで

	す。このような活動は特別支援学級の児童にとって有効な部分があるなと感じています。全校での活動とはズレますが、今後も学習に取り入れたいと考えています。
--	--

3 一人一台端末を活用した NIE 実践

学校現場ではどんな場合でも、授業を行う際に教育課程にもとづいて行うことが求められる。NIE についても同様で、いかに教育課程の指導事項の中に NIE の効果的な要素を見出し、入れ込めるかが定着の鍵となる。また、最近では授業における一人一台端末の有効活用が求められている。本校としても、教育課程にもとづいた NIE の取組での一人一台端末の効果的な活用法を模索している。今回は 2 年生を対象として行った国語での、一人一台端末の NIE 活用授業の実践記録である。(次ページ参照)

実践のロイロノートとは岩見沢市で導入している授業支援クラウドである。教材配布や回答の一覧回収、共同編集やプレゼン資料作成、学習成果の蓄積など、様々な学習に活用している。

特に本時ではクラス全員のシートを各自のタブレットで見て、様々な考えを短時間で共有するために活用した。

NIE の新たな可能性を模索し、学校全体で日々実践を重ねていきたい。



第2学年 国語科学習指導案（本時略案）

児 童 ： 2年1組 28名

授業者 ： 富 樫 いずみ

1 単元名 7 写真を比べて考えよう（教育出版2年上）

2 本時の目標

- ・新聞から写真を選択し、気に入った理由や感想を表現することができる。
- ・友達との交流を通じて、様々な見方や考え方を知ることができる。

3 本時の展開（1／3）

流れ	児童の活動	形態	教師のはたらきかけ	評価等
インプット・アウトプット 40分	1. NIEの意義を確かめる 「新聞で学習するとどんないいことがあるか」	全	1. 必要感を持った学習、意欲喚起 ・頭が良くなる ・考える力がつく ・正しい情報がわかる ・漢字が読める	ワークシート よみうり新聞たんけん隊 P28
	課題： 気になる写真を探そう。			
	2. ペアと写真について広げる 気になる写真の選択	ペア 全体	2. ペアの人と新聞の色々な写真を見ながら、状況や何の写真か予想し話し合う。 気に入った写真を選んでシートに貼る。	【知・技】 写真を選び、理由や感想を表現している。
	3. 選んだ理由と感想の表出	個人	3. シートに記入する。	一人一台端末の活用 ロイロノートの効果的活用
	4. ロイロノートによる交流 	全体	4. 全員のシートを見て、自分と考えが近い人やすごいと思った人を選ぶ。 	
振り返り 5分	5. 振り返りによる学びの顕在化 振り返りの観点と文字数の指示をする。	個人 ペア 全体	5. 今日の学習の学び、自分がすごいと思った人の考えなどについて振り返ってまとめる。	

資質・能力を形成する NIE を考えよう

夕張市立ゆうばり小学校 富樫忠浩

1 NIE と GIGA スクール構想

夕張市立ゆうばり小学校は、平成 23 年 4 月、市内 6 校の小学校が統合されてできた、市内唯一の小学校である。

新聞を購読している家庭は本校でも少ない。実践校として新聞をいただくことによって、子供たちが新聞に触れることができている。



閲覧コーナー

また校内には、ゆうばり小学校の児童に関する記事の掲示場所があり、学校長が日々新聞を読み、掲示している。そこに立ち止まり、自分や友達の記事を読んでいる子が多い。先日の全校朝会でも新聞記事を紹介する場面があった。このように学校長自身が新聞の有効性を理解しているため、我々も様々な実践に挑戦できている。

2019 年 12 月に文部科学省が打ち出した GIGA スクール構想の施策の中核として、全国



新聞掲示コーナー

の小学校児童・中学校生徒全員への「1 人 1 台端末」が実現した。端末活用はこれからの時代における学校のスタンダードとなる。今後、我々が考えるべきは、「紙と ICT の共存」であろう。そのためにはそれぞれのストロングポイントを共通理解する必要がある。



全校朝会の様子

夕張市では、「どうしん記事データベース・まな bell」の導入を検討している。「まな bell」には、北海道新聞の記事が豊富に収録されており、子供たちの学びを深めるのに期待ができる。先日、北海道新聞みらい教育推進室の菊地さん、石丸さんに来校いただき、使用法や活用法をご指導いただいた。

今年度、一定期間の使用が認められたため、実際に活用させていただいている。

NIE を実践する際に、最も活用できる記事は「地域面」である。なぜなら、子供たちにとって身近だからである。子供たちは早速身近な地域や人物について検索していた。

今、「個別最適な学び」「協働的な学び」が求められている。子供たちが「学びたい」「調べたい。」と思ったときに、一般的な検索エンジンと「まな bell」を選択するのがとてもよい。また、「1人1台端末」と「まな bell」は親和性が高い。今後も、効果的な活用方法を模索したい。

2 NIEで「炭鉄港」の学びを深める。

6年生の総合的な学習の時間で「夕張市の未来」というテーマで学んできた。未来を考える前に、過去を知ることから学びをスタートさせた。過去と未来をつなぐキーワードとして「炭鉄港」（たんてつこう）について重点的に学ぶこととした。炭鉄港とは北海道の近代化を支えた空知・室蘭・小樽の歴史である。空知の「石炭」、室蘭の「鉄鋼」、小樽の「港湾」、これらを繋ぐ「鉄道」のことである。夕張が北海道の発展に大きく貢献してきたことを知った子供たちは、この歴史に関心を持つようになった。また、同じタイミングで岩見沢の青年会議所から、夕張市を PR する動画づくりの機会をいただいたため、夕張市

にある炭鉄港の構成文化財を紹介することになった。

北海道新聞では、定期的に「炭鉄港」を記事にしているので、様々な場面で記事を活用できた。構成文化財の1つである「採炭救国坑夫の像（さいたんきゅうこくこうふのぞう）」を見学した際に、子供たちはいくつかの疑問を持った。

「なぜ、この像はこんなにきれいなのか？」
「なぜ、屋根（東屋）があるのか？」

北海道新聞に、これらの疑問に関する記事があったため、これをお子たちに紹介した。また、この像のモデルになった人物に関する記事もあったので、さらに子供たちは新たな知識を得ることができた。新聞には、自分が知りたいピンポイントの情報だけではなく、予想外な知識に出合うことができることを実感した。



北海道新聞朝刊（2021年7月8日）



北海道新聞朝刊（2021年8月10日）

修学旅行では、室蘭、小樽を巡ることにした。修学旅行の見学地は構成文化財を基本とした。室蘭では「恵比寿・大黒天像」「工場景観と企業城下町のまちなみ」「旧室蘭駅舎」、小樽では、「北炭ローダー基礎」「色内銀行街（旧三井物産及び旧三菱商事小樽支店）」「手宮線跡及び附属施設」「旧手宮鉄道施設（機関車庫三号）」「小樽中央市場」である。

北海道初の鉄道「官営幌内鉄道」の一部である「手宮線」に関心を示していた子は、手宮線を観光に活用しているという記事を読み、夕張にある構成文化財の活用方法を考えていた。今後も、「まなbell」でテーマに関するワードを検索することで新たな知識に出会えるだろう。

11月26日、夕張の子供たちが炭鉄港の学習でお世話になった吉岡宏高氏（前・NPO法人炭鉱の記憶推進事業団理事長／前・夕張石炭博物館館長）が逝去された。旭川報道部の山口真理絵氏による吉岡氏の記事「故郷の炭鉱跡 日本の『宝』に」を子供たちと読んだ。



北海道新聞朝刊（2021年12月22日）

この記事を通して、これまでご指導してくださった吉岡氏の功績を知った子供たちは、自分たちがどれだけ恵まれた環境にいたということを実感していた。

限られた紙面の中でも、吉岡氏と行動を共にしてきた山口氏の言葉は、我々の胸を打つものがあった。

記事から記者の思いを想像することは、子供たちに考えの形成を保障する。

また、N I Eは子供たちの「深い学び」に貢献できるだけでなく、子供たちに「豊かな心」を育んでいく。

3 「いっしょに読もう！ 新聞コンクール」の取組

昨年度に引き続き、本校では上記のコンクールに取り組んだ。今年度も1名の児童が奨励賞をいただいた。本校では4年 連続入賞している。

このコンクールは、子供たちの学びを深めるための要素が多い。

(1) 家族や友だちと記事を共有できる。

まず、何の記事を取り上げるかを決めさせた。子供たちはじっくり新聞を読んでいた。

「この野球の記事を読んでみたら。」

「修学旅行で行った場所の記事を見つけたから、読んでみるといいよ。」

このように声を掛け合いながら、楽しく記事を選んでいった。

記事を選ぶポイントとして、「なぜなのか？」と疑問に思った記事、みんなにも紹介したい記事などから記事を選択するように指導した。

(2) 記事を通して対話させる。

「この記事を読んで私は～と考えたのだけれど、〇〇さんはどう考える？」……このように友だちに自分の考えを伝えたり、友だちの考えをメモしたりしながら学びを進めていく。保護者の考えを知りたい子には、家で質問をさせた。他者の考えを知ること、さらに自分の考えを深めることができていた。

他者の考えを引用する際には「 」(鉤括弧)でくくるように指導した。また、「引用」の定義として、「自分の作文の中で、他者の文章を用いること」と指導した。

記事と対話し、身近な人と対話することで、自分の考えを形成していく子供たちの姿があった。

(3) 引用することで真剣に読ませる。

意見、提案、提言の定義を指導した後、他者の考えを引用させ、さらなる疑問を書かせた。そして、その疑問から、改めて自分の考えを記述させた。

引用すれば、じっくりその一文と向き合い、丁寧に読むことができる。

このコンクールの取組は、これまで国語科で身に付けた知識・技能を活用できる機会となる。また、ここで指導した考えを形成するプロセスは、「自立した学び」に直結するだろう。

今後も子供たちの資質・能力を形成するためにN I Eを活用していきたい。



北海道新聞朝刊 (2023年1月11日)

実践テーマ 要約

登別市立富岸小学校 教諭 磯部 美優

1. はじめに

昨年度まで本校で実践代表者を務め、NIE実践校として校内に新聞を活用することのできる環境づくりの素地を築いてくれた貝澤教諭が異動で本校を去った中、今年度の実践をいかに進めるかが課題となった。しかし、これまでと同様に、引き続き子どもたちにとって「身近に」新聞を感じられるような取組を続けていくことができるよう、少しでも他学年へ新聞を使った学習活動を広げていくことができるよう実践を行ってきたので紹介したい。

昨年度までと同様に、児童玄関の近くに新聞を読むことのできるスペースを引き続き設けている。毎日、各紙を広げて置いておくことにより、休み時間などの空き時間や授業時間に手軽に新聞を手に取り、ゆっくりと新聞を読む児童が見られる。本校では「当たり前」となったこのNIEコーナーでは、これまでは高学年の利用が多かったが、最近では低学年も新聞に触れる機会が増えてきたようだ。

図書室の入り口に子ども新聞コーナーが設置されている。こちらも毎日新しい新聞に更新されているので、図書室に本を貸し借りに行く際に読んだり、授業の調べ学習で活用したりと活用の幅を広げている。

また今年度の研究主題が『読みの力を身に付け、豊かに表現する子の育成』～「言葉

による見方・考え方」を働かせる言語活動の充実を通して～であるため、要約に取り組むことが望ましいと考えた。

2. 児童の様子

要約が苦手な児童が多い。授業中、テストなどでも、抜き書きはできても、要約ができず、文章にならない児童が多かった。国語の時間に行う教科書の文の要約は5年生のころから学習してきた。その結果教科書の文章の要約はできるのだが、日常の文章などの要約ができなかった。教師の指示や友達の話、ニュースなどでもすべてにおいて「つまり何が言いたいのか」というのを読み取れない児童が多い。何が大切で、何を伝えたいのかを読み取る力を付けようと思った。

3. 実践の内容

新聞の内容を要約し、感想を書く。金曜日の宿題とした。忙しくて10月ごろから始めたが、回を重ねるごとに上手になってきていたので、やったかいがあった。最初は教師の要約のまねをした。次に、少し簡単にした新聞を渡して書かせてみた。しかし、そのまま書いたり、最初から途中まで書いたりしてきた子が多かった。だから、何が必要で、どこを抜いてもいいのか確認しながら、自分で必要なものを取捨選択して文章にしていく。具体例や数字を抜き、必要な情報のみで端的にまとめることができるようになってきた。

登別市緑陽中学校の現状を学ぶ
象と化した国際理解講座が開かれた
青年海外協力隊でバングラーチン
に派遣された石川祐美さんを招き
異文化での活動を学んだ。石川さ
んは看護師としてバングラーチン
の病院に赴任して、妊婦救命を落
とす原因の一つを改善するた
衛生環境改善や意識改革に取り組
んだ。最後に何かを始める時は
人と違ふことも積極的にする。伊
藤羽奏さんは海外と日本の病
院の違いに驚いた。文化や考え
違つた人と一緒に誰かのために改
善に取り組むのは素晴らしいと
海外活動の大切さを語った。
な全部同じ文化、性格などみ
力して色々な考えを生み出すのは
素敵だと思つた。

あー、お話し
お話し
お話し

お話し
お話し
お話し

お話し
お話し
お話し

登別の少年野球チームのグラ
ウンド納めの清掃活動、ソム
ンド納めと周辺で行われ、毎
く実施して、この日は25人
加した。練習に打ち込ん
シトを整備。その後、周
化に貢献した。最後、グラ
を所有する所へ赴き、チ
えて、今日実際にやった感謝を
い、いつも地域の力があつた
る時、今度も頑張りますと
と、今度はみ拾いをやっ
い、主として声をかけてみた
思つた。大変な仕事だと思
て、なと地球、街をよこさない
にしようと思つた。

お話し
お話し
お話し

登別の少年野球チームのグラウンド納めの清掃活動がソムダグラウンドと周辺で行われ、応援してくれた地域に感謝を込めた。シーズン終了に合わせて毎年実施している。この日は、選手や保護者らが参加した。最初にグラウンドを整備。その後、周辺に落ちているごみを拾い集め、地域の美化にこうけんした。最後にグラウンドを所有する北海道達幌別事業所や近くのコンビニなどへいき、チームを支えてくれたことへの感謝を伝えた。

今日、ごみ拾いにいったときは中々あおぞら公園周辺にごみがなく、きたえろ！お側には、ちよつとあって、たばこのすいがらなどこまかい物をすみずみまで集めた。

みんなしっかい、拾って、良かった。どちゅうで地域の人のために、ね、がんばってねと言われ、たので、うれしかったし、いっそうやる気が増えました。

西条市のごみ処理場、バッチリ具が作例をね、うかがいます。

なまぼこ、公園は管理して、子供がいないので、なかなかごみは落ちていないかも、知らないわ。反対に、市道等は管理者がいないので、け、こ、ごみが落ちていたわ、よくがんばりました。

成果 子どもたちは1回目に比べて必要なことのみを要約できるようになってきた。例えば、「空き缶、ペットボトル、たばこの吸い殻」などをまとめて「ごみ」と表現することができる子どもが出てきた。「令和4年度～」「第〇回」といった必要のないものを自ら取捨選択をして必要な主語述語のみをまとめることができる子が増えた。また、要約が上手になったおかげで、感想も的を射たものとなってきた。

4、おわりに

今では、新聞コーナーに人が自然と集まるような学校に変わりつつあり、学びに活用する学年学級が徐々に増えてきたことを実感している。時間はかかっているかもしれないが、子ども同士、教員と子どもたち、教員同士の間にコミュニケーションが生まれ、新たな取組も見られるようになってきたことは成果と言える。本校では前述した

課題 もちろんなのだが、今回に載せているものはできるようになった児童の文であり、まだまだ、課題としている児童もいる。ちょうど卒業文集を書く時期でもあったのだが、やはりだらだらと事実を書いてしまう児童もまだいる。3学期も続けて力を付けさせていきたい。また、子どもたちに分かりやすい新聞を選んで行っていたが、子どもたち自身が新聞を選んでできるようになると一番良いと考える。

ように国語で研修を行っている。今回の実践でだいぶ力がよりついた児童が多かった。また、自主的に、家庭学習で新聞を選んで要約と感想に取り組んだ子どももいた。このように自主的な活動が広がるように促していきたい。来年も研修は続くから、実践の一つになるかもしれない。



実践テーマ 新聞を読み比べよう

札幌市立真栄中学校 教諭 遠藤 翔太

1. はじめに

昨年度、NIE 全国大会で授業をさせていただく機会に恵まれ、実践は今年度で2年目である。昨年度の実践では、3つの新聞記事を読み比べ、文章の構成をはじめとする「説得力をもたせる工夫」について考える授業を行った。実践後の授業では、多くの生徒が文章の内容理解だけに留まることなく、文章構成や筆者の表現の特徴に着目する習慣がついた。

課題として、①文章校正からさらに進み、論理の展開や表現の違いに目を配ること、②自分に馴染みのない題材の文章や、書かれた情報を正確に読み取ることがあげられた。今年度は以上の課題を中心にアプローチをしていきたい。

また、日常の授業で、文章読解に対する課題が残った。そこで、読解力の更なる向上のために読解の際の基盤として「三角ロジック」を用いて取り組むことにした。「三角ロジック」を教科書教材のみならず、新聞教材でも用いることでさらなる定着を目指していきたい。

2. 児童（生徒）の様子

本校の生徒は、国語に対する学習意欲が高く、難しい学習課題に対しても楽しみながら取り組むことができる。一方で、読解力や記述に対する力はまだ努力を要する段階である。そのため、授業では学習課題と多く向き合うことができるように意識して設定している。

また、家庭での新聞購読率が高くない現状がある。新聞が生徒から遠い存在となっていることが

原因となり、新聞が単なる事実のみが記載された文章、としてしか生徒が捉えられていないことが課題となっている。

3. 実践の内容

① 授業での継続的な取組

昨年度の課題や現状での課題から、新聞を読む機会をなるべく設けることが、生徒の力を伸ばす方法である、と考えた。そのため、週一回授業中に新聞記事を読み比べることを一年間を通して取り組み続けた。ねらいとしては、①三角ロジックの定着、②論理の展開や表現に目を向けること、③同じ題材を比較して読むことで、根拠となる情報の違いを読み取ること、④比較して読むことで記事の違いから読むことの面白さを感じ取らせたい、の4つである。



② 教科書教材と連動した取り組み

先述したように、今年度は読解力向上を考え、一年間で取り扱う説明的文章をより系統立てて指導する方法として、「三角ロジック」を必ず用いることにした。しかし、教科書教材だけでは学習機会が少なく、生徒が理解するには難しいように思われる。解決策として教科書教材と似た文章構成やデータなどの情報が記載されている記事を単元後に学習する機会を設けた。そうすることで、知識の定着と学びを深めることができると考えた。

4. 成果と課題

(1) 成果

大きな成果としてあげられることは、①三角ロジックの定着と有用性が確認できたこと、②新聞記事ごとの表現方法の違いや面白さを感じ取れたこと、である。

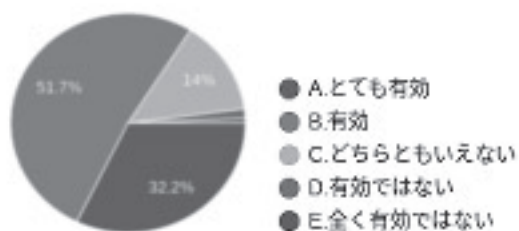
① 三角ロジックと論理の展開

三角ロジックとは「結論（主張）」、「根拠（事実）」、「論拠（理由）」の三点からなる論理の展開の方法である。教科書教材ではこの三点を見つけ、論理の展開について考える学習をしてきた。しかし、内容などから全てを見つけるのは難しく、数多くの文章と向き合うことで得られる「慣れ」が必要であると感じた。

新聞教材を用いることで学習機会が圧倒的に増え、始めは難儀していた生徒が現在ではすぐに取り組むことができるようになった。また、新聞記事は文章が短い分「結論」が明確であり、「根拠」の取り上げ方が細かなため、より明確に理解を深めることができたように思う。三角ロジックの有用性を生徒にアンケート実施したところ、8割の生徒が有用性を理解していた。

三角ロジックは国語の学習に有効だと思いますか。

143 件の回答



② 比較して読むことの効果

同じ題材のものを比較して読むことで、使われている「根拠」の違いがあげられる。その違いから情報を深く読み取ることができ、記事毎の表現の違いに面白さを見いだせたように思う。以下の生徒A、Bの記述には、事例の違いからそこから受ける印象について考えている記述が見られる。

生徒 A

朝日新聞はデパートに似ている人の意見が多い。いっぽう毎日新聞では、データが少なく、朝日新聞のすぐれた意見は少ない。以前と比べての数字の変化が著しく、また、読者の意見から、関連した事例を挙げており、大相撲野球のこともよく取り上げられている。

生徒 B

朝日新聞と読者の意見が朝日新聞の読者に対して、同じ言葉、文章、意見などがあるのに、読者の今の現状を説明して、どうに言っているか、そして、毎日新聞は、事実を述べて、その事実から、どういふ結論を出しているか、という事例を、そして、読者の今の現状を説明して、どうに言っているか、という事例を、そして、読者の今の現状を説明して、どうに言っているか、という事例を、

(2) 課題

資料1の図にもあるように、約2割の生徒は三角ロジックの有用性を見いだせずにいる。理由としてあげられる最たるものは「難しい」ということである。また、今年度扱った記事には意見を述べる文章はあまりなかったため、「結論」と「根拠」が明確であっても、「論拠」に対して理解を深めることができなかった。

上記の解決方法として、①生徒が自分で気がつけるように、難易度の設定をより細かくしていくこと。②投書など、意見文のような形式の記事を多く取り扱うこと、があげられる。

5. おわりに

今年度の実践を経て、2年間継続した成果がより明確になってきたように思う。しかし、成果を感じられる分、課題としてあげられるものがより深いものになってきているため、学習課題が不明瞭にならないよう気をつけていきたい。

次年度、3年目の実践を終えたとき、どのような成果が見られるか非常に楽しみである。

【単元の目標（単元構成）】

- ・意見と根拠，具体と抽象など情報と情報との関係について理解できる。 (2) ア
(知識・技能)
- ・「読むこと」において，観点を明確にして文章を比較するなどし，文章の構成や論理の展開，表現の効果について考えることができる。 C (1) エ
(思考・判断・表現)
- ・言葉がもつ価値を認識するとともに，読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝えあおうとする。

【説明的文章における年間指導計画】

- 1 「クマゼミ増加の原因を探る」
 - ①根拠と意見を段落ごとに区別する。
 - ②文章と図表を結びつけて捉える。
 - ③多段階式三角ロジックの構成を捉える。
 - ④図表が掲載されている新聞記事を比較して読み、根拠の取り上げ方の違いを読む。
- 2 「モアイは語る」―地球の未来―
 - ①論拠の段落と事実的主張を捉える。
 - ②論説文の文章構成と、論理の展開（類似の事例）を考える。
 - ③類似の事例によって説明されている新聞記事を比較して読み、論理の展開の違いを読み取る。
- 3 「言葉の力」
 - ①随筆の特徴を捉える。
 - ②随筆と説明的文章を比較し、根拠の有無による違いを捉える。
 - ③根拠が明確な新聞記事と投書を比較して読み、文章の種類の違いを読み取る。
- 4 「君は『最後の晩餐を知っているか』 / 『最後の晩餐』の新しさ」
 - ①具体的表現と抽象的表現を捉える。
 - ②評論文における文章構成と論理の展開を捉える。
 - ③解説文の文章構成と論理の展開を捉える。
 - ④種類の違う文章を比較し、特徴を捉える。
 - ⑤具体的根拠と抽象的根拠の新聞記事を比較して読み、根拠の違いから読み取る印象の違いを捉える。

【本時の目標】

①本時の目標

- ・意見と根拠，具体と抽象など情報と情報との関係について理解できる。(2) ア
(知識・技能)
- ・「読むこと」において，観点を明確にして文章を比較するなどし，文章の構成や論理の展開，表現の効果について考えることができる。C (1) エ
(思考・判断・表現)
- ・それぞれの文章の特徴について粘り強く考え，学習の見通しをもって考えたことを文章にまとめようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)

【指導計画】

②本時の展開（6 / 6 時間目）

- ・前時まで比較した文章の違いや特徴をおさえる。
- ・比較した観点を確認する。
- ・2つの文章を比較した観点をもとに，新聞記事を比較して読む。
- ・それぞれの記事の特徴をあげる。
- ・4人1組の学習形態で現在の自分の考えを交流する。
- ・交流した意見も参考にしながら，記事の特徴をあげて説明する文章を書く。

③評価について

- ・意見と根拠，具体と抽象など情報と情報との関係について理解している。(知識・技能)
- ・文章の構成や論理の展開，表現の効果について考えている。(思考・判断・表現)
- ・新聞記事ごとに特徴をあげて説明していたり，2つの記事を比較した観点を説明しようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)

2022年度 N I E実践報告

学校図書館発のN I E

生徒の学びとメディアをつなぐ学校司書が取り組むN I E活動

札幌市立栄町中学校 学校司書 児玉 優子

1. はじめに

本校は札幌市の北東部に位置し、丘珠空港や地下鉄「新道東駅」にほど近い、生徒数 537 名、学級数 20 学級（通常級 14、特別支援級 6）の中学校である。今年度より N I E 実践指定校の認定を受け、学校図書館を中心に N I E 活動を行っている。

本校の学校図書館は、校舎の 3 階にあり、3 教室分ほどの広い図書館である。昼休みの開館時には多くの生徒が来館し、貸出冊数が年間 5,000 冊（昨年度）を超えるほど、生徒にとって身近な場所となっている。

実践者である学校司書は週 15 時間勤務の会計年度任用職員で、「新聞は学校図書館資料の一つとして欠かせない存在である」という認識から、これまでも、新聞記事のスクラップをはじめ、図書館前の掲示板を利用して新聞一面の読み比べや新聞記事の掲示などに取り組んできた。実践指定校 1 年目の今年度は、生徒がいつでも新聞を読める環境を整備するところから始まり、生徒・教職員と新聞をつなぐ活動、授業への提供、使える資料としての保存をテーマに実践しているところである。

【図書館前の
N I E コーナー】



2. 実践の内容

（１）スキマ時間に N I E

～いつでも新聞が身近に読める環境整備

2 階職員室前ホールと 3 階の学校図書館前掲示板の 2 か所に「スキマ時間に N I E」コーナーを設置し、休み時間や放課後のちょっとしたスキマ時間に新聞に触れることができるよう整備。それぞれの閲覧台に細工を施し、新聞と注目記事や関連図書を掲示できるようになっている。

2 階職員室前の新聞閲覧台（新聞社より寄贈）には、段ボールを重ねたボードを板の間に立てて挟み記事を貼るスペースを作り、足元にはバックナンバーを置くスペースを確保した。



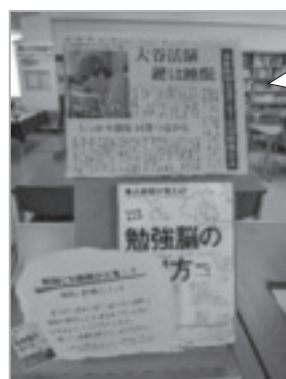
【職員室前ホールの
N I E コーナー】

図書館前の掲示板には、手作りの段ボール製閲覧台を取り付け、関連した図書資料を近くに展示できるようブックスタンド（牛乳パック製）を用意した。閲覧台の傾斜部分の下にバックナンバーの保存が可能である。

各コーナーの新聞や注目記事の更新は、学校司書が担当している。休み時間や放課後、教室移動時などのちょっとしたスキマ時間に新聞を読んでいる生徒や、友達と一緒に読んで話し込んでいる生徒の姿がよく見られるようになった。

（２）新聞からつながる展示・掲示

新聞はその情報自体の価値のほかに、記事をきっかけに図書資料への関心につながり、教科の学びとつながったり、社会的課題とつながったりするツールとして大きな価値がある。そのつながりを示し、提供するのには学校司書の役目でもある。効果的なつなぎ方となるよう、新聞記事とともに図書資料を紹介したり、理解を補助するコメントやクイズを加えたりして、生徒が新聞を読んでもみたくなるよう掲示方法を工夫した。新聞記事だけを掲示するよりインパクトがあり、新聞への関心や読む意欲の向上に加え、関連する図書資料にも手を伸ばす様子が見られた。



「大谷活躍 鍵は睡眠」
（北海道新聞夕刊 2022年
10月7日）と『できる大
人の勉強脳の作り方』（池
谷裕二著/日本図書センター）
を一緒に展示。

ニュースの続報を並べて
掲示。記事を追っていく、
さかのぼってみる読み方
も提示している。



（３）新聞月間・新聞週間の取り組み

① 新聞読み放題（10月～11月）

大きな学校行事が終わった10月と11月に新聞を集中して購読し、「新聞読み放題」と銘打って、職員室前ホールと学校図書館内に自由に新聞を閲覧できるコーナーを設置した。

当日の新聞は職員室前ホールに1面が比較して見れる形で広げておき、翌日以降の新聞は図書館内で閲覧できるというしくみである。図書館内で銘柄ごと・日付順に整理しておくことは、誰もが手に取りやすく、後述する授業での活用の際には新聞の提供がとてもスムーズであった。

② 特別支援学級への提供

購読期間中に毎日届いた『北海道小学生新聞』は、バックナンバーを特別支援学級に提供し、学級内に掲示してもらった。担当教諭によると「興味のある生徒は新聞を読み、朝学活のニュース発表の時間に新聞の内容を発表する生徒もいた」とのことだが、関心のある生徒に限定されていたことから、提供方法には工夫が必要であったと考えている。

③ 新聞クイズ（新聞週間特別企画）

新聞週間（10月15日～21日）に、図書館内で「新聞クイズ」を実施。新聞6紙を揃え、1面に掲載されている記事を読んで答えるクイズを用意した。苦戦する生徒には学校司書がヒント（「日ハムのお話なら何新聞に載っていそう？」「コラムを読んでみて」など）を出して全員が全問正解。参加賞として英字新聞をアレンジした手作りのしおりをプレゼントした。

【新聞読み放題】



比較の参考になるよう、新聞社の概要を簡単に書いた見出しをつけている。

図書資料と同様、館内で自由に閲覧できるように整理している。



【新聞クイズ】



（４）授業での活用

① 新聞記事を活用したスピーチ

（１年国語科、２年国語科）

「２学期スピーチ（新聞記事）」は、複数紙届いたこの機会に、ぜひ新聞を活用したいという司書教諭（国語科）の実践である。

前述した「新聞読み放題」のバックナンバーから気になった記事を選び、要約、それに対する意見や感想を原稿にまとめ発表するもので、その後の新聞活用も考慮し、新聞記事は切り取らず Chromebook で撮影する形をとった。Google Classroomで新聞記事を共有することで、スピーチの際に新聞記事を手元で確認しながら聞くことができ、発表内容の理解を深めるだけでなく、さまざまな新聞記事に触れる機会になったとのこと。スピーチでは、根拠となる数字や内容を記事から読み取り、自分の考えをしっかりと伝える姿を見ることができた。

② 情報収集の基礎（２年国語科）

２年生国語科「メディアを比べよう」「メディアの特徴を生かして情報を集めよう」の単元に関連して、新聞を取り入れた情報収集の基礎を学ぶ授業（２時間）を国語科教諭と共にに行った。

【１時間目】

メディアの種類とそれぞれの特徴を確認した後、同じ日の新聞（読売・朝日・産経・北海道）を読み、各新聞の構成や情報の取り扱い方を比較する活動を行った。



＜新聞の読み比べ 生徒の感想＞

- ・新聞社によって書き方やページ数も違って、読み比べると全然違うなと思いました。新聞を読むと、読む力も上がるし情報を得ることができるのでいいなと思いました。
- ・全国で同じことが起こっているのに、新聞によって取り上げているニュースが違って面白かった。
- ・だいたいニュースは同じだったけれど、記事の書き方などが会社によって違うのでいろいろな新聞を読む必要があると思った。
- ・新聞は紙でできていることもあり、破けたりすることがあるから、スマホの新聞のアプリで見るのが一番いいと思いました。
- ・新聞は少し大きく、めくりづらかった。
- ・新聞は難しい。

実践校ならではの「新聞読み比べ」を体験した生徒たちは、さまざまな情報が載っている新聞の面白さに気づき、また、同じ「新聞」というメディアで同じ日の新聞であるにもかかわらず「違い」があることに驚いていた様子である。新聞の扱いにくさや内容の難しさを感じている生徒もいたが、気になる記事をさらに調べたいという意欲的な姿勢や、情報を比較することの必要性を感じている様子をうかがうことができた。

【2 時間目】

情報収集の基礎として、情報の見極め方、出典明記の理由とその書き方、著作権、インターネットで情報収集するときのコツについて講義を行った。要所でキーワードとして「新聞」を使用。社会的事象と学びがつながるよう新聞記事も紹介した。



著作権の例外（授業利用）として、「新聞記事でスピーチ」で行った新聞記事の撮影を紹介。

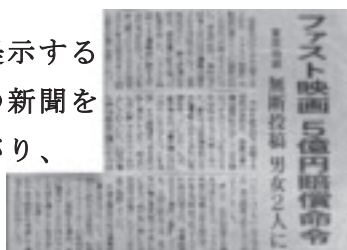
前時で読み比べをした 4 紙のどれから情報を得たという設定で、新聞社のサイトを確認し出典を記入。



「新聞」と「しんぶん」の検索結果を比較し、自分が求めている情報を得るための検索語について考えた。

著作権の侵害について、新聞記事を紹介。「ファスト映画 5 億円賠償命令」（北海道新聞 2022 年 11 月 17 日）

具体的な事例を提示することで、これまでの新聞を扱った学習とつながり、生徒の理解が深まったと感じている。



（４）新聞記事のファイリング

新聞記事を図書館資料として活用するためには、目的に応じた整理と保存が不可欠である。一般紙はデータベースで記事の検索や入手が可能であるが（自校でデータベースが使えなくても、近隣の公共図書館等を活用できる）、データベースの提供がない中高生新聞などは記事を整理しておく必要がある。また、図書館での新聞掲示・展示は原本が基本のため（授業利用に該当しないため）、原本を保存しておくことが重要である。

掲示した新聞記事や学習に役立つ記事は、図書資料と同様に NDC（日本十進分類法）で分類し、ファイルボックスに収納している。今後、件名を付与して検索しやすい状態にする予定である。



キャリア学習に役立つ読売中高生新聞の「シゴトビト」や、道新週刊まなぶんのアイヌ文化紹介ページなどは個別にファイリングし、図書資料の近くに配架し一緒に活用できる状態にしている。また、記事検索ができるよう、タイトルの一覧と索引を作成した。

3. 成果と課題

校内の「読書と図書館についてのアンケート」で生徒の新聞に対する意識を調査したところ、79%の生徒が「新聞コーナーで新聞を読んだ」「コーナーがあるのを知っている」と回答し、いつでも新聞を読める環境整備は一定の成果があった。次年度は「もっと読んでみたくなる」工夫をするほか、活用場面を広げるために、各教科の実践事例を先生方に広報するなどの PR 活動も積極的に行い、生徒の学びを支援したいと考えている。

新聞を「読まざる」ようになるサンマ

標津町立標津中学校 教諭 外川 篤司

1. はじめに

「日本で最も美しい村」連合に加盟する人口約 5,000 人の標津町。ポー川史跡自然公園は、国指定史跡「伊茶仁カリカリウス遺跡」と国指定天然記念物「標津湿原」からなる総面積 630ha の広大な保護区域であり、歴史文化のストーリー「鮭の聖地の物語～根室海峡 1 万年の道程～」は 2020 年に文化庁主催の日本遺産に認定されている。

町内には、認定こども園 2 園・小学校 2 校・中学校 2 校、高等学校 1 校の教育施設がある。標津中学校は、現在 5 学級(特別支援 2 学級を含む)で生徒数は 76 人。20 年前(2002 年度)の 161 人から半減している。

町の教育に対する理解は深く、18 歳以下の医療費を全額補助。「学ぶ道具」としてすでに定着している一人一台端末の効果をさらに高めるために、全小・中学校に AI 教材を導入するなど、未来を担う子どもたちと教育現場への支援が手厚い。また、町内で統一化された学びとして、2012 年度に問題解決型学習を核とした「標津型学習スタイル」が策定され、2022 年度に改訂された内容には、NIE が効果的であることも明記さ

標津中学校では、今年度の重点キーワードを、北海道の方言を用いて「学ばざる」環境づくりとしており、生徒たちが自発的に学びたくなるような「仕掛けづくり」を教育活動のあらゆる場面において意図的にを行っている。

標津町の新聞購読数は全世帯の約 50%。本校生徒の挙手による調査では、新聞を購読している家庭は約 30%であり、生徒たちにとって新聞は身近な存在ではなくなっている。全国学力学習調査質問紙においては、新聞をほとんど、全く読まない生徒の割合は 90%前後で全国平均よりもさらに低い。

年度	標津中	全国平均
3 年度	91.3%	76.7%
4 年度	87.5%	79.0%

★新聞を「ほとんど、全く読まない」中 3 の割合

そこで、実践指定 1 年目の 2022 年度は、生徒たちが自ら進んで新聞を読んでしまう「読まざる」ような環境(サンマ＝3 間＝時間・空間・仲間)づくりに取り組んだ。



れている。

「読解力」とは？

書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力です。

具体的には次の 2 点です。

- ・テキストを理解、評価しながら読む力 ⇒ 目的を持って読み、自分の考えが持てる
- ・テキストに基づいて自分の考えを書く、話す力 ⇒ 自分なりに工夫して表現、説明する

テキストは「文章」(連続的テキスト)「図」「グラフ」「表」(非連続的テキスト)等です。

「新聞」を活用した実践も効果的です。

「読解力」を伸ばすためには、様々な文章や資料を読む機会を増やし、それに対する自分の意見を述べたり、書いたりする機会も同時に増やし、充実させる必要があります。

「読」み取ってインプットしたことを「解」釈・「解」決してアウトプットするイメージです。

自分の考えを「書く」「話す」を積極的に授業に取り入れることが「読解力」の向上につながります。

2. 実践の概要

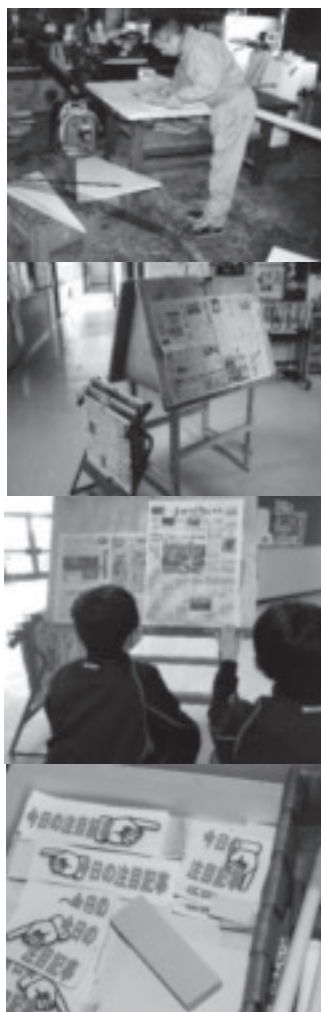
(1) 新聞に触れる空間づくりから

① 通行量が多い場所に閲覧台を設置

本校には、離れた場所に「玄関」が4ヶ所あるが、玄関から教室に向かう際、教室から職員室や給食保管庫を訪れる際に、必ず通る場所が1つある。それが中央廊下である。昨年度までは、職員・来客用の中央玄関に、スチール製の新聞架を置いていたが、生徒が手に取ることはまれであった。

そこで、2022年度当初に公務補が手製で新聞閲覧台を工作し、生徒の通行量がもっとも多い中央廊下のど真ん中に設置した。さらに、教職員や生徒たちが「読んでほしい」と感じた

「注目記事」へ自由に付箋紙を貼ることができるようにすることで、立ち止まって新聞をめくる姿が格段に増えた。



② 「新聞から学ぶコーナー」の設置

次に通行量が多い体育館と美術室の間には「新聞から学ぶコーナー」を設け、北海道新聞木曜版に掲載される「中高生まなぶん」を掲示し、土曜日に折込まれる「週間まなぶん」を置くことにした。また、



生徒たちが自主的に取り組んだ新聞感想文等のワーク

シートや

「生徒たちに読んでほしい記事」なども掲示している。



③ インナー・ブランディング

本校では、生徒たちが自分自身を・母校である標津中学校を・故郷標津を、心の底から自慢できるようになるための「インナー・ブランディング(自己肯定感・愛校心・愛郷心)」に力を注いでいる。中にいるからこそ気づきにくいことは多いが、外からの目線で肯定的にその良さを「見える化」してくれる新聞記事は、「インナー・ブランディング」を推進する上で有効なツールとなる。そこで、北海道新聞の「ぶんぶんタイム」に掲載された本校生徒の投稿文など、本校や標津町に関連する記事を職員室前に掲示し、学級活動で紹介したり、学校紹介のプレゼンテーションデータに入れたりすることで、その内容を生徒や保護者に確実に周知するようにしている。



また、新聞記事として掲載されることで、「外からは見えにくい」と言われる学校内のこと(生徒の活躍や教職員の努力、学校の取組等)を、地域の方々が理解するきっかけとなり、「新聞に出ていたね」「頑張っているね」という声をいただくことが、「インナー・ブランディング」の促進に大きく寄与している。

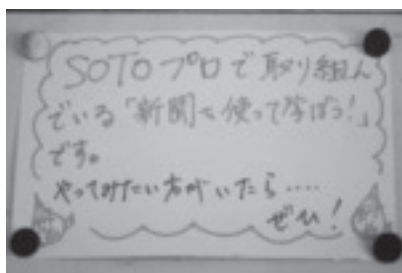
(2) サンマ(時間・空間・仲間)があれば「読まさる」ようになる

① 放課後の多様な居場所のひとつ 「soto プロジェクト」

グローバル化する変化の激しい時代において、生徒たちの興味関心・考え方・資質能力は多様化しており、様々なニーズに応えることができる教育環境が求められている。中学生の放課後と言えば、「部活動」

「放課後学習」がイメージされるが、その他に本校では、異学年がワイワイと賑やかに語り合ったり、楽器・絵画・書道などの特技を磨いたり、各教科の学習内容を教え合ったりする「居場所」も用意している。

その中の1つ、通称「soto プロ(外川プロ



ジェクト)」では、「まわし読み新聞」「新聞感想文」「いっしょに読もう

新聞コンクール作品づくり」等、NIEの取組も楽しみながら行っている。

中学生は、各教科の学習や部活動に加えて、SNSでの交流や、つい夢中になってしまうゲームなど、やるべきこと・やりたいことがたくさんあって忙しい。だからこそ、仲間との対面による「ゆるいつながり」の中で、評価されることなくありのままの自分でいられる時間と空間も必要である。「soto プロ」におけるNIEは自発的・対話的で、一人一人が解放されている分、新鮮な気づきと笑顔にあふれ、生徒たちの

「心の調整」にも寄与している。



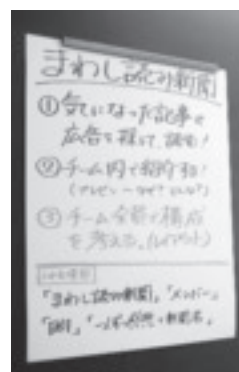
② 「ねらい」を明確にした

まわし読み新聞

まわし読み新聞は、「無目的」で行った方が「意外性」が引き出されて面白いとも言われるが、学校教育活動として行う場合には

「ねらい」を明確にすべきである。なぜなら「ねらい」によって用意する物も、メンバー構成も、時間配分も変わるからである。

本校のまわし読み新聞には、下記のように明確な「ねらい」が設定されている。



◎他者理解につながるコミュニケーション

人間関係づくりや異学年・異世代交流として行う「まわし読み新聞」は、テーマ・レイアウトを決めずに、多種多様な新聞を用意し、ファシリテーター(促進役)が存在するメンバー構成で、ゆったりと時間をとる。



◎「思考力・判断力・表現力」の育成

興味関心のある記事を事前に選んで用意し、内容の紹介だけでなく、自分の意見をわかりやすく説明させる。グループ内で意見交流する時間をとって、トップに配置する「説得力



のあった記事」について合意形成を図る。

◎レイアウトやデザインのスキルを磨く

美術の授業などで、多くの人に読んでもらえる掲示作品を制作することを目的とするならば、各グループに「編集長」を設けた上で、後半の作業時間を長くとる。



◎技術科の単元のまとめ

「材料と加工の技術」の単位では、日本の加工技術に関する記事を経済新聞等も用意しながら選び、「生物育成」の単位では農業新聞を多く用意して、50分間の1単位時間で記事選び→内容紹介→新聞作成までをテンポよく進める。



3. 成果と課題

サンマの水揚げ量は根室が12年連続で「日本一」となっているものの、日本全体の漁獲量は激減している。COVID-19の影響もあり、子どもたちの「サンマ(時間・空間・仲間)」も同様である。学校関係者を含む大人たちの知恵と工夫により、「仕掛け」を施さなければ、子どもたちの健やかな成長にマイナスに作用すると考えている。

実践指定1年目の2022年度は、新聞に触れる空間づくりにより、新聞閲覧台の前に立ち止まったり、新聞を手にとったりする生徒が増えた。また「時間・空間・仲間」を意図的に整えることで、新聞を「おもしろい」「ためになる」と感じ始めていることが、活動している表情からうかがえる。生徒たちにとって「読まざる新聞」となるよう、今後は、新聞を効果的に活用した各教科の授業実践を増やしてまいりたい。



NIE で資質・能力を育成する

別海町立上西春別中学校 主幹教諭 早瀬 香織

1. はじめに

本校ではこれまで、校内にNIEコーナーを設置し、教職員が輪番制でおすすめの新聞記事を掲示するなど、新聞を通して社会事象に興味を持つことができるような取り組みを行ってきた。令和2年度より、別海町では「別海町新聞日」が設定され、毎月1回全校生徒へ新聞が配布されることとなったため、新聞配布日の朝の時間を活用して新聞を読み、読んだ記事を紹介する「新聞に親しむ」活動やワークシートを用いた新聞スクラップに取り組む「新聞を使って考える」活動を段階的に行ってきた。今年度は、昨年度までの課題を踏まえ、学校教育目標のもとで育成を目指す資質・能力を踏まえて、本実践に取り組むこととした。

2. 生徒の様子

全校生徒75名、各学年単学級の小規模校である。

明るく、素朴な生徒が多く、協働的に課題を解決しながら学ぶ意欲のある集団である。

新聞への興味・関心は低く、家庭や学校において新聞を読む習慣がない生徒がほとんどであり、NIEコーナーで紹介してきた新聞記事についても、本校が掲載された記事や自分が関心のある有名人などの記事以外には興味を持たない傾向があった。

令和2年度からは、別海町新聞の日に全校生徒で新聞を読む機会ができたことで、気になる記事を見つけたり、記事を読んで感想を持つことができるようになった。しかし、全国学力・学習調査等の結果における課題改善のための方策の一つとして取り入れた新聞ワークシートの活動では、記事を要約して自分の考えや意見を持つことや、新聞に親しみ、

社会事象への関心を持つことに課題が残った。

3. 実践の内容

① NIE 環境の整備

認知度が低かったNIEコーナーは、生徒にとって新聞が身近な存在となるよう、令和元年度から毎日生徒が通る学校の中央へ移動して、教職員や生徒のおすすめ記事の掲載を続けてきた。

また、NIEコーナーでは毎日配達される複数社の新聞がいつでも閲覧できるようになっている。これは委員会活動として、担当の生徒が毎日入れ替えを行う。

昨年度赴任した学校長は、今年度もNIEコーナーの隣へおすすめ記事を毎日掲示している。



保健室前では、養護教諭が心や体に関する新聞記事を紹介している。また、私自身は担当教科である家庭分野に関する記事を紹介するコーナーを3年前に設置し、今年度も掲示を続けている。



② NIE ウィーク

今年度新しく設定した研究主題の下で育成を目指す資質・能力の身に付けさせるためのアプローチとして、昨年度実施した新聞ワークシートの取り組みを、「まわし読み新聞」へ変更することとした。

学校教育目標
未来社会を築く力を身に付ける生徒の育成

調査結果等から
見える本校の課題

研究主題のもとで
育成を目指す資質・能力

主体的に学び、自分の考えや思いをより良く表現する生徒の育成
～「つながり」「かかわり」課題解決を目指す授業づくりを通して～

今年度も継続された「別海町新聞の日」に配布される新聞を使用し、朝の時間を活用して5日間で「まわし読み新聞」に取り組むNIE ウィークを設定した。

生徒はもちろん職員の多くが初めての取り組みであったが、4月は迷いながらも良いスタートを切ることができた。



しかし、毎月継続して実施したものの、記事の紹介が一方通行で盛り上がり、まわし読み新聞へ記入するコメントの質も上がらない状況が続いた。活動には慣れてきたが、より良い活動となる可能性が見えない状況であった。これは実施時間帯や、生徒とまわし読み新聞で目指す姿（ゴール像）が共有できていなかったことが原因ではないかと考えた。

そこで、より質の高いまわし読み新聞の活動を目指して再スタートをするために、北海道新聞社の出前授業の活用することとした。

10月に実施した出前授業は、全校生徒を対象として、1時間を使って行うこととした。講師から本時活動を「ゆるーく、楽しく」取り組むことや、活動を通して何かを発見すること、コミュニケーションを取ることが目標として示され、講座がスタートした。



講座では新聞の構成や読み方を学んだ後、記事を選んでグループ内でプレゼンし合い、台紙に記事をレイアウトしたものを他の班に紹介するという活動を行った。職員もまわし読み新聞を知り、指導方法や関わり方を学ぶ時間として、生徒の活動の様子をサポートするだけでなく、実際にまわし読み新聞の活動にも参加した。





北海道新聞 2022/10/4

出前授業を終え、まわし読み新聞の取り組みの見直しを行い、実施時間帯を変更することとした。併せて、生徒が楽しさを実感しながら自分たちで主体的に社会や仲間とつながり、関わりながら取り組めるよう、出前授業での流れを再現した「まわし読み新聞ガイド」を作成し、各月の振り返りを蓄積しながら実施することとした。職員は身に付けさせたい資質・能力を意識した指導を一層重視し、担任のみならず、各学年がチームとなって、より質の高い取り組みを目指して活動を継続している。また、冬季休業中には校内研修において、まわし読み新聞で育成を目指す資質・能力を基に、改めて、各学年におい

て目指す姿を設定した。3学期は設定した目指す姿をゴール像として生徒と共有し、活動に取り組んでいる。

4. 成果と課題

(1) 成果

① NIE ウィーク

出前授業における生徒の姿や講座後の振り返りから、まわし読み新聞の活動において、本校で身に付けさせたい資質・能力の育成を目指すことができることを実感することができた。「他の班の発表を聞いた時に、どこに着目して説明しているのか、どんな気持ちでこの記事を選んだのかを考えることができた。」「自分がどう感じたのか、どう考えたのかを詳しく説明することで、自分の思いが簡単に伝わることを発見した。」「改めて新聞を見て、自分の意見を伝え合い、共感することが大切だと感じた。」生徒たちもまた、この活動で大切なことは何か、この活動にはどんな価値があるのかを、実感を伴って理解していることが分かった。また、新聞への興味・関心の低さが課題であったが、新聞の構成に疑問や気づきを持ったり、TVやSNSでは知りえなかった情報を知ることができる良さに気づくなど、新聞への興味・関心を持つことができた。

「新聞には世界が広がっている。」生徒の言葉である。この言葉には、文字通りの「世界」とともに、「自分たちが身に付けるべき資質・能力」までもが含まれているように感じた。

出前授業後に再スタートした活動においても、「ゆるーく、楽しく」をテーマに、新聞を通して社会や学級の仲間とつながり、関わりながら取り組む様子が見られ、資質・能力の育成への効果を感じることができたと共に、新聞への興味・関心の高まりが見られた。また、指導する各学年の担任が、NIEの活動の価値を改めて考え、育成を目指す資質・能力を意識しながら、毎月の取り組みを工夫していく姿も見られた。



予測困難な未来社会を生きる子供たちにとって、NIEを通して身につく資質・能力がいかに大切であるかを実感している。次年度も魅力あるNIEの活動へ向けて、マネジメントを繰り返しながら、目の前の子供たちのために、全職員で取り組みたい。

（２）課題

① NIE 環境の整備

まわし読み新聞の活動により、新聞への興味・関心は高まったが、NIE コーナー等で日常的に新聞を閲覧する姿は見られない。推進指定校として複数社の新聞が毎日届く利点を生かして、より手に取りやすい環境を整えたい。また、NIE コーナーに掲載する新聞記事についても、関心が高い様子は見られないため、その取り組みの見直しを行う必要がある。併せて、各教科等での積極的な活用を促し、資質・能力の育成を目指したい。

② NIE ウィーク

まわし読み新聞の活動は大変有効であるが、教育課程へどう位置付けるかを検討し続けている。本校で育成を目指す資質・能力や学習の基盤となる「情報活用能力」の育成を目指したカリキュラムマネジメントを行う必要がある。

５. おわりに

学校教育目標の具現化を目指して取り組んだまわし読み新聞の活動であるが、各種調査結果等における課題の検証・改善サイクルの取り組み一つとして効果的であっただけでなく、指導する私たちの意識も変えてくれる取り組みであった。

新聞を広げて記事を楽しく、時に真剣に読んで感想や意見を持ち、語り合う中学生の姿は大変魅力的である。この活動を通して学級経営の大切さにも気づかされる。

総合的な学習の時間を中心とした新聞を活用した実践

1. はじめに

忠類中学校では、令和3年度から幕別町教育目標の「郷土を愛し、自ら学び、心豊かに生きる人」の実現に向けて、総合的な学習の時間の目標を「ふるさとのよさを知り、持続可能な忠類の未来に向けた課題を解決し、自己の生き方を考えることができる。」と設定した。また、ちゅうるい学園では令和4年度から総合的な学習の時間を軸として、小中9年間の統一した教育課程を編成した。

2. 忠類中学校の総合的な学習の時間について

2年生では、「十勝管内の他市町村を知り、他市町村と比較し、忠類の良さだけでなく、課題も見つけよう。」として、幕別町以外の市町村の町おこし事業、ふるさと納税など地域の活性化に向けた取り組みについて学び、そこから見えてくる忠類

3年生では、「他管の市町村を調査し、忠類の良さを生かしたり、課題を解決したりして、忠類がより良くなるためにどのようにしたらよいのだろう。」として、十勝管外の市町村と忠類を比較していくことと、2年次に考えた課題に対する策を地域の方々と議論し、ブラッシュアップし、3年間の活動に携わっていただいた地域の方々に考えを提案していく活動とした。

[illegible]

9年間の統一した教育課程

3. 実践内容

忠類中学校では今年度、総合的な学習の時間を中心として、新聞教育を実践してきた。

① 講話（新聞記者の視点・取材の仕方）

十勝毎日新聞社の記者の方に来ていただき、「新聞を通して何を伝えたいのか」「どのような視点で取材をしているのか」「要点のまとめ方、文章の書き方」などについて話をいただいた。

取材に臨む際には、取材対象について事前に調べておくことが大切であること。記事を書く際には専門用語をそのまま使うのではなく、小学生や中学生でもわかるような言葉を選ぶようにしていることなどを学んだ。



② 総合的な学習の時間

総合的な学習の時間の中では、2年生の「十勝管内の他市町村を知り、他市町村と比較し、忠類の良さだけでなく、課題も見つけよう。」3年生の「他管の市町村を調査し、忠類の良さを生かしたり、課題を解決したりして、忠類がより良くなるためにどのようにしたらよいのだろう。」の忠類以

外の地域との比較で活用した。

2年生では、十勝管内の各市町村で町おこしとして取り組んでいる記事や町おこしにつながりそうな記事を切り抜き、廊下に掲示する。今年度はこの活動を中心として新聞教育に取り組んだ。十勝を帯広市とその周りを東西南北の4つ、計5つに分け、5つのブロックごとに新聞記事のスクラップを掲示した。また、それとは別に忠類地区の新聞記事についても別枠掲示する場所を設けた。





廊下に掲示した新聞

記事を選ぶ作業は、朝の会や帰りの会を利用して、1週間に1回程度で行った。全国紙では身近な情報が得られにくいため、取り組みの初めの段階は、北海道新聞と十勝毎日新聞に限定した。

廊下への掲示は他学年の興味関心をひくためである。2年生から新しい教育課程で総合的な学習の時間を進めている。その中で1年生は、次年度取り組むことの大まかな内容を知ることができるのと同時に、新聞を読むこと、地域の情報に目を向けることにつながった。



帰りの会で新聞記事を選び、切り抜いている姿

今年度の3年生は、令和3年度からの教育課程の一部を部分的に扱うこととなった。そのため新聞のスクラップ等を行うことはなかったが、新聞にふれる時間を確保するために、気軽に新聞を読めるスペースを作成した。



いつでも読めるようなスペース

③その他の授業（技術）

「エネルギー変換についてのニュースを調べよう」

技術科で学んできた「エネルギー変換」について、実際のニュースではどのように扱われているのか、そのニュースについて、自分なりに調べ、どうしていくべきかを考える授業である。

「LNG」や「電気料金」などの直接的にエネルギー変換に関係のあるものもあれば、「木材の価格高騰」のように間接的にエネルギー変換につながるものもあり、身の回りにエネルギー変換が多く関係していることを学んだ。授業後に生徒から「新聞は狙ったニュースを見つけるのには大変だけど、いろんなニュースがあるから新しいものを知ることができる」との声が出た。



4. 成果と課題

（1）成果

①インターネットでは、自分たちが興味を持っている情報もしくは、それと類似した情報が多く目にとまるようになっている。しかし新聞では、自分たちがほしい情報を探していく中で、別の情報も目にとまる。その別の情報が子どもたちにはない視点となり、新しいアイディアへとつながることがあった。

②記者の視点、取材の仕方、さらには記事の作り方、想いを知ること、探究における情報収集やまとめ方の技術が向上した。特に講話で学んだ「取材前に、取材内容について学習していくことが大切である。」ということが事前学習の重要性の理解を深めるものとなり、体験活動前の事前学習の質の向上へとつながった。

③今までは、「地域の情報＝忠類の情報」として捉えていたが、新聞記事をスクラップしていくことで「地域の情報＝十勝管内の情報」へと広がるとともに、視点が北海道へとさらに広がりつつある。

（2）課題

- ・視点を広げれば、広げるほど読まなくては多くの新聞に触れる機会を増やす必要がある。しかし、そのための時間がなかなか確保できていない。
- ・地域を5つのブロックに分けて、それぞれのブロックごとに担当を置いた。担当したブロックに対して自ら記事を探したが、他のブロックの情報は廊下での掲示で確認するのみにしてしまったので、学級内での発表の場を設定してもよかったように感じる。ただ、上記にもあるように記事を探すだけでかなりの時間が必要になるので、時間の確保が難しい。

5. 今後について

課題であげた、時間の確保について可能な限り行っていく、時間にゆとりをもった新聞教育の活動となるようにしていく。

実社会とのかかわりを意識した新聞教育

芽室町立芽室西中学校 教諭 掛水 成幸

1. はじめに

本校は十勝平野西部に位置し、5学級136名の生徒が学校生活を送っている。

本校の新聞を扱った活動として、これまでに生徒会の報道委員会では学級新聞の作成・発行を行い、図書委員会では図書室で新聞閲覧コーナーを設置・管理を行ってきた。また、生徒の活動の様子が新聞に掲載された記事は、廊下に掲示している。

今年度はNIE実践校の指定を受け、新聞提供事業を受けることで、授業等での新聞の活用や新聞複数紙による閲覧コーナーの充実を図ることができた。

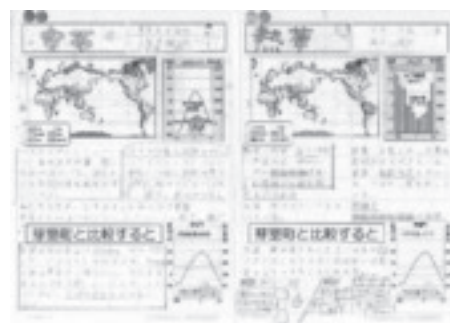
今回の実践報告では、「実社会とのかかわりを意識した新聞教育」を研究主題に取り組んだ社会科での実践について紹介したい。



1年生が生まれた2009年は政権交代、新型インフル感染拡大、裁判員裁判開始など社会科で扱う内容や現在につながる出来事が豊富にあった。

② はがき新聞で学習のまとめ

地理学習で行った世界の気候帯について、各気候帯の特徴をまとめるとともに、地元芽室町との比較をすることで、学習内容と実社会を関連付ける活動をはがき新聞の制作を通して行った。



2. 実践の内容

① 新聞記事データベースによる過去記事検索

歴史学習では、自分が生まれた頃の出来事に興味をもたせるために、新聞記事データベースを活用



し、年月日の新聞記事を検索した。検索された記事から自分の興味があるものを選び、ワークシートに記事の内容をまとめた。

③ 記事の活用と記事によるまとめ（指導案資料）

3. 成果と課題

データベースを活用することで、自分が調べたい記事を生徒自らの力で検索することができ、調べたことから生徒にとって新しい発見が多くみられた。その反面、新聞記事には長い文章のものもあり、内容を把握するのが難しい生徒もみられた。適切な指導を行うとともに、今後も場面に応じて新聞を扱うことで、記事の内容を要約する力等を高めたい。

社会科（地理的分野）学習指導案

1. 教材名 「南アメリカ州 -開発の進展と環境問題-

2. 教材について

本教材では、世界各地で見られる地球的課題が、それぞれの地域的特色の影響を受けて見られていることを理解するとともに、よりよい社会の実現に向けて主体的に追究する。

教科書と新聞記事の内容から、持続可能な社会に向けての取り組みについて理解するとともに、世界の地域の中で最も遠い南アメリカ州（ブラジル）と地元（芽室町）との相違点・共通点を気づかせたい。また、学んだことをもとに南アメリカの人々の視点で考察し、新聞記事の形で表現させたいと考える。

3. 研究主題とのかかわり

（1）新聞記事の活用

- ・新聞記事を使うことで、学習内容と身近な出来事との相違点・共通点を見いだす。
- ・自分たちの周りで何が起こり、自分たちと世の中がどう繋がっているかを考える。

学習内容 (教科書)	ブラジルでは、 さとうきびを栽培し、砂糖やバイオエタノールを生産している。
実社会 (新聞)	芽室町では、 ビート（甜菜）を栽培し、砂糖を生産し、バイオ燃料の研究を始める。

（2）新聞記事にまとめる

- ・学習したことを基に、南アメリカという遠く離れた人々の視点で考えたことを、新聞記事の形で出来事をまとめる。（どこで、何が、どうなるか、現地の人はどう考えているか）

4. 教材の指導事項

- ・南アメリカ州に暮らす人々の生活を基に、地域的特色を理解させる。【知識・技能】
- ・南アメリカ州に見られる地球的課題の要因や影響を、地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現させる。【思考・判断・表現】

5. 評価の規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
南アメリカ州に暮らす人々の生活を基に、地域的特色を理解している。	南アメリカ州に見られる地球的課題の要因や影響を、地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現しようとしている。	南アメリカ州について、より良い社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

6. 単元の指導計画（4時間計画）

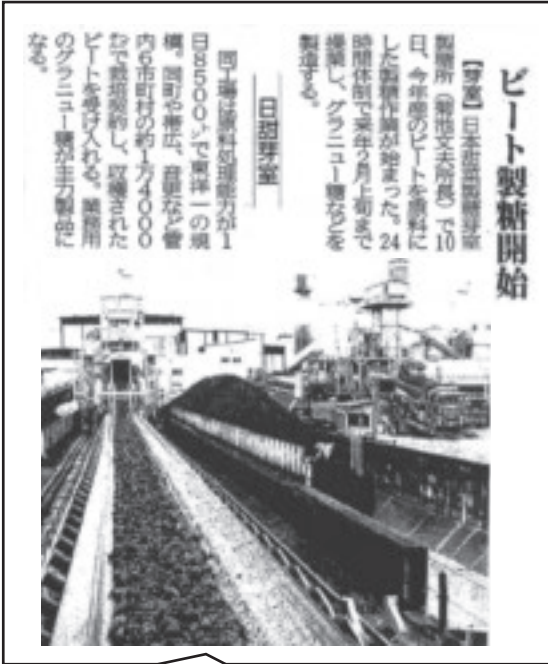
時間	主な学習内容	主な学習内容	指導上の留意点	評価規準
1	1 南アメリカ州をながめて (p.116～117) 南北に長い大陸 混じり合う人々と文化 経済の発展	1 南アメリカ州をながめて (p.116～117) 南北に長い大陸 混じり合う人々と文化 経済の発展	・ 南アメリカ州の自然、文化、産業の特色について理解するとともに、身近な地域との相違点・共通点を気づかせる。 ・ 再生可能エネルギーであるバイオエタノールについて理解させる。	知識 技能
2	2 自然環境と共生する生活 (p.118～119) アマゾン川とともに生活する人々 森林を守る農業	2 自然環境と共生する生活 (p.118～119) アマゾン川とともに生活する人々 森林を守る農業	・ 南アメリカ州では環境をどのように利用しながら生活してきたのか理解するとともに、最近では大規模な開発が進んでいることを気づかせる。	知識 技能
3 本時	3 開発の進行と影響 (p.120～121) 世界を支える農牧業 世界を支える鉱山資源 持続可能な開発に向けて	3 開発の進行と影響 (p.120～121) 世界を支える農牧業 世界を支える鉱山資源 持続可能な開発に向けて	・ 大規模な開発の影響として環境問題が起きていることを理解させる。 ・ エネルギー問題について南アメリカや身近な地域の取り組みから、今後の変化や解決策を考察する。	知識 技能 思考 判断 表現
4	まとめの活動 南アメリカ州の学習を ふり返ろう まとめよう	まとめの活動 南アメリカ州の学習を ふり返ろう まとめよう	・ 南アメリカ州の持続可能な開発へ向けて多面的・多角的に考察する。 ・ 持続可能な社会の実現に向けて、主体的に追究する。	思考 判断 表現 態度

7. 本時について (3/4)

(1) 本時の目標

- ・大規模な開発により環境問題が起きていることを理解する。(知技)
- ・エネルギー問題について、今後の変化や解決策を考察する。(思判表)

(2) 本時の展開

	学習内容
導 入	1. 前時の確認 ・アマゾン川流域で行われている農業や鉱業について確認する。 2. 本時の課題提示 南アメリカのこれからの開発について考える
展 開	3. 教科書の内容確認 ・開発とその影響、開発と日本の関係を確認する。 4. <u>新聞記事からブラジルと芽室町の相違点・共通点を理解する。</u>  十勝毎日新聞 2022年10月11日  北海道新聞 2022年7月1日 5. これからの開発によって環境問題やエネルギー問題は、<u>どうなるか想像し新聞記事にまとめる。</u>
終 末	6. これからの開発によって、南アメリカ州はどうなるのか考えたことを交流する。

新聞を活用した授業実践

～総合的な学習の時間・国語科での実践～

札幌市立北辰中学校 教諭 加藤 香織

1 はじめに

本校は生徒数550人を超える学校であり、札幌駅より北に地下鉄2駅のところに所在した中学校である。昨年度よりNIEの実践指定校となり、今年度で2年目である。今年度は主に、2学年の総合的な学習の時間と、3学年の総合的な学習の時間、国語の授業において授業実践を行った。

昨年度同様、新聞閲覧については、授業以外にも多くの生徒に新聞と触れ合う機会を設けるため、職員室に近い3学年中心のフロアと2学年中心のフロアに各社の新聞を展示し、生徒が自由に読める環境を作った。2学年は朝の学活で今日のニュースを発表することになっており、話題を探るために新聞をめくる姿が見られた。3学年は昨年度の流れもあり、休み時間になると自然と新聞の周りに集まり、新聞を囲みながら談笑する姿も見られた。

2学年は昨年度同様、総合的な学習の時間で新聞記事の読み比べ、北海道新聞社の出前講座「まわし読み新聞作り」を行ったので、今回は3学年での実践を紹介する。

2 実践紹介

① 総合的な学習の時間での活用

～「18歳成人について考える」～

ねらい

- ・「18歳成人について考える」というテーマについて、自ら課題を設定することや、その課題解決に向けて、考えたり、調べたりするスキルを身につける。
- ・18歳成人について考え、3年後の自分像について考える。

◎ この学習のおおまかな流れ

時	主な活動
1	課題提示→「18歳成人」をキーワードにしてマッピングをし、課題を見つける。
2	1時で見つけた課題について、クロームブック、新聞などを使って調べる。
3	2時に引き続き調べ学習をし、その結果、わかったことを班で交流。
4	18歳になり、成人を迎えるとき、なりたい自分像について考える。

この学習は2022年4月1日に改正民法が施行され、18歳以上が「成人」になることから、3年後18歳を迎える生徒たちにそのことを意識づけさせ、これから自分がよりよく生きていくためにはどうしていったらよいかを考えさせることをねらいとして行った。第2時と第3時に「18歳成人」の関連記事を読み、自分が調べたことと合わせて、成人になることでどのような変化や問題が現れてくるのかについて考えた。調べ学習ではインターネット検索と新聞記事（読売新聞2022年1月30日～2月4日に掲載されていたもの）を使用した。インターネットでは18歳で成人になって変わることと変わらないことを調べ、新聞記事は実際に成人を迎える人がどのような思いをもっているのかを知るための参考資料として提示した。調べ学習を終えた後、生徒たちは真剣に新聞記事を読んでいる様子だった。特に、成人になることで、親の同意がなくても契約ができるということへの関心が非常に高く、自分の行動に責任をもつこと、きちんと情報を収集し判断する力をつけることを今後の課題とした生徒が多かった。

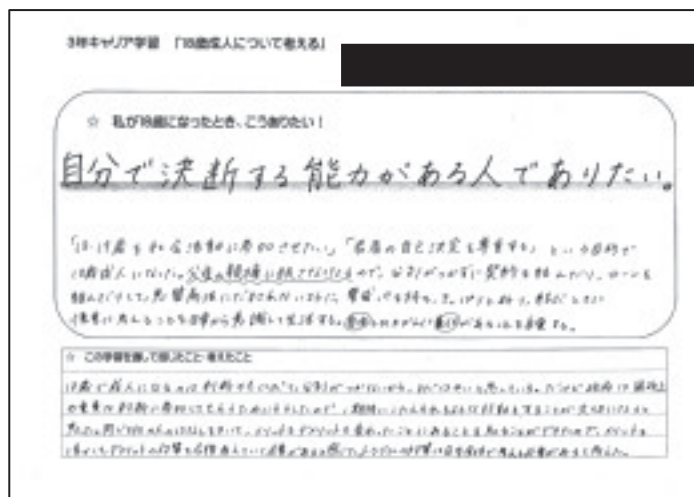
○ 参考資料として使った記事



読売新聞朝刊 2022年1月31日



読売新聞朝刊 2022年2月4日



生徒の記述

「18・19歳を社会活動に参加させたい」「若者の自己決定を尊重する」という目的で18歳成人になった。父母の親権に服さなくなるので、分別がつかずに契約を結んだり、ローンを組んだりして、悪質商法にだまされないように、警戒心をもち、きっぱりと断り、結ぶときには慎重に考えることを日常から意識して生活する。自由とひきかえに責任があることを自覚する。」

② 国語科での活用

～ 新聞記事を書いてみよう ～

ねらい

- ・情報を正しく伝えるための文章の書き方、情報の並べ方について考える。
- ・新聞の見出しの効果について考える。

○ この学習のおおまかな流れ (全2時間)

(関連する単元＝情報社会を生きる「報道文を比較して読もう」光村図書 国語3)

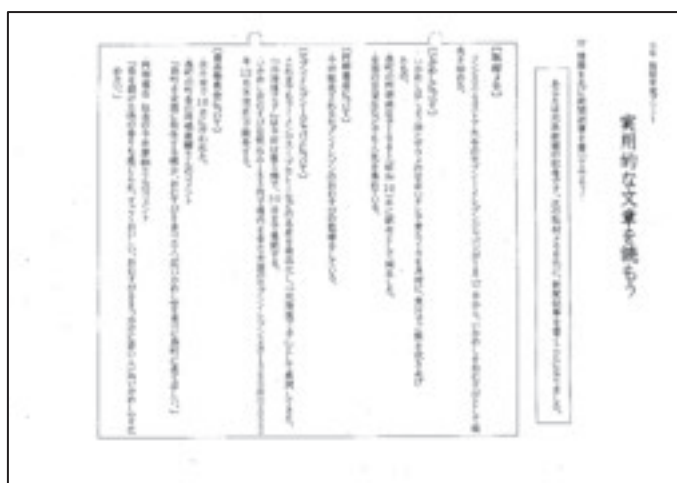
時	主な活動
1	・二つの新聞記事を見比べる ・課題提示 取材メモから記事を書こう
2	・記事を書く ・取材メモの元になった記事と自分が書いた記事との比較 ・学習の振り返り

この授業では、生徒にも比較的身近で読みやすい記事を選び、記事の内容を簡条書きにして、「取材メモ」と称したプリントを配り、メモを元にして新聞記事を書かせた。新聞記事のように段組みをし縦書きができる用紙を用意し、記事を書き終えた後に、記事の内容に合うような見出しを考えさせた。



毎日新聞朝刊 2023年1月18日

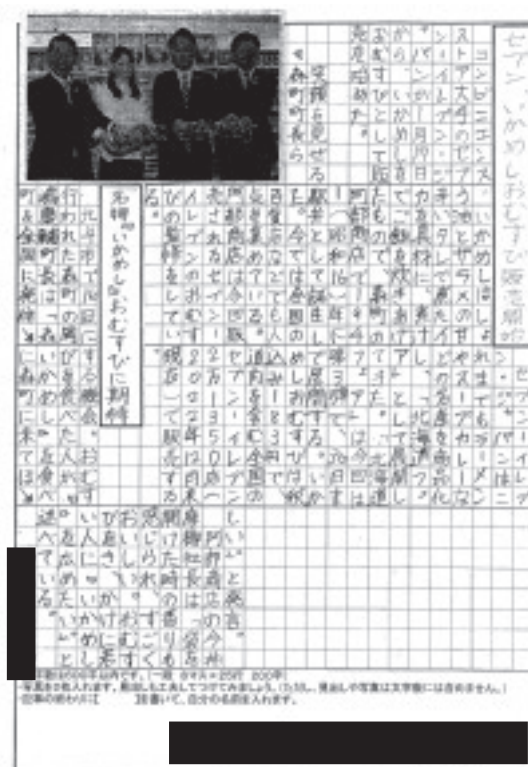
新聞記事に書かれた情報を簡条書きにした 「取材メモ」



この取材メモは教師が新聞記事に書いている情報を簡条書きにしている。メモにするときに考え

たことは、どんな情報をどのような順番に並べるかを考えさせるようなものにするのである。例えば、「いかめしについて」「セブン・イレブン・ジャパンについて」「北海道フェア」についてなど、情報をカテゴリーごとに整理し、本来の記事の順番がわからないようにした。情報の順番という点については、新聞記事を書くときには読者に伝えたい重要なことが文章の第一段落に書いてあり、それ以降は情報の大切な順に文章で説明していく、「逆三角形型」と呼ばれる書き方をしているということも第一時の授業の中で確認した。(その際に参考にしたのは静岡新聞 NIE のホームページ上にある「記事の書き方」というページである。) そのことを踏まえ、生徒には取材メモを元に文章を書かせた。さらに、記事を書く際にレイアウトも考えさせた。新聞に使われていた写真のコピーや、見出しを書くための枠も用意した。どこに写真を置くか、どこに見出しをつけるかなどによって文章を書き始める位置も変わってくる。見出しも考えて自由に書くように指示をしたところ、それぞれ記事を書き終えた後に文章を何度も読み返して見出しを考えていた。

① 生徒が完成させたワークシート



①のワークシートを書いた生徒の振り返り

自分が書いたものと実際の記事とを比べてみると、やはりプロは違うなと感じた。新聞を読む人に興味をもってもらえるように見出しの表現を工夫していたり、見出しを置く場所を工夫して文章を小分けにして読みやすくしていたりなど、いかに情報をわかりやすく伝えるかの工夫をしているかということがわかった。意外と大人になるときが近づいてきているので、このように社会生活の中で生かせるようなことを学ぶことも重要だと思った。



② 生徒が完成させたワークシート



②のワークシートを書いた生徒の振り返り

新聞記事を書いてみて、言葉や文の順番の大切さを感じた。自分で書いてみた新聞とプロのものを比較すると、当たり前だが、プロとは大きな差があった。文章を読むときに頭にスーッと入ってくるような順番で、目に入りやすそうな、最初と最後だけでだいたいの話が入ってくるような作りになっている。それ以外にも何か読み手がわかりやすく読めるような秘密があるのではと思った。

3 おわりに

総合的な学習の時間については18歳成人という、生徒にとってはまだ実感もてない課題ではあったが、まさに今成人を迎えるという方々の様子が書かれた記事の内容から、生徒たちもリアルな声を真剣に読み取っている様子だった。今、世の中に起きていることを文章で伝えるというのが生徒たちにとっての新聞のイメージであったようだが、記事の向こう側にいる方の声をキャッチするというのが新鮮だったようだ。国語の授業では、文章を書くことに抵抗がある生徒も取り組みやすいことをしたいと考え、このような授業を考えた。文章を書くときには、「何から書き始めたらいいんだろう。」とか「どんな文体で書けばいいんだろう。」という迷いが出てくるが、取材メモの中にある内容の伝える順番を考えればよいので、ほとんどの生徒が抵抗なく書き進めていた。生徒が書いた振り返りを見ると、「効果的な情報を伝えるための順番を考えるために何度も情報を読み込んだ。」「記事の要点を見出しにまとめることが難しかった。」など書いてあり、この実践は、効果的な情報の伝え方を考えるという面において有効だったと考える。

今回新聞を活用した授業実践をしていく中で、新聞は情報を得るツールというだけでなく、文章表現を学ぶものとしても活用できるということを発見することができた。今後も新たな新聞活用の方法を考え、実践していきたい。

「時事を知り、意見をもつ」ための新聞の活用

～より多様な方法で情報を得るために～

札幌市立あやめ野中学校 教諭 桑山 美由紀

1. はじめに

本校は、札幌市中心部近郊にありながら自然豊かな環境に恵まれている。農業専門学校「八紘学園」の牧草地に隣接しているだけでなく、校地には縄文時代の遺跡である「遺跡の森」もあり、四季折々の景観に恵まれた自然豊かな環境である。

市内では比較的小規模な中学校である本校は、今年度NIE指定校として2年目を迎え、昨年度の取組を更に発展させることができた。

2. 児童（生徒）の様子

本校の生徒は、自然豊かな環境で小規模校のよさを生かした教育のもと、伸び伸びと学校生活を送っている。学習への意欲も高く、授業でも真剣に課題に取り組んだり、友達との交流の中から新たな課題を見だし、考えを深めたりする姿もみられる。

また、一人一台端末の導入によって積極的にICTを活用している。本校の学習に関するアンケートでも、「学習の中でICT機器を役立てている」と答える生徒が7割を越えている。

また、国語科を始めとして、様々な教科を通じて自分の考えを表現する機会も多く、生徒も意欲的に言葉を探しながら文章で表現しようとしている。しかしながら、基本的な読解力や語彙力、表現力に課題がある生徒も多いのが現状である。そのため国語科だけでなく、各教科や日常の様々な活動を通して「言葉の力」を高めるための工夫や取組を行っている。

3. 実践の内容

① 「新聞閲覧コーナー」の設置

「新聞に親しむこと」「身近な話題や国内外のニュースに関心をもつこと」を目的として、本校1階多目的ホールに新聞閲覧台4面と新聞架を設置している。そのため、普段から休み時間や放課後に新聞を読んだり、記事の内容について交流したりする姿が見られる。また、朝や帰りの短学活では多くの学級が「1分間スピーチ」を取り入れており、その中で「最近気になるニュースの紹介」を行ったり、「よみとき新聞ワークシート」(理想科学工業(株)提供)を活用して記事に対する感想や意見をまとめたりして日常的にニュースに触れる機会を設けている。



② 「総合的な学習の時間」におけるSDGs学習の取組(学校司書との連携)

本校では、総合的な学習の時間において昨年度より「SDGs課題探求学習」を実施している。その教材の一環として、学校司書の協力のもと「SDGs×新聞×本」コーナーを設置した。司書がピックアップし

てジャンル分けした各紙のスクラップを掲示した。一人一台端末が導入されたことにより、生徒の調べ学習もともすればネット上の情報のみに頼りがちになってしまう中、より多様な情報に触れる一助となった。



③道徳教育における新聞活用

本校では、夏休み明けに「命を見つめる日」と題して毎年全校道徳で「思いやりの心を育てる」人権教室を開いている。本校生徒にとって、いじめを始めとした人権問題について深く考えると共に、相手への思いやりの心や生命の尊さを学ぶよい機会となっている。今年度も人権擁護委員協議会より講師を派遣していただき、全校で人権教室を開催することができた。その中でいじめに関する新聞記事を紹介した。新聞記事からいじめの実態を知ること、いじめ問題を考える動機付けを行うと共に、いじめ問題についてより多面的・多角的に考えることができた。



4. 成果と課題

(1) 成果

① 新聞に触れる機会が大幅に増えた

この2年間の成果として、新聞に触れる機会が大幅に増えたことが挙げられる。新聞を購読している家庭は年々減少し、多くの生徒が「新聞」という情報媒体が身近なものではないという現状がある。ニュースや情報を見たり集めたりするときも、インターネットを使うことが一般的になっている。そのような中で、校内に「新聞閲覧コーナー」を設置したり、「読み解き新聞」に取り組んだり、授業で新聞を活用したりすることで、「新聞」に親しむ生徒が増えたことが成果だと考える。

② メディアリテラシー教育

新聞からも情報を得る機会が増えるにつれ、新聞やインターネット、テレビ等様々なメディアの特性を理解し、それを考えながら多様な方法で情報を集めることができるようになった。新聞記事とインターネットの記事を比較したり、新聞記事の情報をインターネットで更に詳しく調べて補ったりすることで、より多様な視点で検討しながら自分の意見を構築することができる生徒が増えた。それと共に、情報リテラシーについても学習する機会も増え、的確な情報を探したり、正確な情報を得て整理・分析したりする力の育成につながった。

(2) 課題

① 習慣化の難しさ

様々な取組を行ったが、やはり新聞に親しんだり、読んだりすることの習慣化には至っていない。特に「読む」機会が少ない生徒、「読む」ことに困難を抱える生徒にとっては、新聞記事に対するハードルが高いと言わざるを得ない。生徒が日常的に新聞を読むという「習慣」になるまでにはまだ時間がかかる。

② より効果的な実践の検討

情報の切り取り方や社説の論調を他紙と比較する等、更に効果的な実践を積み重ねていきたい。

5. おわりに

本校では、これまでの2年間、新聞を活用して様々な実践を行ってきた。

情報社会を生きる生徒たちにとって、新聞をはじめ多様な媒体から情報を得ることやそれを通じて情報リテラシーを身に着けることは必須課題だといっても過言ではない。

一人一台端末の導入は学校現場にとって大きな変化であり、画期的なことであった。しかし一方で、インターネットからでしか情報を得ることがないという生徒が増えたことも事実である。NIEの活動により、その状況に一石を投じることができたのではないかと考える。今後の方向性を模索したい。

【単元の目標・指導計画（単元構成）】

1. 単元名 「多様な方法で情報を集めよう」
「根拠の適切さを考えて書こう～意見文を書く」
2. 題材 「切り抜き新聞作品」を作ろう
今回は切り抜き新聞作品を作る中で、上記二つの単元の内容を取り扱った。

3. 単元の目標

【知識・技能】・情報と情報との関係のさまざまな表し方を理解し使うことができる。

- ・意見と根拠、具体と抽象などの情報と情報との関連について理解することができる。

【思考・判断・表現】

- ・目標に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得て、内容を解釈することができる。
- ・目的や意図に応じて、社会生活の中から題材を決め、多様な方法で集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる。
- ・意見の適切さを考えて説明や具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したりするなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができる。

4. 活動内容



- ・学校司書と協力して様々な新聞社の多様な記事をスクラップし、その中から生徒が興味・関心のある新聞記事を選ぶ。

- ・記事を読み、専門用語等を調べると共にその背景や状況について更に深く調べたり、記事の主張を捉えたりした。



- ・記事をもとに意見文を書く。
⇒その際に、
立場を決めて明確にすること。
根拠を明確にすること。
具体例や自分の体験を踏まえること。
を意識することとした。

・新聞記事、意見文、他の記事、データ等を見やすくなるようにレイアウトし、タイトルをつけた。

・多目的ホールに掲示し、ポスターセッションを行った。



・作品を読みあってコメントしあい、その作品のよいところやアドバイスを交流した。

・他学年の生徒も作品を見てコメントし、そのアドバイスから得たことや他の作品を見て参考になったこと等を書き留めてさらに学びを深めることができた。

・この授業と同時期に「総合的な学習の時間」でSDG s 学習の取組が始まり、調べ学習や提言内容により深まりが見られた。



本校生徒の実態に合わせた新聞活用の取組

平取町立平取中学校 教頭 金丸 剛輝

1 はじめに

平取町は日高管内西部に位置し、特産品のトマト「ニシパの恋人」やブランド牛「びらとり和牛」、町の花でもあるすずらの群生地が有名である。町内を流れる沙流川の上流には、伝統あるアイヌ文化を今に伝える二風谷地区があり、町を挙げて伝承事業に取り組んでいる。

平取中学校では、今年度は99名の生徒が学校生活を送っている。前述の二風谷地区が校区に含まれ、アイヌ文化との関わりも強い。身近にアイヌの文化が存在することが日常であるため、アイヌ語や工芸技術などの様々な伝統文化が自然に溶け込んでいる。

本校では、全ての学年で「総合的な学習の時間」の教育課程にアイヌ文化学習が位置付けられ、アイヌの伝統を受け継いできた地域住民の方々に講師に招き、木工や刺繍の技術等を体験的に学んでいる。一方で、現代的な技術であるICT設備の整備も進められ、校内LAN・Wi-Fiや電子黒板など、情報化社会に生きる

これからの人材を育むための教育活動も展開することが可能な環境が整えられてきている。伝統文化と先進の設備を活用した学びを、並行して進めることができる恵まれた環境であると言える。

本校の教育の柱の1つに「言語能力・語彙力の育成」がある。各教科の学習活動の中では積極的に「話す」「話し合う」活動が行われ、「書く」活動も盛んである。こうして生徒の言語コミュニケーション能力向上が図られている。しかし、各種学力調査等の結果からは、「読み取り」が苦手な傾向にあることがわかる。文章等から必要な情報を読み取ったり、筆者の意図を理解したりすることが苦手であることが課題である。

N I E実践校の指定も2年目となり、この「弱点」を克服するために、新聞をいかに有効に活用するかを、より深く考察するべく取組を進めてきた。



本校の外観…ツートーンの温かい色合いの校舎は、日当たりが良く、明るい印象を受けます。

2 N I E 実践指定校 2 年目の取組の実際

<主な取組>

- (1) 身近に新聞がある環境づくり…新聞配架・掲示の工夫
- (2) 学校祭「壁新聞」の見本としての活用…文章表現・構成・レイアウト等
- (3) 国語科における教材・資料としての活用…参考例・情報源として

(1) 身近に新聞がある環境づくり

インターネットで情報を検索できるのが当たり前の環境の中で育ってきた現代の子どもたちにとっては、文章を「読んで考える」よりも、動画などから「直感的（視覚的）に理解する」ことを好む傾向がある。本校生徒も、各種調査の回答結果を見ると、日常的に書籍や新聞などの「文章を読む」時間が短い。「読み取りが苦手」という結果もうなずける。

本校の生徒会では、「メディア委員会」が読書を啓発する活動を行っているが、体を動かすことが好きな生徒が多いこともあり、「メディアルーム（図書室）」で読書をしたり本を借りたりする生徒は多くない。

本校のメディアルームは、いわゆるオープンスペースである。普通教室約2つ分の広さで、三方の壁に書架が配置されているだけなので、蔵書が充実しているとは言えない。

昨年度、N I E の実践校指定を受けたことを

きっかけに、「身近に新聞があり、手に取りやすい環境」を整備する取組を進めた。今年度も、引き続きメディアコーナーの一角に「新聞閲覧コーナー」を常設することになった。

本校では従来から、関係者のご厚意により寄贈されている「読売中高生新聞」を、廊下の壁に掲示する取組が行われていた。生徒にとって、大きな写真や図などが多く掲載されている「中高生新聞」は、新聞に親しむきっかけとして有効である。さらに、バックナンバーをメディアコーナーの一角に並べておき、新聞を目にする機会を増やすようにしている。

N I E の取組で提供された一般紙は、新聞名を表示し、最新号を手前に、その奥に当月のバックナンバーを積み上げて置いてある。数日にわたり報じられているニュースの経過を追ったり、各社の扱い方の違い等を比べたりする際に有効なレイアウトであると考えている。



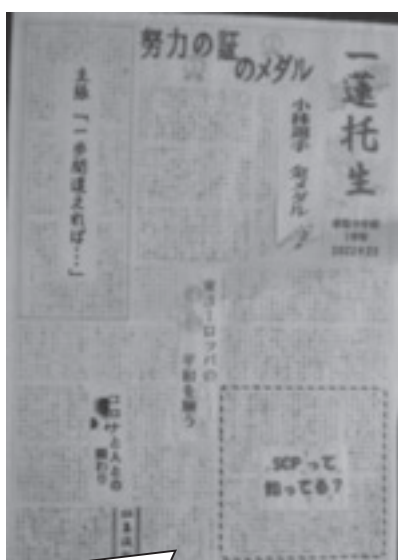
(2) 学校祭「壁新聞」の見本としての活用

秋に開催される本校の学校祭では、全ての学年で壁新聞の制作に取り組む。生徒は、校外に取材に出かけるなどして集めた情報を、模造紙1枚分の限られた枠の中に凝縮し、記事のレイアウトや題字・中字を工夫し、読む人の目を惹き、かつ見やすく読みやすくまとめるために、長い時間をかけて熱心に取り組んでいた。制作に関わった生徒たちは書き上げた達成感・充実感を味わい、読者はレタリングの美しさや文章の読みやすさ、未知の情報を得たことに感動するという、とても意義のある取組である。

壁新聞には記事割りなどに一定のセオリーがある。記事を書き上げるためには、伝えたい情報の要点をわかりやすくまとめ、それを決めら

れた字数で表現する力や、読む人に興味を持って読んでもらうための効果的な文章構成を工夫する力が求められる。正しい文法や用語・用字の選択など、洗練された文章に仕上げるためには、推敲する力も必要である。何度も文章を見直し「記事らしい文章」として書き上げる際に、良い手本となったのが「本物」の新聞記事である。プロの記者が書いた記事を読み、事実と筆者の主張を分けて伝えるための文章構成を学び、記事づくりに生かしていた。

初めて壁新聞制作に取り組んだ1年生であっても、立派な新聞記事を書くことができたのは、プロのお手本があったからこそと言える。



1年生壁新聞「一蓮托生」



2年生壁新聞「開闢」



3年生壁新聞「満天下」

(3) 国語科における教材・資料としての活用

実践指定校2年目の今年度は、年度当初から国語科を担当する教員の協力を得て、各学年の教育課程の中に新聞活用の場面（単元）を位置付けて教科の指導を行った。このうち、2年生で取り組んだ単元「新聞の投書を書く」（書く活動）について、学習活動の概要を紹介する。

①単元の目標

- ・ 社会生活と自分との関わりの中からテーマ

を選んで書く。

- ・ 多様な方法で材料を集める。

②学習活動のポイント

- ・ 自分が見たり聞いたりしたこと、テレビや新聞、インターネットなど、様々なメディアを通して得た情報から、テーマを考える。
- ・ 様々な媒体を利用して情報を集め、投書の内容に盛り込み、説得力を出す。

- ・ 短い文章（３００～４００字）の中で表現を工夫し、いかに読み手にわかりやすく伝えることができるかを考える。

③予備学習として

- ・ 実際の記事を読み、文章構成や見出し、リードの付け方や効果を確認する。



- ・ 新聞を読み社会に目を向ける習慣づくりのために、気になった新聞記事を紹介するスピーチ活動に取り組む。



④学習活動の流れ

- 1) 社会生活と自分との関わりの中から課題を考える。
- 2) 気になる新聞記事をデジカメで撮影し画像保存しておく。
- 3) 実際の投書の文章構成を確認する。
- 4) テーマを決め、構想メモを書く。

3 おわりに

1年目の昨年度に比べ、閲覧コーナーで新聞を広げている生徒の姿を多く目にした。本校の生徒にとって、新聞を読むことに対する敷居が確実に下がっていることを実感している。

新聞は、生徒が社会に関心を持ち、その中で

5) 必要な情報の集め方を考える。

6) 情報を集める。（新聞やインターネットを中心に）



7) 投書の下書きを行う。（手書きまたはパソコン入力）



8) グループ交流、推敲、清書を行う。

⑤成果と課題

- ・ 「投書」がどんなものかを知る上で、実際の新聞が大変参考になった。
- ・ 新聞に接することで、生徒がテーマを決めるときの選択肢が広がった。
- ・ 短い文章で主張を展開するための、効果的な文章構成を学ぶことができた。
- ・ 今後は、写真等を効果的に用いながら、長い文章で考えを伝える手立てを学ぶ活動につなげることが必要。

生きていくための広い視野を身に付ける大切なきっかけである。

この2年間のNIEの取組が、本校生徒の社会性を育み視野を広げる上で、大変役立ったものと確信している。

2022年度 NIE 実践報告

情報収集力の獲得から、 情報編集力に広げる新聞活用の実践

浦幌町立上浦幌中学校 中村 宏喜

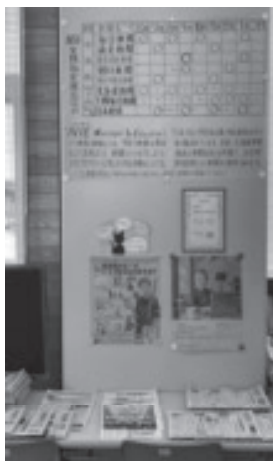
はじめに

本校では二年目の新聞提供事業となりました。「新聞は生きた教材」を合言葉に、様々な実践に挑戦しました。教科のみならず、横断的に多様な新聞活用や新聞づくりを通して、言語活動の活性化を念頭に、「ものの見方・考え方を広げる」授業づくりに結びつけて実践を試みました。



提供された新聞の閲覧

今年度は、9月から新聞提供を受けることができることになりました。6社の提供とともに、本校で購読されている北海道新聞と十勝毎日新聞（地方紙）も、その提供のない月には設置しました。



提供された新聞は、図書室内に新たな閲覧場所を設置し配置しました。中学生が読めそうな本が紹介された記事は、ピックアップして新刊図書の紹介と共に掲示しました。

また同時に、「アイヌの人たち」の様子が分



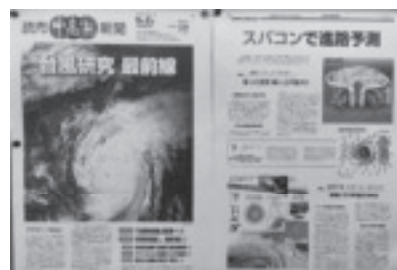
かるコーナーも設置。前年度のストック分も含めて、北海道新聞社で特集を行った記事を毎月掲載しました。アイヌ民族に伝わる説話や暮らしぶりを知ることができ、社会科や道徳の授業などとも関連をもたせた「横断的な学習」に、一歩踏み込むきっかけにもなりました。

社会事象に興味関心を高める活用

～掲示活動を通して～

1 理科

理科室前の掲示板を有効活用し、授業内容と関連あ



る記事を掲載。タイムリーな記事を含め、学年を問わず理科と関わりのある現象に興味を持たせる一役となっています。

星座や宇宙、気象についてなど、授業後には生徒が集まって読む姿も多くなりました。

2 総合的な学習の時間

1年生では地域を学ぶ・深く見つめる学習を行っています。この後押しとして、浦幌町に関する新聞記事のコーナーを設置しました。

（本校の記事については、スクール・サポート・スタッフが大きく掲示しています）また、

1年生は新聞スクラップ（後に記述）でも浦幌町に視点を当てた取組を行ったので、活用範囲が広がりました。



3 その他の掲示活動

標語コンクールに応募するために、新聞広告の中でインパクトのある標語を集めて掲示し、標語作りの一助としました。

また、給食の配膳コーナーや家庭科室前の廊下には、「食育」を意識し、子どもたちがすぐに目を向けられるような記事や広告を掲示しています。



*** **

こうした“掲示”という「可視化」を重視した活動が、学校で学んだことと社会生活とを結びつけられる一助となればと考え、半年間、様々な形でアプローチを行いました。小さな地域で育つ子どもたちにも、視野を広げ、深くものを見る力や考える力がつくのではないのでしょうか。

**新聞で思考・判断・表現力を育てる
～社会科・国語科での実践より～**

1 新聞形式でのまとめ

(1) 歴史新聞作り（1年社会）

① 単元等実施範囲

・どの分野でも基本的に可能です。今回は中学校1年生で実施。夏休み段階では、

大部分の生徒は歴史的事象の意義や意味（変化・発展・因果）を科学的な考察方法でとらえようとする態度や能力が十分ではありません。しかし、歴史に興味を抱かせ、自由発想のもと作成する点で、今後のきっ

かけとなっていきます。

② 歴史新聞づくりまとめる ときの留意点。

※今回は B4・

1枚で作成

・記事本文は、
調べた資料を
もとに、史実



（歴史上の事実）を短くわかりやすく書く。

※5W1H「いつ、どこで、誰が、何を、どうした」「なぜそうなったのか」で、まとめるのがコツ。

・絵や図が必ず1つ以上あること。

・アウトラインの区切りをつけること。

・作成後の感想をいれること。

・歴史人物を中心に作成しても、事件や政治・文化を中心にしても可。

・資料は書籍、インターネットからコピーして使用しても可。ただし、出典をどこか明記すること。

※例：資料の下に「北海道出版 P 58より」「HP：伊藤博文の部屋 itu @ duar. Co.jp」などを書くこと。

③ 成果

・生徒の歴史学習に対する興味や関心を高めたり、意欲化をはかったり、総合的な時代認識を把握させるうえで効果があると考えます。

・事前に探究学習としてウェビングマップ（マインドマップ）を活用すると、より広がりがあると考えています。

- ・地理とも「まとめる」点で相乗効果があると考え、地理では思考ツールを使い、単元のまとめを行っています。つまり、まとめる力が「深い学び」へつながっています。

(2) はがき新聞（全学年国語）

「書く力」を養うために「はがき新聞」の取組を継続して行いました。「自己紹介」、「文化



祭を終えて」、「芸術鑑賞」などは全学年で取り組みました。

また、「投稿原稿を書こう」（2年生）では、批判的な見方で新聞投稿文を書き

ました。「修学旅行紀行文」（3年生）では、『奥の細道』にならい、俳句（川柳）とともに紀行文を新聞形式でまとめました。

はがきサイズに加え、A5版も活用しました。作品は文化祭での教科展示のみならず、「全国中学校総合文化祭」にも北海道を代表して出品され、高い評価をいただきました。



(3) 学級新聞づくり

（1・2年生国語・総合的な学習）

新聞のレイアウトや見出しの付け方、写真



の効果的な活用などを学びながら、新聞作りに挑戦しました。

国語科の授業で書いた文章を記事に書き換えたり、総合的な学習でのまとめ（1年生は地域探究学習、2年生は職場体験学習など）ともタイアップして、半年間の学びを「学級新聞」という作品でまとめました。



1・2年生ともに十勝大会で二年連続で最優秀賞を受賞。全国大会にも出展です！

(4) 新刊図書紹介新聞づくり（係活動）



昨年から新聞形式での各種のまとめを実践してきた2・3年生が先導しながら、学習委員会では「新刊図書新聞」を作成。広告作りでの学びも活かした作品となり、図書の貸し出し部数も昨年よりかなり延びることとなりました。

2 新聞活用

(1) 新聞記事の発表（全学年）

毎時間、冒頭の5分、新聞記事の発表の時間を設定。9～11月は新聞の第一面から、12月以降は興味のある記事をどのページからでも良いこととしました。

記事の選択は自由。内容を紹介し、自分

「見出し発表→要約した内容→感想や考え」の順に発表します。



の考えを付け加え、3分前後で発表します。その後、1分前後で教師のコメントを添えました。

11月からは、「伝える」から「伝わる」を意識した発表に発展させました。写真やグラフなどを指し示しながら発表をしたり、そのために事前に読んで伝えたい部分に線を引いてくる（↑）生徒も見られるようになりました。

(2) 広告づくり (1年生)

新聞の活用は、記事だけではありません。写真や広告など、あらゆる部分が活用可能です。

1年生では「広告を作ろう」の授業1ヶ月前から、教室横の多目的室に「新聞広告」を貼り出しました。キャッチコピーなども重視し、できるだけ「全面広告」を使用しました。

これらを参考にしながら、各自が「設定された会社」のキャッチコピーを考え、PCを活用しながら広告作りに挑戦しました。

今年度は応用編として、『保健室の広告』も作成。養護教諭も掲示とともに、



新聞全面広告を参考にPCで制作。



コメントを加えてくれました。

(3) 新聞スクラップ (全学年)

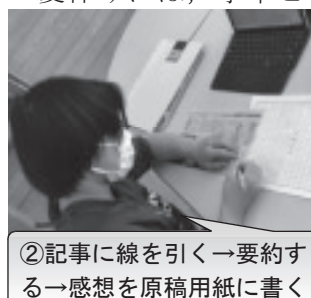
「新聞スクラップ」の取組は、長期休業を活用し実施しました。「読解の力」だけでなく「書く力」や表現力育成に結びつけました。



①新聞記事を切り取ってレイアウト。

夏休みには、学年ごとにテーマを提示（1

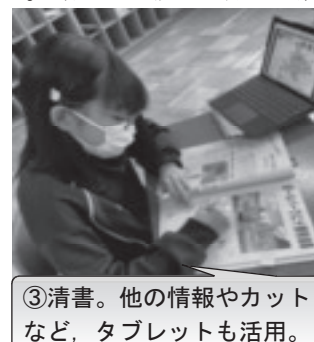
年：浦幌町、2年：十勝、3年：北海道～日本）、その中で小テーマを各自設定しました。



②記事に線を引く→要約する→感想を原稿用紙に書く

この経験を生かしながら、冬休みは各自でテーマを設定し、課題解決学習としました。（自らの設定課題に沿って、10以上の記事をチョイス。）

できあがった夏の作品は文化祭などで全て展示。仲間や先輩の作品を見ることができたり考えたりしたことを、冬の作品に活かす生徒もいました。



③清書。他の情報やカットなど、タブレットも活用。

また、これらの作品は、全十勝スクラップコンクールにも出品され、最優秀賞ほか各学年数名の入賞者が出るなど、管内でも認められる取組となりました。



まとめにかえて

情報教育の一環として、「収集力」→「編集力」→「発信力」へとレベルアップしていくために新聞を活用し、「読み取る」・「まとめる」・「書く」実践を行ってきました。新聞の提供に感謝しながら、今後もより多くの教科で新聞活用を図りながら、豊かな言語活動の展開を図っていきます。

実践テーマ

新聞記事を読んで地域と社会への理解を深めよう

函館市立銭亀沢中学校 教諭 平沼 和彦

1. はじめに

函館市には19の公立中学校（＋義務教育学校1校 計20校）があり、その中で、銭亀沢（ぜにかめざわ）中学校は小規模校です。全校生徒39名が在籍しています。生徒は、明るく素直で、学ぼうとする意欲が旺盛です。また保護者の教育に対する意識もとても高く協力的です。

2. 実践の概要

N I Eの実践について、今年度は「実践2年目」になります。新聞6紙（地方紙：函館新聞を含む）が学校に入る4カ月間

（9～12月）は、2階ホールに机を7つ置き（朝刊6紙＋北海道新聞夕刊）、毎朝、生徒の登校前に新聞を替え、新聞6紙＋道新夕刊の道南版「みなみ風」の「1面記事」などを観てもらい取り組みを続けています。

社会科の授業では、新聞の一面記事を紹介することや、身近な話題の記事・授業に関係のある記事を印刷・配布・掲示（北海道新聞デジタルのデータを引用）し、社会科と地域・国内外の出来事への興味・関心が深まるよう実践をしてきました。（道南

（渡島支庁・桧山支庁）の小中学校で

N I E実践指定校は、銭亀沢中学校1校だけです。（昨年度も本校1校のみでした。）

以下の指導案は、中学3年生で行った「新聞記事を利用した授業の指導案」です。

①題材名：公民分野 日本国憲法・平等権より『障害のある人とともに生きる社会』の発展授業新聞（4紙：道新など）の記事を読んで、障がいのある人について考え理解を深めよう。

②N I Eの観点から

今年度は、N I E実践の2年目になります。2年目のテーマ（ねらい）としては、新聞を読み「地域や社会の中で起きていることに目を向け、事件・事故の課題点や疑問に感じたことなどをどのように解決できるか考えてみよう」です。普段の授業では“北海道新聞デジタル”を利用し、地域の話題や国内外での大きな出来事などをプリントで配布しています。新聞を通して日ごろから、身近な社会の出来事に興味・関心を高めてもらい、社会の変化に関心を持つような試みを日々実施しています。

③ 本事案

(1) 本時の目標

- ユニバーサルデザイン・バリアフリーについて理解する。
- 障がいがある人にとって、何が必要（改善）かを考え理解する。

(2) 本時の展開

	学習活動	教師の働きかけ	評価
導入	・めあての確認 ・『障がいのある人』について ・ユニバーサルデザイン・バリアフリーを探す		・主体的/思考 課題について考えているか
『障がいのある人』が生活しやすい環境とはどのような環境か			
展開	・『スロープ』についての新聞記事を読む（南日本新聞・鹿児島市） ・どうしたら良かったか考える 意見交流 発表 ・身近なところで改善した方が良く 思うことと一人ひとりが行動に移 すために必要だと思うことを考 える。 意見交流 発表	・配布・説明 ・ワークシートの配布 ・個人の活動 ・グループでの活動 ・グループの考えを発表 ・個人の活動 ・グループでの活動 ・グループの考えを発表	・主体的/思考 課題について意見交流しているか
まとめ	他の新聞記事 ①ふりがなの看板の記事（京都新聞 7/31） ②119番のアプリ記事（北海道新聞 11/12） ③コンビニ：指差しシートの記事とイラストについて紹介する。（朝日新聞 11/22） ・授業の振り返り	・説明 ・記入	・確認/深い学び 具体例の掲載された新聞記事（事柄）について理解しているか

④資料など

新聞記事：南日本新聞（鹿児島市）記事の抜粋です（2022年7月30日）

鹿児島市内の飲食店が玄関口にあった階段を緩やかなスロープに改修した。きっかけになったのは、本紙「若い目」に載った車いすを使う15歳の少女の投稿。掲載から間もなく少女は急逝したが、「誰もが過ごしやすい社会を」という願いは引き継がれた。

鹿児島市泉町にある飲食店「銀の虎」は、入り口が道路より約30センチ高い位置にある。5月下旬、これまで2段あった階段を奥行き約4メートルのスロープに作り替えた。代表の林栄二郎さん（44）は「車いすの常連客が『安心して酒を楽しんで帰れる』と大喜びしてくれた」と語る。以前は店員の介助で対応していたが、「不自由に感じて、声に出しづらいことがある」と再認識しているという。元々年内には改修する考えだったが、工事を急いだのは、2月初旬の「若い目」に共感したからだ。身体障害で車いすを利用する宮迫千尋（ちひろ）さん＝当時鹿屋養護学校中学部3年＝が「外出先で食事をしようと思ったが、車いす用スロープが無く諦めた。『自分は迷惑なのか』『好きなものが食べられず悔しい』と感じ、他の障害のある人も同じ気持ちになっているのではないか」と訴えた。

○資料：ワークシート

令和4年度12月 N11授業 ワークシート

番・名前

○『障がい者』とは、どういう人のことだと思いますか。

○『新聞記事』を読んで、どうしたら良かったと思いますか。

◎新聞掲示について

○2階ホールに新聞6紙を置き、いつでも新聞を読める環境づくりをしています。



新聞を活用した授業の様子



3. 成果と課題

○生徒は新聞を楽しそうに関心をもって読んでいました。本校は、小規模校ですが、生徒の新聞に対する興味関心はとても高いです。今回のN I E授業でも、生徒は意欲的に考え発表していました。



○新聞6紙が学校に入っている間、生徒は朝の登校時に1面記事のタイトルを見て、新聞社ごとの違いを確かめていました。休み時間や昼休みに新聞を手にとって読んでいる生徒もいました。生徒に関わりがある内容は、授業の最初に新聞をみせて関心をもってもらうようにしてきました。新聞を通して地域・社会のできごとに興味をもつ機会が増えたことは大きな成果です。生徒も、「北海道新聞以外の新聞を読むことができてとてもよかった。特に全国紙（読売

新聞・朝日新聞・毎日新聞）を読めて楽しい」と話していました。また、「新聞の種類が、こんなにも多くある（北海道新聞（朝刊と夕刊）、函館新聞（地元紙）、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞の6紙）とは、知りませんでした」という驚きと喜びの声が多数出ていました。



○学習（社会科・学活・総合的な学習の時間など）に『新聞』を用いることで、教科書や資料集などで学んだ知識と、社会で起きている出来事などを結び付けて学習することができるのが、新聞活用の利点だと思います。子どもたちの学習意欲の向上や社会に興味・関心を高めることにつながる新聞記事を、もっと授業に取り入れていこうと思っています。次年度は、さらに『新聞をじっくり読む時間』をつくり主体的に取り組み、考える力・解決する力の育成・向上に注力していきたいと考えています。

生徒が主体的に新聞を活用し、SDGs の 17 の目標に迫る

札幌市立もみじ台中学校 教諭 佐藤 尋之

1 はじめに

本校は厚別区の端に位置し、校区地域の人口減少と少子高齢化の影響で、全校生徒 240 人ほどに減少していたが、今年度、隣のもみじ台南中学校と統合し、1 学年 121 名、2 学年 99 名、3 学年 109 名の全校生徒 329 名となった。統合後の人間関係のトラブル等も懸念されていたが、生徒は柔軟に受け入れ、行事等にも積極的に参加し活躍する姿が見られた。家庭環境に不安を抱える生徒や、固定化された人間関係の中で、仲間づくりを苦手とする生徒が多く、不登校生徒への支援をどうしていくかが課題である。

2 学校教育目標と SDGs

SDGs とは国連が定めた、2030 年までに達成を目標とした「持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals」のことである。これは、17 のゴールが設定されていて、世界中がこのゴールを目指して実現しようと努力している。

本校の学校教育目標は「夢をもち、地域と共に生きる生徒の育成」であるが、この目標はまさに SDGs の「持続可能な社会の発展を目指す方針」と合致する目標でもある。

3 実践内容

NIE 実践校の認定を受け 3 年目となり、本校の実践テーマである「生徒が主体的に新聞を活用し SDGs の 17 の目標に迫る」を更に深めら

れるように取り組んだ。また、提供された新聞は、北海道新聞、読売新聞、毎日新聞、朝日新聞、日本経済新聞、産経新聞、読売中高生新聞の各紙である。学校司書と連携し、各教科の支援を得ながらの実践となった。その実践の中で主なものを紹介していきたい。

(1) もみじ台中学校新聞閲覧コーナー

「新聞に親しむ」「社会の出来事に関心をもつ」ことを目標に通年で正面玄関ホールに閲覧台を用意し、購読した各紙の新聞を閲覧可能とした。今年はホールが自習スペースにも活用され、休み時間や放課後に新聞に触れ、記事を読む場所になっている。図書館のオススメの本とタイアップしたり、中高生新聞を PR したり期間ごとに工夫して展示することができた。

(玄関前の新聞閲覧コーナー)





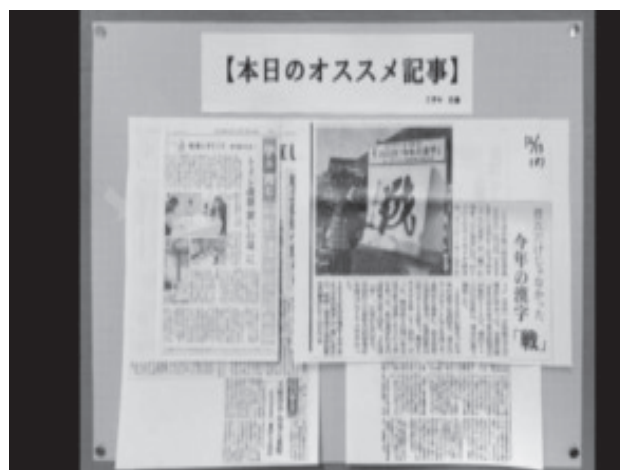
(図書館司書さんの企画「受験対策コーナー」)



(新聞記事と図書のコラボPR)

(2) 本日のオススメ記事

図書館前の廊下に「本日のオススメ記事」を掲示した。その日のニュースや身近な出来事など、中学生に読ませたい記事をピックアップして掲示することで新聞に触れ、社会の出来事に関心をもつきっかけになればと考えている。



(3) まわしよみ新聞

「社会の出来事に関心をもち自分の考えを言葉にすること」「新聞に親しむこと」を目標に2年生の国語で「まわしよみ新聞」を行った。

学校司書さんに毎月の新聞を保管してもらい、12月に「今年の出来事をふり返ろう」と呼びかけ、それぞれが気になったニュースを貼り、グループ内で選んだ記事の内容と選んだ理由を説明していった。完成したものは廊下に掲示し、学年で交流できるようにした。

新聞を取っていない家庭も多く、新聞自体になじみのない生徒も多いので、新聞に親しむよい機会になった。





(2) 「いっしょに読もう新聞コンクール」への参加

2年生の国語「根拠の適切さを考えて意見を書く」の学習の中で、自分で新聞記事を選び、その記事の内容と自分の考えを相手に伝え、相手からもコメントをもらうという活動を行った。完成したものは「いっしょに読もう新聞コンクール」に送る予定である。一生懸命に新聞を読んで記事を選び、自分の考えをまとめていたが、どの子も楽しそうに新聞記事を選んでいたので印象的だった。



①新聞記事を選び、ワークシートに感想や考えたことを記入する。



②選んだ記事を読んで、相手からコメントをもらい、記入する。2人～4人からコメントをもらうようにし、複数の意見を聞いた後、最後に学習を通じたまとめをした。普段読まない出来事やニュースを知るきっかけになったり、同じ記事を読んで別の立場の考えに気付いたりするなど多角的に見る機会となった。書いたものを交流し、意見と根拠のつながりや具体と抽象の関係について補足した。





朝日新聞 2022.10.31



朝日新聞 2022.10.30

・ソウルの事故の記事では、二人目の子の文章の方が、原因を自分なりに考えて書いている様子がうかがえる。「事故を繰り返さないよう対策することが大切」という意見は同じだが、抽象的な内容を「主催者の有無」や「場所の特徴」など具体的な例を出して書くことで意見がよりわかりやすくなっている。

4 成果と課題

意見文を書くうえで、「言いたい」とことがある話題を見つけることができれば半分成功ではないかと考えている。それは「言いたい」ことを制限された字数の中で表現することにより思考力や表現力が試され、「言いたい」けれどもうまく言えない気持ちがあるから、「どうしたらうまく表現できるだろう」という主体的な学びにつながると考えるからだ。

その点、新聞は身近なことから国際的なことまで様々なニュースを取り上げているし、「今」の社会をリアルに感じることができ、生徒の関心を引き出すためにぴったりの教材である。

実践校の3年目になり、昨年度よりも教科と連携を取り一歩踏み込んだ形で新聞を活用した取組を行うことができた。次年度は新聞をより身近に感じるとともに、記事について意見を交流できるような活動を増やしていきたい。

中二国語「書く」(思考・判断・表現)

※p134「意見文を書く」～根拠の適切さを考えて書こう

◎社会の出来事に関心をもち、自分の考えをまとめよう。
◎自分の意見を伝えるための適切な根拠を考えよう。

活動の見直し

①オリエンテーション・応募用紙の記入※実際に送ります！返却されないで、預けておきたい人は自分でコピーを取ろう
(1) 応募用紙を配付し、書いた意見文をコンクールに送ることを説明し、応募用紙の必要事項に記入させる。
(2) p134～135を読み、学習目標と活動内容を説明する。
(3) ワークシートを配付して活動の見直しを持たせる。
(4) プリント資料を配付。ワークシート1、2に取り組ませる。(クロームブックの利用可)※気になる事件・ニュースがあったときには日付をメモしておくと新聞遊びに役立つ。

②新聞記事から関心のある記事を切り取り、プリントに貼って、自分のコメントを書く。
・説明3分→記事選び30分→感想・意見の記入15分

③自分が選んだ記事を持ち、他の人に見せてコメントをもらい、聞き取った内容を記入する。
※できるだけ、自分とは違う考えを聞いてみよう！
(読書館を利用)
・説明3分→交流と聞き取り30分→メモをもとに応募用紙「2」に記入15分

④他の人の意見を聞いて上で、自分の考えをまとめよう。
※クロームブックで疑問点や気になったことを調べなどしてまとめに生かそう
・説明(教科書p132～p137と昨年度受賞作品を活用)12分→意見・提案の記入35分

5 おわりに

個人的には、新聞を読むことで生徒の学びが日常や現実社会につながるきっかけになればという思いで取り組んでいる。テストや入試のための知識ではなく、世の中にある「素晴らしい取組」を知ることや「何でこんなことが起きるのか」という切実な問いをもつことが「学ぶ意味」につながり、「進路(将来)」を考えることにつながることを期待する。

新聞が身近にある日常を感じ、「読む力」と 「社会を知り、考え、つなげる力」を育む

むかわ町立穂別中学校

教諭 片岡日菜子・北村拓海・タケオ菜々子・日下 剛

1. はじめに

本校はNIEの実践指定校として3年目を迎えました。

令和2年5月から指定を受け、本校に毎朝3～4紙の新聞が配達されるようになり、指定開始当初は教職員や生徒が戸惑っていた様子です。

実践指定校最終年度と位置付けてスタートした今年度ですが、「焦らず、慌てず、諦めず」を基本的な考え方として、毎日、継続して「新聞ワーク」を実践することを心掛けました。

また、今年度は、むかわ町教育委員会が各学校に対して常設する新聞が1紙から2紙に増え、新聞を親しむための校内環境の充実が図られました。

2. 穂別地区の特徴

本校は、教職員17名の下、全校生徒41名（第1学年18名、第2学年8名、第3学年

15名）が学ぶ小規模校です。本校が位置するむかわ町穂別地区は、内陸に位置しているため四季の変化がはっきりとした気候が特徴で、真夏は33℃くらいまで気温が上がり、真冬は-27℃くらいまで冷え込む寒暖差の大きい地区です。

また、地区内には清流鶴川が流れ、その流域

です。

このような環境の中で生活している生徒たちの学校生活は、毎朝「新聞ワーク」に取り組むことから始まります。

3. 今年度の実践から

I. 「新聞ワーク」の取組

（1）毎朝の新聞の配達に感謝！

大雨の朝は新聞が濡れてしまわないよう、ビニール袋に入れて配達していただくことがありますし、大雪の朝でも雪を掻き分けながら確実に配達していただいています。心から感謝しています。

（2）「新聞ワーク」を作成する。

<手順①>新聞記事を選ぶ

この実践の中で最も大切なのはこの作業です。扱う素材がよくなければ、素晴らしい取組でも効果がありません。毎日、悩みながら新聞記事を選んでいますが、とても難しいです。私たちが新聞記事を選ぶ際に留意していることは次のア～キの7点です。

ア～内容は穂別地区とつながりがあること。
イ～ユーモアのある内容や批判的な内容でも、社会に対して関心が高まる内容であれば選択すること。

ウ～平易な言葉で書かれていること。

エ～長い文章は避けること。

オ～視覚に訴える美しい写真（可能ならカラー写真）を選択すること。

カ～身近な話題から世界情勢まで幅広い内容を選択すること。

キ～選択する新聞記事は2つ程度にすること。

<手順②>スクラップをする（記事を切り取る）

選択した新聞記事をコピー、スキャンして画像データとしてコンピュータに取り込みます。

画像データをトリミングして調整し、発行年月日、発行新聞社名を記入します。選択した新聞記事2種類を両面に印刷します。



例1 【2022年6月8日(水) 苫小牧民報】



例2 【2023年2月23日(木)朝日新聞】

<「新聞ワーク」の構成> ※例1参照

①「見出しを考えよう」

②「大事なところには、線を引こう」

正解はありません。自由に読み、考え、書いてみよう。

<手順③>全校生徒及び全教職員分（58枚）
をA4の用紙に印刷する。

(3)「新聞ワーク」に取り組む

生徒は、朝の会が始まる前に「新聞ワーク」に取り組みます。

また、本校は小規模校であるため、全校生徒が取り組んだ「新聞ワーク」を掲示するスペースが確保できます。生徒たちが行った「新聞ワーク」の掲示は毎日行います。

<「新聞ワーク」の実践具体例> ※例3参照

令和4年6月9日（木）の「新聞ワーク」で苫小牧民報の北海道穂別高等学校募集停

止に係る記事を取り上げました。この「新聞ワーク」には本校の全校生徒41名に加え、北海道穂別高等学校の全校生徒24名にも取り組んでいただきました。



例3【2022年6月8日(水) 苫小牧民報】表面

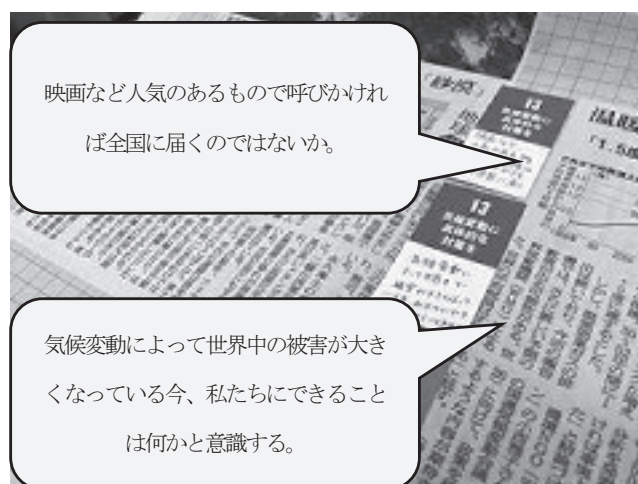


【2022年6月8日(水) 苫小牧民報】裏面

II 「朝日SDG s ジャーナル」を活用した授業実践

朝日新聞社の「中高生のための朝日SDG s ジャーナル vol.2」を活用し、第3学年でSDG s の授業を行いました。授業の内容は、各自新聞記事を読みながら、気が付いた箇所があれば付属の学習用の付箋、「ぺたっとSDG s」に短いコメントを書いて記事に貼るという作業を行い、その後、記事についての意見をグループごとに交流するという内容でした。生徒たちはジェンダー平等の実現についてや、持続可能な取組などについて活発に意見交流をしていました。

授業後の給食の時間には、「残さずに食べることが環境の保護につながるかもしれない。」と考え、残食を減らそうとしている生徒も複数いました。



4. 成果と課題

多くの皆様の支えや御協力のお陰で、1年間、1日も欠かすことなく「新聞ワーク」の取組を継続することができました。本校においては生徒たちに対し、信頼性の高いメディアである新聞に触れる機会を意図的に設定することで、正しい情報を取捨選択する力や情報活用能力を身に付けさせる目的でこの取組を行いました。

「新聞ワーク」の取組により、生徒たちは社会に対する興味・関心を確実に高めることができました。

令和5年度は、N I E実践の指定校ではありませんが、3年間のN I E実践指定校の経験を更なる教育活動の充実につなげていきたいと考えています。



例4↑【2023年3月8日(水) 苫小牧民報】



例5↑【2023年3月5日(日) 日本経済新聞】

報道からふりかえる震災学習 ～1 枚の報道写真が物語る被災者の思い～

むかわ町立鵜川中学校 教諭 片岡 鉄也

《はじめに》

本校は 2018 年 9 月 6 日に発生した北海道胆振東部地震で被災した。あの日から、「守ろう わたしの命 あなたの命 つなげよう 9.6 あの日のわたしと未来のわたしたち」をスローガンに、自らの命を守り、他者を支え、地域防災を考えていく担い手を育て、震災の教訓を後世に伝えていく防災教育が始まった。

本報告では、新聞を活用しフォトランゲージの手法を取り入れた震災学習（修学旅行震災学習の事前学習）と、新聞を活用した SDGs 学習のワークショップについて報告したい。

《実践報告》

1. 報道からふりかえる震災学習 ①

～1 枚の写真が物語る被災者の思い～
（修学旅行事前学習）

（1）活動の概要

〔目的〕

- ①新聞記事の写真をもとに東日本大震災をふりかえる。
- ②震災の様々な局面を知り、被災された方の思いに寄り添う。
- ③自分の生き方や社会のあり方を見つめ直す。

〔手順〕

- ①震災当時の東日本大震災の新聞記事の

写真 7 枚提示（写真のみ提示）。

- ②どのような場面を写したものか考え、写真の見出しを考えさせる。
- ③写真から感じたことをグループで出し合って交流する。



自分たちが考えた見出しではイマジン（想像）できなかった被災者の思いがこの写真から語られていることに子どもたちは気づいた。

〔提示した写真〕

- ①『自閉症の子わかって 迷惑かも 車中泊一週間 限界の一家、避難所に』2011 年 3 月 22 日（火）



- ②『あしたを向く』

〔キャプション〕先生の離任式があった宮城県山元町の坂元中学校から、津波でがれきだらけとなった場

所を自転車で下校する中学生たち。学校の教室や体育館は避難所となり、新学期が始まる日は決まっていない 2011 年 3 月 31 日(木)

- ③【キャプション】震災で延期されていた卒業式を終え、恩師と記念撮影をする女川一中の卒業生たち



- ④『何としてもガソリンを 物資を届けたくて 妻を捜したくて』
【キャプション】給油を待ってガソリンスタンドに並ぶ車の列 2011 年 3 月 25 日(金)



- ⑤『集団疎開 心が痛む 少ない参加 周囲に気兼ねも』
【キャプション】岩手県内陸部に集団避難するバスに乗り込む被災者 2011 年 3 月 27 日(日)
- ⑥『せめて思い出を』
【キャプション】実家から約 400m 離れた場所で見つけた。「家は跡形もなかった。写真だけでも見つかったよかった」2011 年 3 月 28 日(月)
- ⑦『せめて思い出を』
【キャプション】「これ、まこっちゃんじゃねえのか」「保育所の先生だ」。(避難所の貼り出された) 写真の中に知り合いの姿を見つけて笑顔になった 2011 年 3 月 28 日(月)

※ 写真③は報道特別写真集『巨大津波が襲った 3.11 大震災』(河北新報社)
※ その他の写真は朝日新聞

(2) 活動の振り返り

【成果】

- ・写真のみの提示だったので生徒は想像力を働かせ被災者の心情を知ろうとした。
- ・「被災」と一言で言っても被災者のおかれ

た状況は様々であることに気づけた。

【課題】

- ・障害のある被災者への想像が難しかった。被災者の心情に寄り添うためには、まずは障害者理解が必要だった。

【生徒の振り返りから】

- ・ガソリンを買うために並んでいる人たちの理由が様々で、待っている時間がいつも以上に長く感じられたと思う。

2. 報道からふりかえる震災学習 ②

～「震災後の街」から「震災前の街」を
イマジンしよう～ (修学旅行事前学習)

(1) 活動の概要

〔はじめに〕

本校は、東日本大震災で強い揺れと津波によって甚大な被害が生じた宮城県石巻市南浜地区(南浜町・門脇町)と大川地区を修学旅行で訪れ、震災学習を行った。その事前学習で新聞を活用した震災学習に取り組んだ。

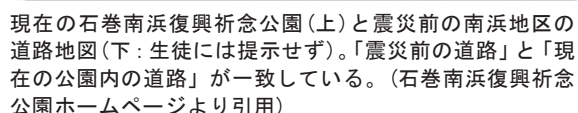
〔目的〕

- ①震災前の南浜地区がどのような街だったのか、そこではどのような生活が営まれていたのかイマジン(想像)することで、被災者の心情に思いをよせ、被災地復興のあり方を考える。
- ②震災前の旧大川小学校の学校生活をイマジン(想像)することで、被災者の心情に思いをよせ、被災体験を伝承することの意味について考える。

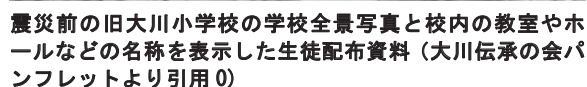
〔手順〕

- ①震災当時の新聞を掲示して、修学旅行で訪問する石巻市が東日本大震災でどのような被害にあったか知る。
- ②石巻南浜津波復興祈念公園内の道路は、震災前の街の暮らしの記憶と街が失われたことを教訓として残すため、

③(公財)3.11 メモリアルネットワークの案内で「津波伝承 AR」アプリを活用して、復興祈念公園や震災遺構門脇小学校を見学する。被災前後の写真をアプリで見たり、被災体験を聴く。公園内は震災前どのような街で、どのような生活が営まれていたかイマジン(想像)する。



⑤震災学習当日、大川小学校で娘さんをなくされた大川伝承の会の語り部ガイド佐藤俊郎氏から話を聴き、震災の教訓を伝えていくことの意味を考える。



【成果】

【課題】

- 【生徒の振り返りから】

- ・北海道胆振東部地震で被災して以降、中学校で学んできた防災学習に自分たちは守られているのだと思いました。

〔目的〕

- 114

連する記事を探ることができる。

- ・SDGs ゴールが同じ生徒でグループをつくり、関連がないか考えることができる。

〔手順〕

- ①『道新でワークシート』から SDGs に関連するワークシートを選ぶ。
- ②SDGs を意識しながら、『道新でワークシート』の記事読み、気になる箇所に線を引いたり、書き込んだりする。
- ③選んだ『道新でワークシート』と同じ SDGs のゴールの記事を探す。



北海道新聞 NIE ホームページの「ワークシート」からダウンロード。記事だけではなくて、関連する設問があり、グループでの話し合いに活用できる。

(2) 活動の振り返り

【成果】

- ・SDGs のゴール同士に関係性があることを新聞記事を探すなかで発見できた。
- ・自分たちの身近な地域の課題が、世界の出来事とつながっていることに気づくことができた。

【課題】

- ・取組期間が短かったため、関心のある SDGs の新聞記事が見つけれなかった生徒がいたので、取組期間を学期単位くらいに設定した方がよい。
 - ・授業の発展学習として年間指導計画に位置づければ、学習内容も深まる。
- 【生徒の振り返りから】
- ・SDGs といえば環境問題だと思っていたが、男女平等やそのほかにもいろいろなことが関係していることがわかった。
 - ・SDGs が授業で勉強していることととても関係していることが分かった。

〔SDGs 関連の『道新でワークシート』〕

	No.	新聞見出し
目標 13「気候変動」	951	温室ガス減へ具体策焦点 COP26 あす開幕
	958	洋上風力 室蘭に製造拠点*大成建設、24 年度にも*風車土台最大 100 億円規模
	966	脱炭素宣言 管内で相次ぐ*鹿追、足寄、更別、清水の 4 町村
	971	温暖化 北海道に影響大
	1014	自宅で堆肥作り 生ごみ減らす
	1026	プラ資源循環促進法 どう思う？
	1075	洋上風力 初の商業運転 秋田
	1055	小売りや外食 「脱プラ」加速
目標 5「ジェンダー」10「不平等」	1070	コンブ育て CO ₂ 吸収 留萌港で市、ブルーカーボン実験へ
	959	最高裁国民審査 別姓認めず「合憲」4 人に「×」票多く
	1007	「女性なのによさげい」は けなしです
	1025	<一から十勝>帯広市のパートナーシップ制度とは
	1047	パートナー制度 12 月から
	1067	パパ育休 職場の風土に「サイボウズ」社長・青野さん講演
	1063	地方議員 3 割「女性不利」
	999	子どもも親も生きやすい社会に「こども家庭庁」新設へ
目標 1・2・3	1023	こども家庭庁法成立へ
	967	伸びぬ障害者雇用
	990	ネパール・ボカラの水道支援*市、JICA 連携*給排水のノウハウ提供
目標 1・2・3	1043	「75 歳以上 初 15%超」人口推計 65 歳以上最高 29%／「2 割負担 20%が対象」後期高齢者医療 来月新制度
	1059	世界の人口 80 億人に

新聞を読んで読解力、思考力、表現力を高める

小樽市立北陵中学校 教諭 窪田 達大

1. はじめに

本校は、「小樽市立北山中学校」「小樽市立末広中学校」の2校が統合し、新設校としてスタートを切ってから6年目を向かえた。教育目標を「小樽の未来をつくる北陵生の育成」と定め、「深く学び、考え、表現できる生徒」「豊かに人とつながり、思いやりのある生徒」「たくましく心身を鍛え、自らを律する生徒」とし、故郷小樽のまちづくりの担い手となる生徒の育成に努めている。

しかし、全国学力・学習状況調査の結果から、本校の生徒は、国語科では「書くこと」「読むこと」の領域が全国平均を下回り、数学科においても理由を説明する問題で無解答率が高いなどの課題が明らかになっている。また「語彙」が不足していたり、言葉を紡ぐ術が未熟だったり、物事の発想の基となる「実体験」に乏しかったりと多くの課題を抱えている。

これらの課題を解決する一つの方法として、教育課程の中に、週に一度のN I Eタイムを設定し、「書く活動」「読み取る活動」に取り組み、6年目を向かえた。

2. 実践の概要

(1) 教育課程への位置づけ

「小樽の未来をつくる北陵生の育成」を目指し、本校生徒の「書くこと」と「読むこと」の領域の課題解決を目指し、教育課程の中に「N I Eタイム」を設定し、毎週金曜日に4種類のワークシートに取り組んでいる。

(2) 33のスキル

今年度も学校長から生徒につけさせたいスキルを33項目として提示し、学年ごとに重点を設け教育活動全般で取り組んでいる。主体的に学ぶ力を育て、高めるという柱では、特に2年生の重点として、文章を正しく読み取ることができる。とし、最終的には、自分の考え、思いを「深める」ことができるという目標設定のもと、取組を進めている。また、N I Eの活動にも反映されている。

33 SKILLを身につけて「小樽の未来をつくる北陵生」へと成長しよう！			
総務生徒会			
1	2	3	
深く学び、考え、表現できる生徒 自分の考えを表現し、伝える	豊かに人とつながり、思いやりのある生徒 自分の考えを表現し、伝える	たくましく心身を鍛え、自らを律する生徒 自分の考えを表現し、伝える	
主体的に学ぶ力を育て、高める	コミュニケーション能力を高め、社会性を高める	事理としての論理的思考力を育て、高める	
①1 正確に読める	①12 恥辱の多い場面を察知することができる	①23 異文化の人と関わり合うことができる	
①2 新しい言葉遣いができる	①13 マナー、マナーを大切にすることができる	①24 時間を意識して行動することができる	
①3 字の意味を理解することができる	①14 感謝することができる	①25 悔いを残さないことができる	
①4 文章を正しく読み取ることができる	①15 相手の人たちに敬意を払うことができる	①26 話し合いに積極的に参加できる	
①5 他人の考え、思いを「聞くこと」ができる	①16 自分自身をもって物事に責任を負うことができる	①27 学習・学年に貢献することができる	
①6 自分の考え、思いを「持つこと」ができる	①17 自分を大切にすることができる	①28 おもてなし、思いやりを、実行することができる	
①7 自分の考え、思いを「書くこと」ができる	①18 相手の感情に気づくことができる	①29 挑戦する心を持つことができる	
①8 自分の考え、思いを「まとめること」ができる	①19 多様性を認めることができる	①30 自覚学習・自覚の能力を高めることができる	
①9 自分の考え、思いを「話すこと」ができる	①20 様々な人の考えを認め、理解することができる	①31 ストレス対処力を身につけることができる	
①10 自分の考え、思いを「実現すること」ができる	①21 他人と協力し、課題を達成することができる	①32 社会活動に積極的に参加することができる	
①11 自分の考え、思いを「深めること」ができる	①22 自分のキャリア、生き方を考えることができる	①33 地域に貢献することができる	



(3)「NIEタイム」で使用する4種類のワークシートのコンセプト

①自分たちのふるさとである小樽について知る。

⇒小樽についての記事を読んで考えるワークシート



(北海道新聞 2022年1月1日)

②幅広い社会の動きに視野を広げ、情報を的確に読み取る力を身につける。

⇒さまざまな記事を読み、情報を読み取るワークシート



(読売新聞 2022年4月30日)

③読み取ったことについて自分の意見を持ち、それを的確に表現する力を身につける。

⇒新聞のコラムを読んで、文章を書くワークシート



(朝日中高生新聞 2022年12月18日)

④文章から書き手や登場人物等の心情を読み取る力を身につける。

⇒長文を読んで、心情を読み取るワークシート



（４）いつでも、だれでも新聞を読める環境作り

新聞を取っていない家庭が年々増えていく中、生徒が新聞に触れる機会を持つことができるように、図書室にだけではなく、３年生教室の横や２階階段前掲示版などに、生徒の動線を考えて目に触れやすい位置へ新聞を設置している。特に３年生は面接練習に向けて、時事問題についての知識を得るために、毎日のように新聞を広げる生徒の姿が多く見られている。



（図書室に設置された、新聞のバックナンバー閲覧コーナー）



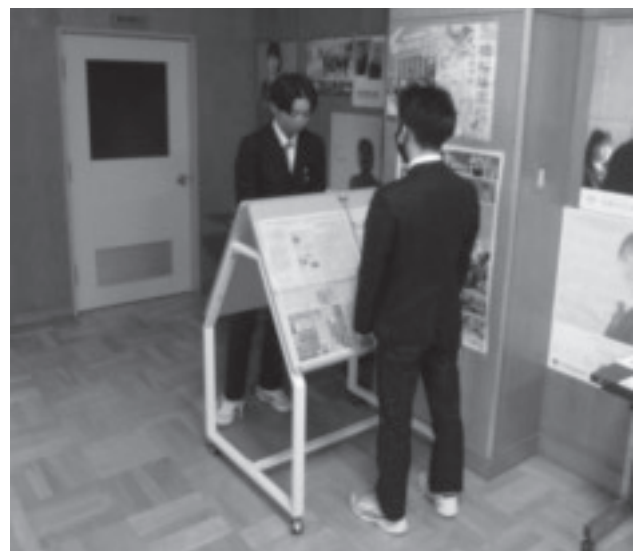
（３年生教室横に設置された新聞コーナー）



（２階階段前掲示版の新聞コーナー）



（図書室に設置された新聞コーナー）



（日常的に新聞に親しむ生徒達の様子）

（５）教科での連携・生徒の変容

国語科でのまとめ作業や、社会科や数学科、英語科でのレポート作成やスライド作成などの作業、文章を読みまとめる作業、自分の感じたことをまとめる作業等を各教科に広げている。

まとめ方を工夫したり、新聞のように読み手の興味を引くことを意識した見出しの工夫に取り組んだり、４コマ漫画のようにまとめたりと、新聞に日常的に触れることによってさまざまな工夫に挑戦してみようという姿勢が多く生徒に見られるようになってきている。



（英語科で作成されたレポート）



（社会科で作成されたレポート）



（国語科で作成されたまとめ）

３．今年度（６年目）の成果

①インプットする力

（速く、正確に読み取る力）

→「コラム」を２分で読めるようにトレーニング

②まとめる力

（キーワードを基にイメージする力）

→「要するに何なのか」をつかむトレーニング

③アウトプット力

（思いを分かりやすく伝える力）

→「思い・考え」を言葉にして伝えるトレーニング

N I Eを通して付けたい力は主に上記の３点であったが、①については、年度初めのころは読むだけで時間がかかっていた生徒たちも毎週の取り組みを経て、すばやく読めるようになってきている。②については、文章の内容が自分たちにとって身近ではない話題のとき等は要点を掴みかねている生徒が見られたが、回数を重ねることで内容理解の力が身についてきている。③についても、なかなか自分の思いや考えを持てなかった生徒達も、自分なりの根拠を持って考えを書くことができるようになってきている。いずれについても、一朝一夕に力がつくものではないので、次年度にも継続することでさらなるレベルアップを図っていきたい。

義務教育学校1年目のNIE活動

富良野市立樹海学校 教頭 西川 博司

1. はじめに

本校は、富良野市の南東部に位置する、広大な自然林を有する東京大学北海道演習林に隣接する東山地区に開設された義務教育学校である。令和4年4月に「樹海小学校」と「樹海中学校」が統合され義務教育学校として開校した。今年度から、今までの樹海中学校での実践を基本に、5年生から9年生で取り組んだ。新聞を活用して、情報にじっくり向き合い、主体的に読み解く力の向上を目指すこと、また、社会に興味を持ち、それをよりよくしていこうとする課題意識や学習意欲を高める活動に努めた。

2. 児童・生徒の様子

本校は、前期課程23名、後期課程10名、あわせて33名の小規模校である。義務教育学校であることから1年生から9年生が同じ学び舎で生活とともにし、行事や総合的な学習の時間等では全校児童生徒で活動する機会が多いことが本校の特色でもある。少人数であることで、一人一人の学習活動が十分に確保され、授業での発言や発表する機会が多いため、堂々と発表できる力が身についている。

一方、学習課題として、今年度の全国学力・学習状況調査においての分析結果から以下の2点について、NIE活動を通して改善を図りたいと考え実践した。

○「書くこと」に関して、全国・全道の正答率を大きく下回る。

○「情報の扱い方に関する事項」に関しては、全国・全道の正答率を大きく下回る。

この2点の課題解決に対して、次のような対応策を考えた。

一つ目の「書くこと」に関しては、国語の授業だけではなく、全教科で課題意識を持って取り組み、自らの考えを、適切に表現できるよう指導する。さらに、朝学習として取り組んでいる「朝読書」「NIE活動」をさらに充実させ、表現力や読解力の育成を進めた。

二つ目の「情報の扱い方に関する事項」に関しては、参考資料となる図書や新聞、またウェブサイトから必要な情報を引用し、より相手に自分の考えが伝わるような文章を作成する力を養う。そのため、各教科や総合的な学習の時間における調べ学習において、自分の考えの根拠を明確にできるよう指導した。さらに、朝学習として取り組んでいる「NIE活動」をさらに充実させ、自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くよう指導した。

以上、次年度においてもNIE活動を継続して取り組むことで、本校児童生徒の学習課題解決に結びつける実践を進めたい。

3. 実践の内容

① 取り組む時間と場所を明確に設定する。

【指導案】

1. **ねらい** ・新聞を読むことを通じて、時事への関心を高めるとともに、情報を取捨選択する力を伸ばし子どもの思考力や読解力を養う。
2. **対象学年** ・中等部（5～7年）、高等部（8～9年）
3. **活動日時** ・毎週火曜日・木曜日の朝の学習時（8：05～8：20）に実施
4. **活動内容** ・新聞記事から興味ある内容についての感想や意見をまとめる。（火曜日）
ワークシート「朝の新聞」にまとめる。→発表後、掲示する。
・新聞記事について、まとめた感想や意見を交流する。（木曜日）
発表時間は「30秒」→児童生徒数、発達段階によって変更可
※活動日が週1回の場合…活動内容については係から提案します。

5. 活動のながれ

	児童生徒の活動	教師の活動	備考
火曜日	①図書室に新聞を取りに行く ・図書室の新聞棚（学年ごと）から新聞の選び教室へ ②興味のある記事を選び、感想や意見をまとめる。 ・ワークシート「朝の新聞」に記入する。 ③発表準備・片付け ・発表内容を考える。 ・新聞を返却する。	① ・図書室の新聞棚前が、密集しないよう指導する。 ・学年の棚から新聞を持っていくよう指導する。 ② ・記事選び、記入方法についてアドバイスする。 ③ ・発表原稿などのアドバイスを する。 ・返却時の私語等への指導	① 新聞1人1部持っていく。 ② ワークシートの枠内に収まるように記入する。 ③ 発表練習時間の設定無し。各自で準備する。
木曜日	①発表会 ・発表する。→質問に答える。 ・発表を聞く。→質問する。 ②担任の話を聞く。 ③ワークシートを掲示する。	① 発表会 ・質問は、学級の実態に応じて実施する。 ② 発表会の講評 ・話し方や取り組み方などもついて評価する。 ③ まとめ ・きれいに掲示されているか確認、指導する。	① 発表することをねらいとするため、質問は児童生徒の実態に応じて実施 ② 担任以外も可能 ③ 個人用にファイリングできるようにする。

本校では、「学力向上・目標達成に向けたロードマップ」を作成し、学力向上に向けての実施計画を立てている。そこでは、NIE活動を学力向上の軸に据え、年間を通して実施している。

取組の推進は本校の組織「学力・体力向上プロジェクト委員会」が担い、児童生徒の現状を踏まえながら、具体的な方策を立てている。毎朝、登校後、朝の会までの15分間を「朝活動」と位置付け、「学力・体力向上」の基礎となる「朝読書」「朝運動」そして「NIE活動」を曜日ごとに設定し、活動している。

NIE活動は、上記の【指導案】に記載している通り、週2回実施している。義務教育学校1年目の今年度から、5・6年生から実施することとした。取り組む時間に限りがあり、活動を円滑にするため、児童生徒が生活する教室と同じ空間に新聞を設置し、すぐ手に取りやすい環境に整えた。新聞は学年ごとに専用の棚に置いた。また、過去の新聞記事に戻って取り組めるよう普段から施錠していない図書室の机に過去1か月分の新聞を置くスペースを作っている。児童生徒はより自分の関心事に合わせた記事選びが可能になり、意欲的に取り組む様子が見られた。

【学力向上・目標達成に向けたロードマップ】

【新聞棚】



② 初めての5・6年生

今年度から5・6年生がNIE活動を始めた。普段の生活で新聞を読むことがほとんどなく、活動開始にあたり、新聞の読む順序から指導しなくてはならなかった。なお、新聞の読み方、NIE活動について、学校司書と連携できたことで、スムーズなスタートができた。 【新聞の読み方】



5・6年生のNIE活動は、新聞の読み方、漢字の読み、語句の意味など記事の内容を理解するのが困難なため、学級担任のサポートが必須だった。また、1学期は、各新聞社の小学生新聞が使用できたためNIE活動にもずいぶん慣れ、2学期からは一般紙での活動が可能となった。

③ まとめ・発表・掲示

NIE活動は、新聞記事から興味ある内容についての感想や意見をまとめ、まとめた感想を発表し意見を交換した。

【感想用紙1】

【感想用紙2】

本校のN I E活動は、1年を通して実施するため、継続できるよう無理のない取り組みにすることを目標に掲げている。そのため感想用紙は、簡素なものとなっている。しかし、後期課程から「もっと書きたい」との要望があり、【感想用紙2】を作成し、生徒が選択できるようにした。

【後期課程】



【前期課程】



発表は、後期課程では昨年度までと同様の一般的な発表形式で実施した。前期課程では、モニターに発表記事を映し出し、発表している。理由は、新聞紙を他者と共有するため「切り抜き」ができないためである。発表後は、発表内容についての質問・意見交換を行い、担任の補足を加え、より深い理解・学びにつなげている。また、少人数のため、定期的に他学年と合同発表会も実施している。

【発表後の掲示】



4. 成果と課題

(1) 成果

本校では、これまでの継続による後期課程、今年度初めての5・6年生がN I E活動に取り組んだ。これまでの後期課程の実践で得られた成果から、今年度は、今までの実践内容を継承しつつ、新たな試みにも取り組んだ。

① 継続して取り組んだ成果

令和元年度よりN I E活動に取り組み、本校の研究主題である「自らの考えを表現し、共に深め合い

高め合う児童生徒の育成」に大きな成果が得られている。特に、自らの考えを発表する力、意見交換からより理解する力の向上が見られた。また、現在の社会情勢への関心の高まりから、他の学習での相乗効果や進路選択の一助となった。

② 新たな取り組みによる成果

5・6年生でのモニターに発表記事を映し出しての発表は、聞き手への理解度を高めた。より質問や意見が出やすくなった。また、学校司書との連携で、定期的に新聞記事の紹介ができたことで、よりN I E活動への意欲喚起ができた。

(2) 課題

購読している新聞が1種類のみなので、比較読みができない。比較読みによって情報を取捨選択、整理し、批評的に読み取ることができ、情報リテラシーを身につけるためには、複数の新聞の購読が必要である。

5. おわりに

本校では、N I E活動も今年度で4年目となった。この活動を通して、児童生徒は大きな成長を遂げた。社会の出来事への関心、気になった出来事をさらに詳しく調べるなど「主体的に学習に取り組む意欲と学習習慣の確立」が見られた。今後は、今までの「継続できるよう無理のない取り組み」から発展的な活動を計画する必要がある。現在、朝の15分間だけの学習を、総合的な学習の時間等でより深く探究できる活動を設定する必要がある。次年度は、新たな活動で、9年間を見通したN I E活動を検証し、さらなる児童生徒の成長を促していきたいと考えている。

新聞に親しみをもたせるための実践

北海道函館高等支援学校 教諭 山本 正彦

1. はじめに

本校は、平成31年4月、道南地区では初めて普通科と職業学科を併置する高等支援学校として開校しました。令和4年度は開校4年目となりますが、「普通科」「生産技術科」「食品デザイン科」「福祉デザイン科」の4学科に計78名（定員96名）の生徒が在籍しています。本校は教育理念に「自己と社会をつなぎ、共生社会を創造する教育の追求」、教育目標に「共生社会の一員として、自ら社会に貢献する人間の育成」を掲げ、「探究」「協働」「健全」の校訓の下、知徳体の調和のとれた人間形成を目指しています。

教育活動の特色の一つである「教科横断的な学習の充実」では、「新聞教育」「主権者教育」「防災・安全教育」「ICT教育」「消費者教育」「社会貢献・ボランティア活動」などを、主体的・対話的で深い学びの実現を通して、豊かな生きる力を育んでいます。

今年度よりNIEの実践指定校の指定をいただいたことを契機に、提供された新聞を授業の中で使用したり、記事をピックアップして掲示したりするなど、少しでも新聞と触れられるようにしています。

2. 実践の内容

(1) 道新出前講座

毎年1学年を対象に「道新出前講座」を実施しています。

今年度は、「新聞の読み方を知る」「新聞を通じて、興味・関心を高めていく」ことをテーマに北海道新聞社の方に来校していただき「回し読み新聞」を行いました。

流れ

① 切り抜きタイム

- (1) 各自新聞を読む。
- (2) 「気になる」「面白い!」「これ何だ?」と思った記事を切り抜く
- (3) 広告や写真、挿絵など新聞に載っていれば何でも切り抜いても良い。
- (4) 時間内に5枚以上切り抜く。

② プレゼンタイム

- (1) 発表する人は切り抜いた記事、写真の中から1枚だけをグループの真ん中に置く。
- (2) 「どのような記事か(=概要説明)」、「選んだ理由(=興味・ポイント)」を発表する。
- (3) 発表者の右隣2人が共感や補足などコメントをする。※ルール:相手の意見を否定しない。
- (4) 時計回りで順に発表し2周する。紹介した記事は真ん中に積み上げていく。(早く終わった場合は3周目)

③ 新聞作りタイム

- (1) トップ記事を決める。
- (2) 全体のレイアウトを決める。
- (3) 線や絵などを入れ、読みやすい新聞にする。
- (4) 貼り付けた記事・写真にコメントを入れる。
家庭で新聞を購読していない生徒も多く、新聞にはどのようなことが書かれているのかと興味深げに見入る姿も見られました。

「道新出前講座」学習指導略案

単元・題材名		新聞教育
単元 題材 目標	知識及び技能	・新聞記事を通して世の中で起こっている出来事について理解する。
	思考力、判断力、表現力等	・新聞記事を活用し、読解力・思考力・表現力を高めることができる。
	学びに向かう力、人間性等	・毎日新聞を読むことで、社会に対する興味・関心を喚起することができる。

学習集団	普通科・職業科1年	学習場所
日 時	令和4年12月13日（火）3～4校時 10:50～12:35	会議室
本時の 目標	知識及び技能	・新聞ができるまでの過程や基本的な新聞の読み方を知る。
	思考力、判断力、表現力等	・記事の基本となる「5W1H」について理解し、会話を楽しむことができる。
	学びに向かう力、人間性等	・学習に関心を持ち、積極的に学習に取り組むことができる。

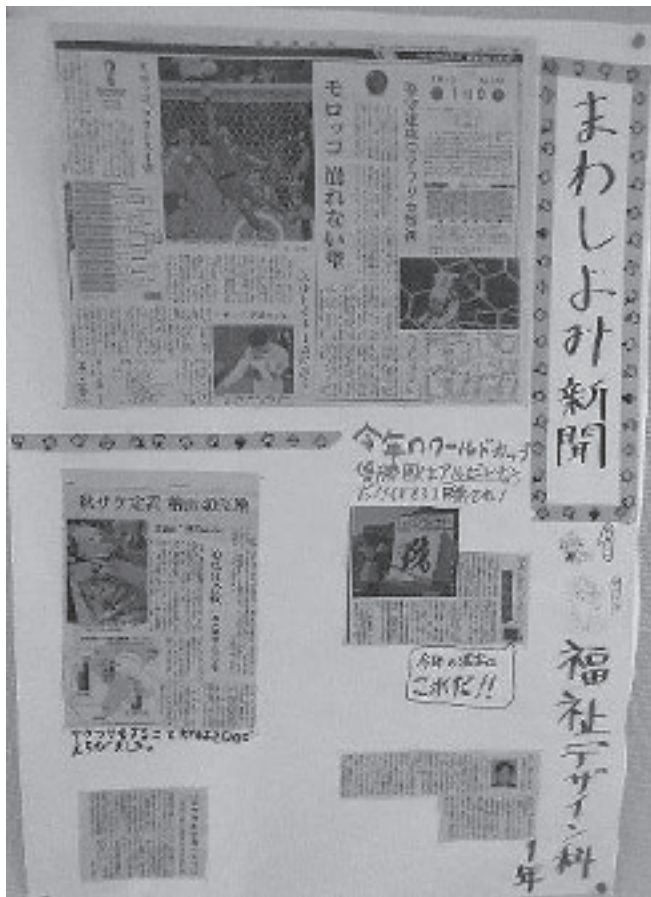
本時の展開

時程	学習内容・学習活動	支援・配慮事項	教材・教員、その他
10:50	1. あいさつ（号令：生産技術科日直） 2. 今日の学習内容を知る 3. 講師の紹介（道新販売部） T氏、K氏	・新聞が広げられるように着席。	・長机は、前日のうちに会議室やカフェから運ぶ。 ・筆記用具、はさみ、のり
10:55	4. 講話『新聞の読み方』 ①新聞の読み方（講義） ②まわしよみ新聞（HR別の活動）	・スクール形式で受講 ・長机をHR別に配置を変更 ・全員に朝刊を配付。	
12:25	5. 質疑応答		
12:30 12:35	6. お礼のことば（普通科） 7. あいさつ（号令：生産技術科日直）	<配置図> 講師席 ホワイトボード 普通 生産 食品 福祉	

学習の記録（生徒の様子・評価の資料など）

生徒名	記 録

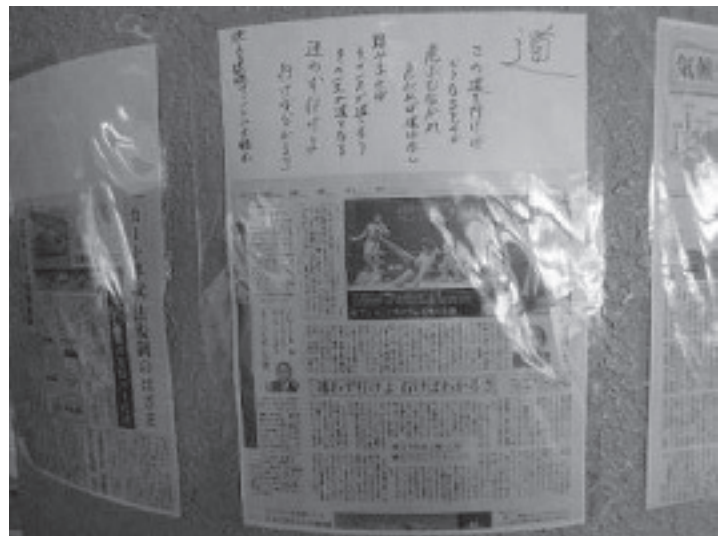
指導の評価・次の授業の改善



(2) イチオシ記事

学校全体の取組として、毎月配布していただいている新聞を生徒玄関前に貼り、登校した生徒の目に留まるように工夫をしました。注目してほしい記事にはマーカーで色を付け、少しでも抵抗なく読めるようにしています。

また、新聞記事に関連するプチ情報を付け加えることや、身近にある事柄を提示するなど、関心もてるようにしています。



3. 評価について

この講座は、新聞の読み方を知る学習であり、その活動の中で、生徒自らがもっている感受性を働かせ、新聞への興味を高めていくことは、今後の生活の潤いになると考えられます。

自分が興味のある記事だけでなく、他の人が選んだものにも関心を寄せることができたか、積極的に掲示物を作っているかを重点的に評価しました。

さらに、記事の選択に主体的に取り組むことができているか、これまでの経験と関連付けて考えようとしているか、授業内の発言や感想を書くことも評価の観点に加えました。

4. 成果と課題

(1) 成果

新聞をあまり見ない生徒が多いため、実際に新聞に触れることにより、「どんなことが書かれているのか」「どのような事件が起きているのか」「スポーツの記事は〇〇ページ」という基礎的な知識を習得することができたと感じました。

(2) 課題

「新聞が身近にない」「形式ばった文章を読んで理解することが難しい」「読むということに苦手意識をもっている」生徒が多いため、身近な新聞を利用して主体的に文字に親しむ力を付けていければと考えています。そのために、普段から新聞に触れる機会を作っていき、親しみをもたせられるようにしていきたいと感じています。

5. おわりに

今年度より、NIE 教育推進指定校をさせていただき、改めて新聞教育の大切さを感じることができました。

新聞の正しい読み方に加え、社会科等と連携して社会人として最小限必要だと思われる政治や経済、

国際情勢などの情報収集の仕方なども取り入れていく必要があると思いました。

また、自分の住んでいる町の情報を知ること重要であると感じています。

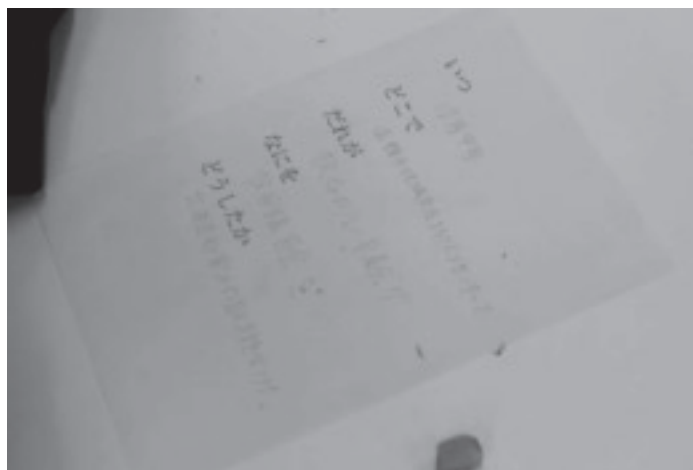
地方紙を活用し、地元のニュースに目を向けることで、自分の町でどのようなことが起きているのか、今どのようなものが注目されているのかなどを知るきっかけになれば良いと考えています。

来年度からは、子ども新聞も購読する予定になっています。一般の新聞と子ども新聞も併用し、新聞の楽しさや面白さを味わえるような授業づくりを展開していきたいと思っています。

今後も様々な方法を取り入れながら、自発的に新聞やニュースに関わっていけるような基礎作りをサポートしていきたいと思っています。

～本校最初の出前講座の様子～

4年前の出前講座では、タブレットを使用しました。北海道新聞のネットから記事を探す作業がありました。気になった記事を選び、「いつ・どこで・だれが・なにを・どうした」を意識しながらまとめ、発表をしました。



新聞から情報を読み解く力

市立札幌みなみの杜高等支援学校 教諭 本間 崇嗣 他 1 学年担当教諭

1. はじめに

本校は、知的障がいのある生徒を対象とし、「はたらく」ことを志す生徒を応援する学校として札幌市南区真駒内に平成 29 年 4 月開校した学校である。

本校の社会に果たす役割として、前述した「はたらく」ことのできる生徒を応援することの他に、地域社会との協働による専門的な教育を推進していること、一人一人が夢を追い、自分らしく生き生きと社会の中で活躍する生徒を育てることの 3 項目を大切にしている。

本校は道内では初となる「普通科職業コース制」を導入している。「働く力」「生き抜く力」を育てる観点から、学校併設のカフェ「杜カフェ」の運営を生徒が中心に行うことを目標としている。

本校杜カフェを紹介する記事



(カッコ内はカフェに関わる主な業務)

カフェ運営部門

- ①センターコース (接客)
- ②キッチンコース (調理)
- ③サポートコース (デザイン等)

生産部門

- ④ファームコース (野菜の栽培)
- ⑤工房コース (食器等制作)

外部サービス部門

- ⑥クリーンアップコース (清掃)
- ⑦エコサイクルコース (堆肥作り)

2. 生徒の様子

本校は各学年 7 クラスで、総生徒数 160 名 (教職員 78 名) が在籍する学校である。

普段から自身の具体的な進路の展望をもって学習に臨んでいる生徒が多い。

一方で、部活動や課外活動について意欲的な生徒も多く、各種外部の大会に部活動の目標として参加し活躍を見せている。

また、毎年アビリンピック北海道大会 (障害者技能競技大会) へ参加しており、令和 4 年度は昨年度北海道大会に優勝した 1 名の生徒が清掃部門の北海道代表として千葉県で行われた全国大会に出場した。

3. 実践の内容

① N I E の取り組みとねらい

N I E 指定校となり 2 年目となる今年度は 1 学年 7 学級 55 名を対象に教科「情報」の中で実施した。取組は 9 月～12 月に実施し、大きく分けて 3 つの時期に分けてテー

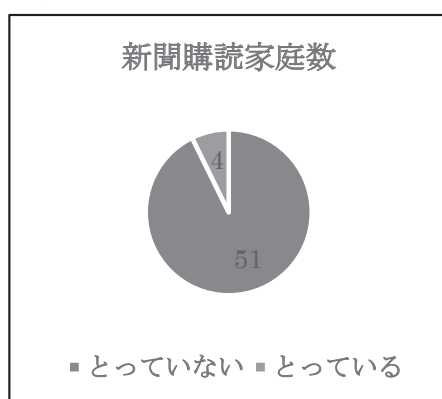
マを考慮しつつ行った。

今回の本校でのN I E学習のテーマは情報のとらえ方について学ぶことにある。

現代は、超情報化社会と言われるほどに情報が玉石混交とし、氾濫している社会と言える。その中で自らにとって必要とし、かつ正確で適切な情報を受け取るための方法の一つとして新聞を読み取ることが適切ではないかという考察のもと、学習を進めることとした。

授業を進めていくにあたり、生徒がどの程度、新聞という情報媒体に対して身近に感じているのかを調べることにした。

対象生徒に対し、「新聞を各家庭で定期購読（新聞をとっている）生徒はどのくらいいますか」という問いに対して、とっていると回答した生徒の数が55名中4名（全体の7，3％）であった。



この結果から、本校生徒にとって新聞に対する興味関心をもてるような試みを優先することが大切であるとの結論に至り、以下の三期に分けて実践を行うこととした。

I 期	新聞に対して親しみをもつ
II 期	新聞から必要な情報をとりこむ
III 期	新聞各社での情報のとらえ方の違いがわかる

② 第 I 期の取り組み

今年度、N I E 学習のために本校が購読した新聞は、「北海道新聞」「日本経済新聞」「産経新聞」（4 か月間すべて）と、「読売新聞」「毎日新聞」「朝日新聞」「読売中高生新聞」「毎日小学生新聞」「朝日小学生新聞」（後半2 か月）である。

前述したアンケート結果より、まず第1期で取り組むべき課題は生徒にとって新聞を身近なものにとらえることである。そのため、学年の教師団を9つのグループに分け、カテゴリーごとに模造紙を作成し、まわしよみ新聞を作成しようと取り組みを行った。生徒はそれら9つの模造紙をまわしよみし、自分の興味があった記事、関心のある記事に対して「いいねシール」21枚「2倍いいねシール」16枚を貼付する活動を行った。

生徒はこの活動の中でも、「初めてこの事柄を知った」「初耳だった」と話しながら新聞を読む様子が見られ、普段からニュースや報道に対して必ずしも馴染んでいるとは言えないことが見て取れた。

ちなみに、9月のおよそ一か月間で圧倒的に多くのシールが付いたのは9月3日付け北海道新聞記事で、「大谷偉業 11 勝 30 本」であった。

10月5日には北海道新聞の皆様が来校され、「まわしよみ新聞出前講座」を実施した。新聞の読み方を覚え、決められた時間内に新聞を読み切ることを目標に、当日の朝刊を学年すべての生徒が読み合わせた。5人程度のグループで興味のある内容を切り取り、模造紙に貼りつける作業を行った。

当日の様子



この日の一面は、北朝鮮から発射された飛翔体についての報道だったが、個性が表れたのはそれ以外の部分で、報道ではなく、コラムの内容に感銘を受け、イラストをつけて載せてみたり、目につく印象的な広告を載せてみたりなど多種多様な様子がうかがえた。この授業を通して、新聞を読み解くことの面白さ、新聞の懐の深さを感じることができたのではないかと思います。

③ 第Ⅱ期の取り組み

第Ⅰ期において、新聞への親近感を培うことができたところで第Ⅱ期では、新聞から自分の必要な情報を取り込むことができるようになることを目標に取り組んだ。

第Ⅰ期では教師が各コースの内容などテーマに沿って模造紙にまとめていたが、今期では立場を変え、生徒自身がテーマを考えてそれに基づいて、模造紙にまとめていく活動を行った。

生徒自身が関心のあるもの、社会的に必要とされるものを検討しながら趣味や文化、ニュースなど7つに絞り込んだ。決定した上記のテーマは各クラスごとに分け、「感心した記事」「周りの生徒に伝えたい記事」というねらいをもって実施した。

作業の様子



生徒達にとっては、新聞記事を読むことに関しては徐々に慣れてきている様子が見られたものの、自分たちのテーマに関わる記事を探し出すことに関してはやや苦勞する様子が見られた。一方で、スマートフォンなどの端末からピンポイントで情報取得

できる生徒たちにとって、情報を検索することに対して時間がかかることに新鮮さを感じている生徒も見られた。

生徒たちは新聞メディアの特徴である「情報の豊富さ」「(各紙を比較して) 情報の的確さ」を感じ取ることができたようであった。

④ 第Ⅲ期の取り組み

今回のNIE学習のまとめとして捉えていたのが、情報の伝え方の違いに気づかせることである。今回その題材として選んだものが、毎年12月に発表になる「ユーキャン流行語大賞2022」である。毎年、それぞれの年の世相を反映するものとして報道が多くなされる事柄である。今回はその紙面での紹介の仕方の違いや特徴について気付き、整理をしてもらいたいと考えた。

12月12日の教科「情報」において授業を実施した。生徒には紙のワークシートと朝刊新聞各6紙のデータを用い、各自のiPadに記事を配布し、課題に取り組んだ。

生徒たちは、第一段階として個人で考えたのち、4人程度の小グループにて話し合いを行い、それぞれの新聞の特徴を話し合った。生徒たちが特に特徴的であると捉えていたのが、「北海道新聞」の記事である。



(北海道新聞 2022/12/2)



(日本経済新聞 2022/12/2)

北海道新聞に対しては「地元ということもありきつねダンスを大きく扱っている」「大賞(村神様)の写真はないのに、キツネダンスの写真が入っている」ことから、「地元球団の話題」「地元を盛り上げたい」気持ちから大賞よりも大きく取り上げたのではないかと分析を行っていた。

また、日本経済新聞に対しては「写真が載っていない」「見出しに流行語(知らんけど)が使われている」など、見た目からくる印象を生徒がいる一方で、「経済がメインの新聞だから(扱いが小さい)」「安倍さんについても扱っている。話題が広い」と内容について言及する生徒もいた。

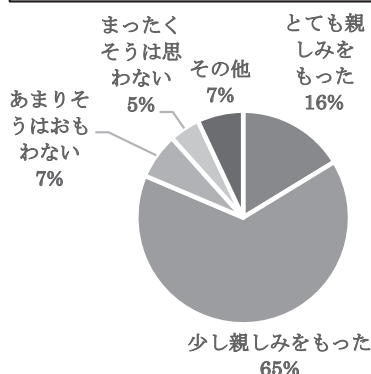
授業のまとめとして、「一つの出来事に対しても、伝える側の立場や思いで記事から受けるイメージは大きく変わることがある」ことを生徒たちが学ぶことができた。

⑤ まとめ

学習後のアンケートから、生徒たちは新聞を使った学習を楽しく感じ、親しみをもつことができたという回答の人が非常に多かった。(76,7%の生徒がとても楽しかった、少し楽しかったと回答、81,3%の生徒が新

聞に親しみをもった、少し親しみをもったと回答)(回答数 43 名)

以前に比べ、新聞に対し親しみを持つことができたか



具体的にどんなことが楽しかったか?の問いに対しては、「初めていろんなニュースを見て興味がわいた」「自分の知らない情報が知れて楽しかった」「どの記事を貼るかなどみんなと話し合ったこと」というコメントが見られた。

どんなことを学んだか?の問いに対しては、「新聞には様々な情報が載っていてバランスよく物事を知れる」「どうしたら読んでもらえるか見出しの工夫がされていた」「ひとつの新聞だけでも様々な情報が載っていること」「あまり興味のないことでも目に移り(視界に入り)知識が広がること」など、多くの感想を聞くことができた。

今回の学習を通して、一つの情報が必ずしも正しい情報であるとは限らないこともあり、しっかりと見極めることが大切であると伝えることができた。

一方で、新聞に関しては普段馴染みのない新聞にも親しみを感じ、多くの分野の様々な情報をバランスよく読み取ることができる良さを知ることができた。

新聞記事を活用した地域探究学習の取組

北海道釧路東高等学校 教諭 山本 憲一
教諭 山岸 皇

1. はじめに

本報告は、前年度から今年度にかけて実践した総合的な探究の時間での「地域探究学習」の新聞記事を活用した取組によるものである。本校の「地域探究学習」は、(1) 地域の魅力について理解を深めることによって、郷土愛を醸成させる。(2) 地域課題を把握し、主体的に課題解決に向けて取り組む姿勢を身につける。(3) 学んだことをまとめ、外部へ発信することを通して、表現力を身につけるとともに学習の深化を図ることを目的に実施した。

本校生徒は、普段、あまり新聞に馴染めていないのが実情だが、地元の「釧路」に関わる記事であったことと、見学旅行での「地域PR活動」に直結することから、生徒のモチベーションを高めることができた。

2. 地域探究学習の内容

本校の地域探究学習(2021年度入学生)は、1年次の年度末よりスタートした。2年次見学旅行での「地域PR活動」が最終目標であったが、それまでの流れ等について紹介する。

【1年次】

2/18 オリエンテーション (2時間)

…地域探究学習のイメージ化
ブレインストーミング…釧路の魅力について意識的に考える。

2/25 地域の現状について知る (2時間)

…新聞記事を用いて地域課題について探究する。地域探究学習のイメージ化

【2年次】

6/3 ガイダンス グループ編成 (1時間)

6/6 講話 (2時間)

…釧路地域の見所と効果的な地域PRの方法について

講師：観光クリエイター 原田カーナ氏

6/10 地域巡検 (6時間)

…釧路湿原展望台等、釧路の魅力を学べる見学地を訪問した。



〈地域巡検の様子〉

9月～10月中旬ごろ (8時間)

…「地域PR活動」の資料(フリップ、オリジナルパンフレット等)の作成。



〈PR資料作成の様子〉

※11/1 見学旅行「地域PR活動」
(大阪市内の商業施設で実施)



3. 実践の内容

2に示した「地域の現状について知る」の授業内容について説明したい。

(1) 新聞記事から自分の取り組む分野を選定

生徒に取り組む分野を選定させる前の準備として、授業者で資料の作成を行った。「地域探究」の授業という性質上、地元紙からの記事が大勢を占めた。2021年10月から2022年2月までの新聞記事から今回の教材を抽出し、それらを「商品開発」「観光」「魅力発信」「高校生の取組」「釧路の課題」「医療」「スポーツ」等に分類した。授業者は資料作成の際、その後実施されることになる見学旅行での「地域PR」を想定し、その場面で生徒が活用しやすいものを抽

出しようという意識を働かせ、ややもすれば単調な作業ともいえるこの資料作成もモチベーションを保ちながら行えた。

授業では、新聞記事資料を生徒に配付し、読ませた。「地域」にかかわる内容が多いため、多くの生徒は興味を持って記事に目を通していった。

(2) 新聞記事の選定、要約

生徒は、ワークシートを活用しながら、自分の取り組む分野を選定し、主に扱う記事の絞り込み等を行った。その後、記事の要約作業を行ったが、その巧拙の個人差が大きかった。要約の要領を得ていない生徒には、箇条書きでもよいなどのアドバイスをしたが、困難な状況が続いてしまうこともあった。今回の取組は、個人学習の形態だったが、グループ学習の形態にし、ある生徒が苦手な作業を得意な生徒がフォローする方法も一考と感じた。

(3) 問題点等を指摘

生徒は、ワークシートにもとづき、「釧路」の問題点等を調べた。主なものとして、釧路のマチの活性化があった。釧路の過疎化が進み、元気が無くなってきている現状を高校生の立場で体感している。

しかし、打開策を提示するのは難しいようで、アミューズメントパークを作るといった、単純なものが目立った。また、授業者の想像以上に、地元の歴史や経済等について、知識が少ないと感じた。釧路はかつて、漁業や炭鉱といった第一次産業が栄えたことで、釧路のマチが発展したといった内容でさえ、あまり知らない生徒が多かった。

若い世代の発想や思考形式は貴重なものであるが、そういった基礎知識を身につけさせる必要もあると痛感させられた。

生徒もあるいは授業者も見学旅行の「地域PR」に注意が行き過ぎ、この取組がやや散漫なものになってしまった。更に時間を増やして調べさせることや、グループ討論や発表活動を取り入れることも検討したい。

〈資料〉

- ・新聞資料①～⑤いずれも釧路新聞 ①2021/12/17 ②2022/2/17 ③2022/1/15 ④2021/10/29 ⑤2021/11/13
- ・ワークシート



4. 成果と課題（おわりに）

（1）成果

本取組の成果は、成功裏に終えられた見学旅行での地域PR活動の資料作りにおいて、新聞記事を活用した授業がある程度機能したことである。見学旅行先で自分たちが地域PRを行う際、確かな情報源としての「新聞」の価値を再認識した生徒も数多くいた。自分の意見を述べる際に、根拠が必要であるということをこの新聞活用授業で知った生徒もいたのではないかな。

（2）課題

本取組の課題として、やはり、普段から新聞や活字媒体に意識的に生徒に触れさせておくことである。今回は地域を題材としていたとはいえ、文章に

抵抗感を示す生徒がいた。新聞活用授業を有効にするために普段からの生徒の基礎体力作りは不可欠である。

また、この授業内での要約作業等の場面で、個人学習では対応が難しい状況が見られた。グループ学習の有効性は、何も新聞活用授業に限定されるものではないが、授業者の方でさまざまな状況を想定して、授業を組み立てていく必要があると感じた。

今後は、新聞活用授業の有効性が認識できたので、記事の抽出作業を生徒に取り組ませることや、見学旅行等の行事をもとに新聞を製作すること等を検討したい。さらに、情報化が必要以上に進む中で確かな情報にたどり着いて、それらを上手に活用する能力も新聞活用授業をとおして培っていきたいと感じた。

見学旅行通信

第3号
令和4年11月17日発行
創設東高校見学旅行実行委員会

見学旅行、おつかれさまでした！

10月31日～11月3日に行われた見学旅行が、予定通りの行程で終了しました。初日に清水寺を訪れ、歴史のロマンに触れながら土産屋で買い物も楽しんだ生徒が多かったです。2日目は大原市にある「イオンモール鶴見緑地」で地域PRを行いました。あいにくの雨天でしたが、お店の方のご厚意により店内でPRすることができ、大阪の買い物客の皆様にも触れ合いながら「創設」を伝えることができました。そのあとの関西自主研修では、班ごとに関西の名所を巡ったり、食文化に触れたりしました。

3日目は、一番の楽しみにしていた生徒も多かったのではと思われる「ユニバーサルスタジオジャパン」で一日を過ごし、最終日は奈良公園・東大寺を訪ね帰路に着きました。

生徒たちはこの4日間の見学旅行の中で、大きな刺激を受け、自分の存在について見つめ直す機会を得たようです。コロナ禍の中で実施しました今回の見学旅行に際しまして、保護者の皆様には多大なご理解ご協力をいただきました。誠にありがとうございます。

見学旅行実行委員会から……

見学旅行実行委員長 2年1組 原田 真樹

楽しみにしていた見学旅行もついに終わってしまいました。コロナ禍のなかでの実施でしたが、みなさん、楽しめたでしょうか？京都の街並みは日本特有の文化を感じられる素晴らしいものでした。地域PRでは、現地の方々の温かさ、同じ「イオン」でも創設のお店とは全く違う店内に気づくこともできたと思います。生徒全員が楽しみにしていたであろうUSJは、祝日だったこともあって大変混雑していました。その日の帰りのバスでは、みんな「疲れた」を言い、買い物袋を手にして、楽しそうな表情でホテルに向かいました。



最終日は、帰りたいけど帰たくないと思いつつ過ごしました。空港や東高校でお出迎えをしてくれた先生方もいて帰りの足持で旅行を終えられましたが、やはり名残惜しい気持ちもありました。

今回の見学旅行は高校生活の中で大きな思い出になりました。この経験を生かして、これからの高校生活を充実させて、進路活動にも活かしていきたいと思っています。

見学旅行フォトグラフ



【其一・清水寺】小雨の中、何とか見学できました。「清水の舞台」から多くの生徒が夕刻の京都を一望しました。また、「八幡橋」等のお土産購入も楽しいひとときでした。



【其二・地域PR】イオンモール鶴見緑地で行いました。創設町の品やオリジナルパンフレットを配布しました。



【其三・USJ】ハロウィン・ウィークだったこともあり大混雑でしたが、生徒は大満足の様子でした。



【其四・創設東高校】無事に成って参りました。本校教員のお出迎えもありました。ありがとうございました。

見学旅行通信

令和4年11月18日発行
創設東高校見学旅行実行委員会
(2学年・44期生) 第4号

【特集】地域PR（地域探究学習）

11月1日、見学旅行2日目に大原市の「イオンモール鶴見緑地」で地域PRを行いました。当日は雨天で実施可能かどうか心配されましたが、お店の方のご厚意により店内でPRさせていただきました。



〈イオンモール鶴見緑地〉

この創設は昨年度からの「地域探究」等の探究学習から一貫して行われてきたもので、今回のPR活動でその成果が発表された形となりました。生徒はこの取組を通して、地元「創設」について、一層理解を深めることができたようでした。



〈創設町グッズを手渡す生徒〉



〈地域PRの様子〉

イオンモール鶴見緑地の方からのコメント

（営業担当 喜多 聖津美 様）

北近畿創設高等学校の皆さま、この度は数あるショッピングモールの中から、イオンモール鶴見緑地にお越しいただきありがとうございます。

当日は生憎の雨でしたが、店内の食品売場付近をご利用いただくことで、多くの皆さまにPRしていただけたのではないかと思います。

イオンモールの専門店舗が10:00オープンだったので、限られた時間での活動となってしまっていました。

雨天のため、本来の主旨であるお子さま連れのお客さまが少なく、比較的年配のお客さまが多かったようですが、お客さまからは「北近畿に行きたい」と思っていたらうれしい」「高校生が地元PRしてるのうれしい」等のお声をいただけており、好評だったと感じています。ありがとうございました。

もし今後プライベートで来店に来ることがあれば、イオンモール鶴見緑地のこともちょっとだけ思い出していただけたら幸いです。（園芸部のたつこさんより）

本取組（「創設PR」）を振り返って

（2学年主任 原山 亮）

2学年では、見学旅行の2日目にイオンモール鶴見緑地（大原市）にて創設地域をPRする取組（「創設PR」）を行ってきました。

「創設PR」は、創設地域の魅力について理解を深めることを通じて郷土愛を育むこと、学んだことをまとも外へ発信する力を育成することを目的に計画され、1年次では創設地域の魅力や特色についてグループでブレインストーミングを行った。創設記事を用いて地域課題について把握する学習を実施しました。2年次では創設町の魅力を発信し、観光クリエイター・原田香苗さんによる地域の魅力発見やPR方法について講義を行っていただいた。地域探検を実施し、津波武やキャンプ場、岩保木水門、創設歴史展示館、創設市動物園を巡って地域の観光資源について見聞を深めました。

この間、学んだ創設地域の魅力を、見学旅行の創設地である大原でPRするため、グループごとにオリジナルパンフレットと説明用資料を制作してきました。各グループともに創意活動しオリジナルティあふれるパンフレットや説明用資料を作りあげました。

コロナの影響で、屋外での活動を許可されていましたが、当日は生憎の雨。しかしイオンモール鶴見緑地のご理解を得て、店内での活動が許可されて、エントランスと連絡通路にて、お客様に向けてPR活動を行いました。生徒達は創設PRをしながらも遠くの人たちに向けて、オリジナルパンフレットと説明用資料を頂戴したノベルティグッズを配布しながらPRをしてきました。300個のノベルティグッズと400個のオリジナルパンフレットは全て配布してきました。

本活動を通して、創設の魅力を客観的に捉え理解を深めるとともに、「大自然に恵まれた創設」「大都市大原」「古都 京都・奈良」といった各地域の魅力や特色について理解できたのではないかと思います。創設にお越し、「やっぱり創設がやわい」「創設の空気がいいい」などといった声が聞かれました。創設愛を深めてくれたのではないのでしょうか。

2022年度 NIE 実践報告

新聞を読む、活かす。

北海道富良野高等学校 教諭 北村 智裕（3年次主任 地理歴史・公民科）
教諭 清野 俊也（3年次担任 国語科、表現科）
教諭 石川 佳奈（3年次担任 英語科）
教諭 浅野 浩（1年次主任 国語科）

1. はじめに

本校は、創立97年目を迎える、1年次4学級（計12学級）、全校生徒389名の全日制普通科単位制高校である。

今年度、NIE実践校2年目を迎えた。昨年度は2年次を中心とした取り組みであったが、今年度は全年次でいくつかの取り組みが実践された。実践内容については、以下の通りである。多くは、昨年度と同様のものが中心となっている。

- 各教科（国語、英語、地歴公民）
- 朝学習（小論文対策、時事問題対策）
- 進路実現に向けた取り組み（LHR、総合的な探究の時間）

イ. 今年度の3年次は、1年次から継続して取り組んでいる。今年度は2年次でも同じプリントを活用して朝学習を実施している。

② 目的

ア. 小論文の基礎力は文章表現力よりも読解のスピードを上げることだと考え、穴埋め形式にして、文章を短時間で読ませることを重視する。

イ. 基本的に毎週の最新の新聞コラムを使用することで、時事的な問題について生徒が知るところを目的とする。

2. 実践の内容

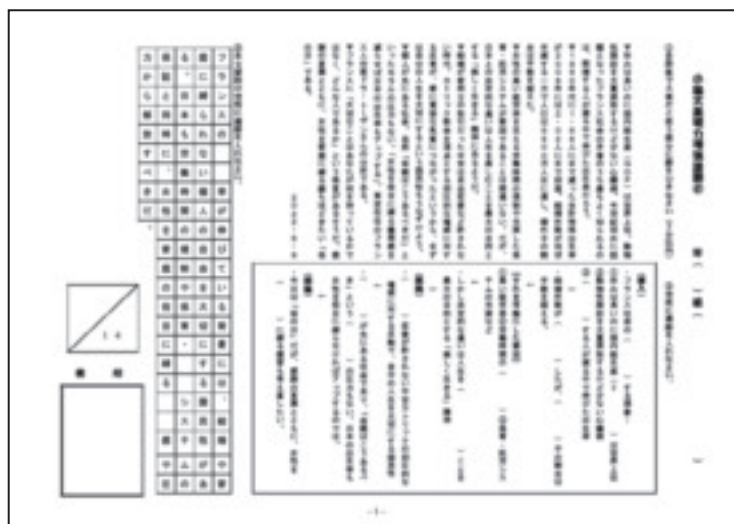
（1） 国語科におけるNIE実践

「小論文基礎力向上（要約・時事問題）」

- 実践者：清野 俊也
- 対象年次：2、3年次

① 取り組み

ア. 毎週木曜日の朝学習の10分間で新聞コラムの要約のプリントを実施する（穴埋め形式）



《北海道新聞 2022/5/22 「卓上四季」から》

③ 成果

ア. 毎週、続けていくことで生徒のコラムを読むスピードは上がっている。5分以内で全ての穴埋めが出来ている生徒が大半となっている。

イ. 時事問題については新聞を読むことの少ない生徒に対しても、必ず毎週1つ読むことで社会常識を学ぶ機会ともなっている。

ウ. 3年次は、3年間継続したことにより、今年度の進路活動（面接や小論文など）に役立てることができた。2年次は、この後の進路活動において、面接や小論文でより時事問題の知識が必要となるため継続していきたい。

④ 今後の課題

ア. 生徒が文章を読むスピードは上がったが、要領よく穴埋めをする作業に集中し、読んでから取り扱われている問題について考える機会も欲しい。

イ. 毎週、最新の時事問題を扱うことで生徒のメリットも大きいですが、手作業で穴埋めのテキストを作成する教員側には若干負担が高い。次年度も継続する予定だが、穴埋めをする週と、コラムに対する感想を書かせる週と交互におこなうような実施の方法も検討する必要がある。

(2) 英語科におけるNIE実践

○実践者：石川 佳奈

○対象年次：3年次

① 取り組み

ア. 「コミュニケーション英語Ⅲ」、「スタンダードライティング」の自習課題として英字新聞を活用した。

② 活動内容

ア. 教科担任の不在時の自習で英字新聞の記事を読み、要約する活動を行った。また、自習後の授業では、この記事についての内容を確認するなどの事後学習を行った。

「コミュニケーション英語Ⅲ」と「スタンダードライティング」の科目目標は、それぞれ「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を更に伸ばし、社会生活において活用できるようにする。」「英語を通じて、場面や状況、背景、相手の表情や反応などを踏まえて、話し手や書き手の伝えたいことを的確に理解するとともに、自分が伝えたいことを適切に伝えることができる。」である。

これらの力を身につける学習の一つとして、時事問題や生徒の興味・関心がある英字新聞の記事を活用することは、大変教育的効果があると感じている。



《The Japan Times Alpha 2022/8/10 から》

(3) 地理歴史・公民科におけるN I E実践

○実践者：北村 智裕

① 取り組み

ア. 新聞に関わるスピーチ

○対象年次：2年次「現代社会」

イ. 「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）応募

○対象年次：2年次「現代社会」

ウ. 「北海道新聞 新聞切り抜き作品コンテスト」応募

○対象年次：3年次「北海道学」

② 活動内容

ア. 新聞に関わるスピーチは、「現代社会」（2年次）の授業において、全4クラスで授業の導入部分で実施している。毎月の課題としている新聞の切り抜きをもとにスピーチを行っている。

課題では、授業内容（政治、経済、環境問題、現代の諸課題など）に合わせたものをテーマとして設定し、各自テーマに沿った新聞記事を選び、その記事の内容を要約、意見、感想を書いている。そして、これをもとに3分程度でスピーチを行う。発表後に授業者からのコメントや補足を行い、その後の授業の展開につなげていくという流れである。

イ. 「いっしょに読もう！新聞コンクール」応募は「現代社会」（2年次）の夏休みの課題とした。授業の新聞課題では授業内容に沿ったテーマを設定していたが、コンクール応募では、自らテーマを設定し新聞記事を選んだ。応募に際しては、自分の感想や意見を書くだけではなく、その記事を家族や友人にも記事を読んでもらい意見を交換する。そのため対話も生まれ、さらに多様な意見も聞くことができるので、その記事について

深く理解することができた。

コンクール応募は、今年度で3年目となる。昨年度から、「現代社会」（2年次）で扱っており、次年度の2年次からは新科目「公共」となるが、継続して実施していく予定である。また、今年度の1年次は、年次団の取り組みとしてコンクールに応募しており、次年度は再度の応募となる予定である。なお、今年度の1年次の内容や取り組み、成果等は後述の通りである。

応募の結果、3年連続で「学校奨励賞」をいただくことができた。

ウ. 「北海道新聞 新聞切り抜き作品コンテスト」応募は、本校で4年目の取り組みである。1年目は3年次の「現代社会」で取り組んでいたが、教育課程変更（現代社会が2年次に）のため、一昨年度から3年次の選択科目「北海道学」で実施している。なお、この授業は「就職・公務員、専門学校進学希望者」対象の選択科目である。授業は、前期に新聞記事を活用した「北海道に関わる時事問題」を取り扱い、後期の授業（10時間程度）で各自テーマを設定し、新聞切り抜き作品を作成、応募した。

下の作品は、災害のためJRが一部不通となり、三年間毎日、代替バスとJRの乗り換えを余儀なくされた生徒のものである。卒業後は地方公務員として地域の課題解決に対して取り組んでいきたいと考えている。



(4) 1年次におけるNIE実践

○実践者：浅野 浩

①実践の内容

ア. 朝学習での継続的な取り組み

1年次では毎週月曜日の朝、8:25～35の間に、新聞記事などを利用して自らの考えや意見を書く取り組みを行っている。限られた時間で記事を読み、意見を書くので、3行程度の文章ではあるが、考える習慣をつける、自らの考えを表現する、周りの意見を読んで視野を広げるなどの目的で行っている。

イ. 「いっしょに読もう！新聞コンクール」応募

朝学習で経験した学びを生かし、夏季休業を利用して行える新聞コンクールの参加を促した。興味を持った記事を自主的に選びゆっくりと自己の考えを深めるだけでなく、大人と意見交流をすることを大切にして取り組むように指示した。



②成果と課題

《成果》

ア. 1年次生は外部の学習調査でも国語の力が弱く心配な面があったが、自信がなくてもまずは書いてみようとする姿勢が身につき、書くことへの抵抗感が薄れて積極性が出てきた。

イ. 記事を読んで考えを深めるだけでなく、普段は話す機会のない話題での会話や大人の視点での考えを聞くことができ、視野を広げるよい機会となった。

《課題》

ア. 限られた時間で読んで自らの考えを書かなければいけないため、それに適した内容（特に時間）を選ぶのが難しい。また、意見交流の時間を十分にとれず、視野を広げることがあまり出来ていない点を改善したい。

イ. 初回ということもあり、まずは新聞に触れる、大人の意見を聞くことを重視したため意見の深まりが足りないと感じたので継続的に参加したいと考えている。

3. おわりに

NIE実践2年目のテーマも1年目同様に「新聞を読む、活かす」と設定した。日常の教育活動の中で、生徒が新聞に触れる機会を増やし、生徒一人一人に求められる「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体的に学習に取り組む態度」を養う一助となり、その先に一人一人の「進路選択、進路実現」があれば考える。

次年度以降も、新聞活用を通して生徒一人一人の成長を促せるような教育活動を実践していきたい。



「新聞を活用した学びの実践」

～朝のSHRでの新聞記事の活用と高大連携探究活動における取り組み～

北海道科学大学高等学校 教頭 山下 卓

1. はじめに

本校は系列に北海道科学大学を有する私立高校である。いよいよ2023年4月から大学所在地である手稲前田キャンパスへ移転し、同じキャンパスの強みを活かし、日常的に大学教育に出会うことができる新しい「高大一体教育」がスタートする。

今年度はNIE実践校3年目となり、昨年度に引き続き1～3年生の朝のSHRにおける新聞活用を実践した。また、2年生の高大連携探究活動において「解決したい・すべき社会問題」について、新聞記事を活用したグループによる探究活動を実践した。今回の報告では1年生の朝のSHRにおける新聞活用の実践と2年生の高大連携探究活動での実践を紹介する。

2. 1年生における朝のSHR実践

※生徒は全員iPad保有

(1) 内容

朝の授業前の時間(8:30～8:45)に新聞記事を生徒に配信している。学校として落ち着いた雰囲気の中で1時間目に臨むことを目的に、朝のSHR前から読書、新聞記事を読むことを行っている。特進コースは4月から自分が選んだ記事の要約・感想を1分程度にまとめ、週末にクラスメートに口頭で発表するという取り組みを行っている。進学コースはまずは新聞を読むことに慣れさせ、11月以降から特進コース同様、要約・感想を発表するという取り組みを行っている。

(2) 目的

主な目的は①読む力の向上 ②新聞を通し世の中の動きについて知り、様々な立場からの物の見方について考える。③記事に関して自分なりの考えをまとめ、他者に発信する力を養う。この3点を主に考えている。また、生徒の取り組みの様子から、クラスメートの記事に対する考えを聞くことにより、様々な社会の動きに関心を持つことにつながっていると感じている。

(3) 生徒の様子・効果など

入学後からすぐにこの取り組みを始めているが「新聞を読む」ことに多くの生徒が慣れ、新聞を読むことへの敷居が下がったと考えている。同時に、記事に関する反応が「知らないことを知ることができた」から一歩踏み込み、「この記事の背景を知りたい」「近い将来への影響を考えたい」というレベルに徐々に上がってきている。「現在」の記事をきっかけに「過去」「未来」を意識する生徒が増えてきたと考えている。その他の良い効果としては、新聞をより身近に感じられ、この場だけの機会に限らず、自宅等で興味を持って新聞を読む生徒が出てきたことである。また、自身の進路につながる記事に注目し、学びを深めている生徒も見受けられる。今後も、情報を入手する媒体として、真偽不明なネットからの情報だけに頼るのではなく、新聞を含めた様々な媒体から情報を入手し、正しく知り、正しい判断につなげていくことが重要だと考える。

朝新聞一例)

以下のような新聞切り抜きを担当者が毎日4枚程度配信している。

北海道新聞 2022年12月16日



iPad に毎朝配信



朝 SHR における発表の様子①

週末に記事の要約・感想を1分程度で説明



朝 SHR における発表の様子②



3. 2年生の高大連携探究活動における実践 ～新聞記事から考える「解決したい・すべき社会問題」～

2年生は系列大学である北海道科学大学と協力した取り組みとして、全員対象の探究活動（基礎）を前期に行い、北海道科学大学への進学希望者を対象にした探究活動（発展）を後期に行っている。今年度は7月に大学教職員、大学生、高校教員、高校生が協力して行う探究活動を企画した。7月14日に7時間の時間を設定し、1時間をSDGsに関連した大学の取り組み紹介等の全体ガイダンス、4時間を新聞を活用した探究活動とプレゼン資料の作成、2時間を発表・振り返りの時間に振り分けた。残念ながら、今年度も感染症対策のため大学生との交流が制限され、可能な範囲で大学教職員からアドバイスをもらうという形式への変更を余儀なくされた。本校は2年次から年間を通し、外部の様々な分野で活躍している方（大学教員・企業経営者・NPO職員・芸術家など）のサポートを受け、「探究活動」を行っており、問いの立て方や探究活動の進め方については理解している前提で活動を行った。グループの活動においてはGoogleスライドを活用し、発表の場面ではルーブリック評価表を用いてGoogleフォームを活用し、自己・他者評価を行い、振り返りを行った。

【目 的】及び【目 標】

- ・ICT を活用した「プレゼン能力」「協働能力」を育成する。
- ・SDGs の視点で新聞記事から社会問題を取り上げ、高校生なりの自由な発想で解決方法を模索する。

【7/14 の実施内容】

1 時間目 全体ガイダンス（体育館）

- （1）趣旨・実施方法説明
- （2）大学の研究所(医工連携)・SDG s に関する大学の取り組み紹介
- （3）Google スライドの設定等

2～5 時間目 探究活動

- （1）各クラスに各社新聞（道新・毎日・産経・日経）を配布する。
- （2）新聞記事から発見した社会問題を SDGs の視点と絡めて問題解決を目指す。
- （3）個人の視点をグループで共有し、社会問題解決のアイデアを出し合う。

※iPad を用いて Google スライドの共同編集機能を活用し、発表の準備を行う

6・7 時間目 発表及び相互評価

- （1）発表は1 グループ 5 分
- （2）Google フォームを使用し、評価を行う

1 時間目

体育館での全体ガイダンス

本日の内容の共通理解を図る



2～5 時間目

各教室でグループごとに探究スタート

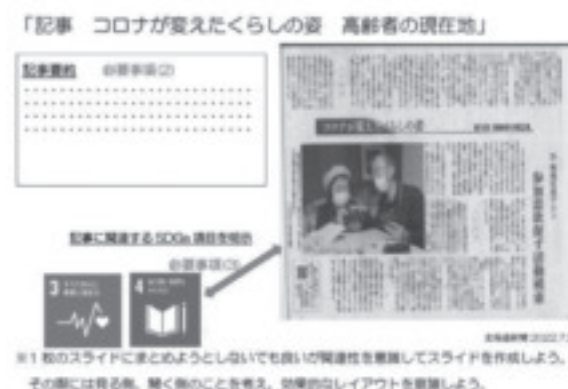
新聞記事から社会問題を選択

個人→グループでの問題解決案を検討



プレゼン資料検討・作成

資料作成の参考例を提示



Google スライドを活用しプレゼン資料作成

ロイロノートで事前資料は送信済み

マネジメントは各グループに委ねる



6・7 時間目

発表・相互評価

ループリック評価表・Google フォームを活用



活動参観者（大学教職員等）からの意見より

【良かった点】 ※複数意見のみ抜粋

- ・やるべきことが明確であり、個人での時間、グループでの時間が共に充実していた。
- ・新聞の見出しや効果的な図表・写真に着目していた生徒もあり、プレゼン資料に活かされていたグループがあった。
- ・発想が高校生らしく、大人の「常識」と違う斬新な意見がおもしろかった。
- ・グループワークや発表時の相手の話を聴く姿勢が真剣であった。
- ・iPad やアプリを使いこなしており、ICT の活用があたり前になっている。

【改善を要する点】

※複数意見のみ抜粋。ほとんどが発表時に関する問題提起であった。

- ・発表時の時間配分に課題のあるグループ（長すぎ・短すぎ）が見受けられた。もう少し発表の準備が必要ではないか。
- ・1 日完結型の取り組みのせいでもあるが、相手に伝えるための資料の工夫が必要である。
- ・限られた時間での発表なので、発表時の役割分担や声の大きさ、説明時の目線等に改善の余地がある。

探究活動実施後の生徒の声より

※複数意見のみ抜粋

- ・7 時間はあっという間であった。プレゼン資料に写真や図表を入れるなど、もう少し工夫したかった。
- ・家では新聞は読まず、ネットから情報を得ていた。思っていた以上に新聞は情報がわかりやすく、普段からもっと活用し、これからも読むことが必要だと思った。
- ・時間がたつにつれて話し合いが盛り上がり、様々な仲間の意見を聴くことができた。
- ・一人では限界があったが、それぞれに得意分野があり、皆で協力することにより、満足できる発表を行うことができた。
- ・想像以上に話し合いが盛り上がり、グループで考えることでたくさんのアイデアが出ることが実感できた。

4 終わりに

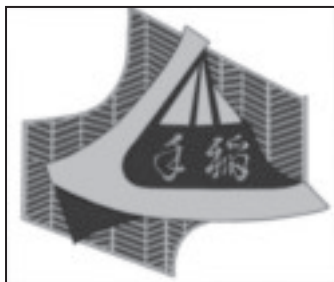
今年度もコロナ禍ということもあり、当初の予定から変更が生じた1年であった。本校では主体的な学びに積極的に取り組んでいるが、ICT や新聞を活用することにより、様々な可能性があることを感じることもできた1年であった。今後も学校として、グループでの探究活動の場づくりを行い、互いの多様な考えを認め合い、一人ではできない学びを継続的・計画的に行っていきたい。また、真偽不明な様々な情報が溢れる現代において、社会人として巣立つ高校生においては、正しい情報から正しい行動につなげる入り口として「新聞」は欠かせないものであることを実感した。今後も生徒の成長を促す大切なツールとして、新聞を活用した教育活動を模索していきたい。

「日常的・継続的」な新聞活用の取組の実践

北海道札幌手稲高等学校 教諭 渡邊昭博（嶋崎俊樹、櫻井智行）

1 はじめに

本校は創立49年目を迎える、1年次8学級、2・3年次7学級（計22学級）、全校生徒857名の全日制普通科単位制高校である。国公立大学進学を希望する生徒が数多く入学し、また部活動加入率も高く、生徒たちは「継続は力なり」の校訓のもと、「文武両道」の学校生活を送っている。1年次で生徒全員によるインターンシップを実施し、2年次では大学から講師を招いて連続4回の「学び探究ゼミ」を実施するなど、キャリア教育の実践にも力を入れている。



2 実践の経緯

本校は8年前からN I Eの実践指定を受け、当初は「情報」担当の教諭が単独で新聞を活用した授業実践を行っていた。実践指定2年目からは公民科も加わり、公民科では7年目の取組となる。その後、公民科単独の実践となり、現在に至る。今回の実践報告は、公民科での取組を中心に紹介させていただく。

新聞を活用するねらいは、（1）生徒に新聞に触れる機会を提供して社会の出来事への関心を持ってもらい、漠然と世の中のイメージを持たせること。（2）新聞記事を題材とした言語活動を通して、資料活用の技能や思考力・判断力・表現力を身につけさせることである。特に（1）は、これまでの指導経験の中で、広く世の中についての知識のある生徒のほう

なる、という感覚を得たことが理由である。

さらに、これらのねらいを実現する上で最も心がけていることは、今回の実践報告の表題にもなっている「日常的・継続的」な新聞活用という視点である。これを可能とするために、日ごろからできるだけ時間や労力をかけずに、無理せず実施できる形式で実践を行っている。従って、これから報告する実践の内容は昨年度までとほぼ同じ内容が中心であり、取組としては不十分な点もあろうかと思うが、ご容赦いただきたい。

3 実践の概要

（1）「3分間スピーチ」 今まで、1年次の「現代社会」の授業の中で実践し、本校の新聞活用のメインだった「3分間スピーチ」だが、今年度は1年次から学習指導要領が改訂となり、現代社会がなくなった。また、新たに設けられた公民科の必修科目「公共」は、本校では2年次で学習する教育課程のため、今年度は「3分間スピーチ」を実施していない。これについては、「5 成果と課題」の中で改めて述べたい。

（2）「新聞コンクールへの応募」

昨年度に引き続き、日本新聞協会主催の「第13回いっしょに読もう！新聞コンクール」へ応募した。（1）で触れたように、今年度は1年次で「3分間スピーチ」を実施しておらず、それだけ新聞に触れる機会が少なくなっているため、1年次の夏休みの宿題として取り組ませた。1年次生徒全員による応募の結果、3名の生徒が北海道地区奨励賞に選ばれ、本校も昨年度に引き続き学校奨励賞をいただくことが

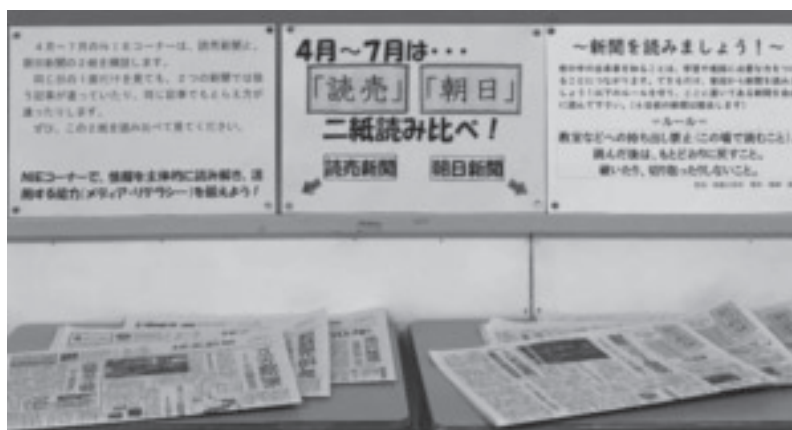


できた。2022年（令和4年）12月13日（火）付けの北海道新聞で、3名の生徒名と本校の名前を掲載していただいた。「いっしょに読もう！新聞コンクール」は、新聞に触れる機会を作るだけでなく、新聞記事をきっかけに家族や友人などと交流する機会も提供してくれる企画であり、今後もぜひ参加させていただきたいと考えている。

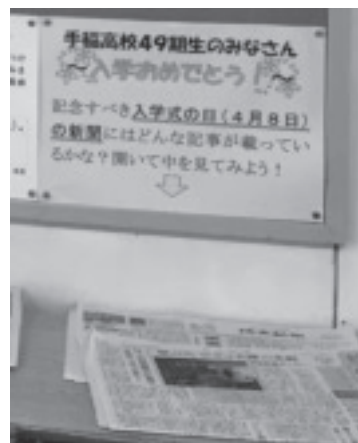
（3）「NIEコーナー」 新聞そのものに触れる機会を日常的に提供するため、例年どおり1年次の階の水飲み場に「NIEコーナー」と

題して配達された新聞の閲覧スペースを設けた。毎日、複数紙の記事を比較できるように、必ず月2紙購読し、掲示にも「〇〇新聞と□□新聞 二紙読み比べ」という言葉を入れて意識させた。

今年度も昨年度に引き続き、入学式当日の新聞を、特別にスペースを設けて長期間展示している。高校生活を始めた人生の節目の日の新聞を置くことで、少しでも新聞に興味を持ち、手に取って開いてもらいたいという願からである。

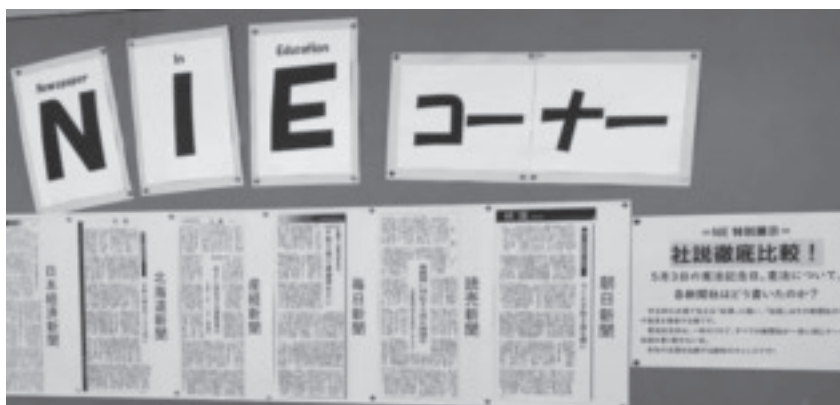


NIEコーナー



入学式当日の朝刊の特別展示

また、昨年度に引き続き憲法記念日の社説を比較する特別展示も実施した。新聞販売店の協力を得て、「朝日」「読売」「毎日」「日経」「産経」「道新」の6社の社説を掲示することができ、各社の特徴を知る良い機会となった。ただ並べて掲示するだけではなかなか注目してもらえないので、今年度は各記事の特徴的な部分に線を引き、比較しやすいように工夫した。さらに今年度は各社による世論調査の結果も掲示し、憲法改正という論点も意識させた。



憲法記念日の社説を比較した掲示



(4)「プリント二週間の出来事」

これも継続した取組であるが、2・3年次の公民科(政治経済・倫理)の授業において、「プリント二週間の出来事」を作成し配布している。これは、過去二週間の出来事をふり返るとともに、ニュースのキーワードに注目させ、授業で

学習する内容に結びつけることを意図している。ニュースから「今日のことば」を1～3個取り上げて解説するとともに、ウラ面には一つのテーマを取り上げてより詳しい解説を掲載している。二週間のニュースのまとめには、朝日新聞の「NEWS 2WEEKS」を活用させていただいている。

4 その他の新聞の活用

各年次の国語科が朝学習の一環として行っ

ている取組として、社説やコラムをA4用紙両面に印刷したプリントを作成し、定期的に生徒に配布している。また、今年度は「3分間スピーチ」がないために1年次での新聞活用の機会が少なくなったが、各担任が学級日誌に「最近のニュースで気になることを100字程度で考察しよう。」という欄をもう

け、新聞を開くきっかけを作ってくれている。このように、年次ごとに社会テーマに目を向けさせ、読解力や思考力を育成する言語活動に取り組んでいる。

5 成果と課題

(1) 日常的・継続的な活動

本校公民科でのNIEの実践は、年間を通して無理なく取り組める内容のものを意識して実施している。今年度は「3分間スピーチ」を実施していないため、例年よりも生徒が新聞に触れる機会は、大きく減る結果となったが、これまで実施してきたそれ以外の取り組みである「NIEコーナー」や「二週間の出来事」などを継続できたのは良かったと思っている。

(2) 来年度に向けて

来年度は「3分間スピーチ」をメインに、さらにこれまでの活動を継続していきたい。当初

は来年度の2年次で実施する公民科「公共」の授業で「3分間スピーチ」を実施する予定であった。しかし、新聞の活用はできるだけ早い年次からはじめた方がいいのではないかと考え、他教科の協力を得て1年次でも実施できないか検討中である。いまのところ、1年次の地歴公民科「地理総合」と2年次の公民科「公共」での実施を考えている。

(3) 課題

①時間の制限 「3分間スピーチ」は授業の中で導入として実施するため、多くの時間を割くことができない。発表者と聞く側との質疑応答など、生徒間のやり取りがあると内容が深まり面白いと思うが、授業者がコメントをするだけに留まっているのが現状である。

②新聞を読ませる工夫 「3分間スピーチ」や「NIEコーナー」など、新聞に触れる機会を設定しているが、実際に「NIEコーナー」で新聞を閲覧する生徒は限られているのが現状である。新聞を読むことの意義をさまざまな形で伝えていきたい。

6 おわりに

本校公民科におけるNIEの実践は7年目を迎え、日常的・継続的な取組も定式化した。今年度は「3分間スピーチ」を実施せず、来年度から新たな形式で再開することになる。

試行錯誤を続け、よりよい実施の方法を探っていきたい。

新聞活用のねらいや目的を十分達成するため、無理なく継続的に続けられる範囲で改善・充実を図りながら、今後も持続可能で生徒にも有効な活用方法を探っていきたい。本校での取組が、少しでも他校の先生方の実践に役立てば幸いである。

プリント二週間の出来事

【4月23日（土）～5月6日（金）】

（出席：10名、欠席：0名、遅刻：0名、早退：0名、その他：0名）

第1週（土）	第2週（日）
●1週目（土） 1. 授業開始、生徒は各自の学習用紙に「今日の出来事」を記入する。 2. 授業中、生徒は各自の学習用紙に「今日の出来事」を記入する。 3. 授業終了後、生徒は各自の学習用紙に「今日の出来事」を記入する。	●2週目（日） 1. 授業開始、生徒は各自の学習用紙に「今日の出来事」を記入する。 2. 授業中、生徒は各自の学習用紙に「今日の出来事」を記入する。 3. 授業終了後、生徒は各自の学習用紙に「今日の出来事」を記入する。

【4月23日（土）～5月6日（金）】

（出席：10名、欠席：0名、遅刻：0名、早退：0名、その他：0名）

プリント二週間の出来事

【4月23日（土）～5月6日（金）】

（出席：10名、欠席：0名、遅刻：0名、早退：0名、その他：0名）

プリント二週間の出来事

2022年度 NIE実践報告

新聞記事を利用した授業づくり

星槎国際高等学校帯広学習センター 教諭 高橋 知行

1 はじめに

本校は広域通信制、単位制の普通科高等学校であり、帯広学習センターは全国27か所の学習拠点の1つとして2010年に開設、2016年に現在地に移転した。

今年度、1、3年生選択授業の科学のなかで「新聞記事を利用した学習」に取り組んだ。



2 学習のテーマ

選択授業・1、3年生科学「感染症から身を守ろう」

3 学習のねらい

冬の十勝地方は空気が乾燥してインフルエンザなどの感染が増える季節でもある。インフルエンザの流行期を前に感染を予防するために推奨されている「手洗い」の意味を理科的な視点から理解するとともに「手洗い」では予防できない感染症のあることを知り、その予防に必要なことは何かを考える。今回は感染症の例としてインフルエンザ、新型コロナウイルス感染症と増加の著しい性感染症をとりあげた。

4 時間

2時限続き授業1回で行った。

1 時限目

- ①実験：界面活性剤が植物油を水に分散させる
- ②せっけんで手を洗うことの効果
- ③アルコール消毒との使い分け
- ④「手洗い」で予防できない感染症はあるか

2 時限目

- ⑤新聞記事の比較、通信社配信記事と自社取材記事
- ⑥保健所別の発生件数を管轄人口比で比較する
- ⑦性感染症を予防するために必要なことは何か

時限	テーマ	概要
1	①実験	・界面活性剤を用いて油脂を水中に分散させる。 ・分散と溶解の違いを視覚的に確かめる。
	②せっけんによる「手洗い」の効果	・ウィルスの脂質二重層に作用して、破壊する。 ・手洗いではすすぎも大切。
	③アルコール消毒との使い分け	・アルコールはタンパク質を変性させる。 ・肌荒れを起こすことがある。
	④「手洗い」で予防できない感染症	・性感染症を知る
2	⑤記事の比較	・通信社とはどのようなものか。 ・通信社配信記事と独自取材記事。 ・一報と続報。
	⑥発生状況	・性感染症が増えている実態がある。 ・全国、北海道、十勝ではどうか。
	⑦性感染症の予防	・性感染症の感染経路。 ・予防に必要なこと。 ・お互いを尊重するとはどういうことか。 ・自分ごととして考える。

5 記事の利用

共同通信（電子版）、朝日新聞（電子版）、北海道新聞（電子版、紙面版）、十勝毎日新聞（電子版、紙面版）を使い、数年前から感染者が急増している梅毒に関する記事を取り上げ、通信社配信記事を掲載した記事と自社取材記事の比較を行った。

授業では記事のほか、帯広市内の医師が監修したビデオ教材を用いた。



共同通信 2022/11/01



北海道新聞 2022/11/01



十勝毎日新聞 2022/08/29



十勝毎日新聞 2022/08/29



北海道新聞 2022/11/07



朝日新聞 2022/09/20

6 生徒たちの取り組み

(1) 記事を読み、通信社（共同、時事）が配信した記事が、どのように新聞紙面に反映されているかを学んだ。

- ・ 通信社配信記事を受けて地域に関する続報を載せている。
- ・ 電子版にあった通信社名が紙面では略されている。
- ・ 電子版と紙面では見出しのつけかたが変わっている。
- ・ 同じようなテーマでも新聞社によって掲載の時期がちがう。
- ・ 記事のなかに関連情報を載せている。

(2) 感染症を予防するにはどうすればいいかを考えた。

- ・感染症は新型コロナ、インフルエンザ、食中毒だけではない。
- ・感染症の種類によって予防法は異なる。
- ・知らないうちに感染する、させるというのは不安になる。

(3) 医師の監修したビデオを視聴して、性感染症の予防について学習した。

- ・性感染症のことがわかった。
- ・性感染症に感染するきっかけが身近なところにもありそうだ。
- ・コンドームは避妊だけじゃないことがわかった。
- ・行動には気をつける。
- ・相手のことも考えて責任がある。

7 生徒たちの感想

新型コロナ感染症の拡大に伴って「感染症の予防」が話題になることが多くなった。また、寒冷、乾燥の季節はインフルエンザの流行期でもあることから「感染症の予防」という入口から性感染症を取り上げた。

- ①十勝でも性感染症が増えているのがわかった。
- ②道内でも感染者が多い。
- ③コンドームが大事なことがわかった。
- ④感染するのはいやだから、ちょっと考えなくちゃ。
- ⑤お互いのことを考えたら軽くないと思った。
- ⑥心配があつたら病院に行く（そうならないようにする。）

8 留意点

今年度は選択授業・科学が1、3年生の構成となり、既に生物基礎を履修している3年生と未履修の1年生が混在するため、1年次科目の「科学と人間生活」をベースにした。また、男女混合クラスで心理的

にならないように教材を選び、将来に向けた学習になるよう後日に生殖、妊娠、出産の学習を設定した。

9 反省および今後の課題

数年前から新型コロナ感染症の流行に伴って感染予防のため「手洗い」を励行されている。また、十勝では数年前に10代の性感染症が増え、その対策が地域の課題となっていた。一方、性感染症は保健体育科の授業で扱われているが、保健体育の授業時間が少なく教科のすべてを対面授業のなかで網羅することは難しい。そのため、教科横断の試みとして選択授業・科学のなかで取り上げることとした。初めての試みであつたため「手洗い」を入口としてどう展開するか、農業振興、社会基盤整備のような比較的明るい部分だけでなく、ともすれば隠れがちな地域の課題をどう伝えるかなど、未消化な部分が残ったので、今後、さらに検討したい。そのような状況でも生徒たちがそれぞれに身近なこととして感じてくれたことが良かった。

実践テーマ 新聞を通した出会いと原体験

札幌新陽高等学校 教諭 高倉 沙希

1. はじめに

本校は、札幌市南区にある私立学校である。現在全校生徒は657名で、1年次は単位制、2,3学年はコース制となっている。単位制では生徒それぞれが「学び方」を選択できることが特徴だ。コース制ではそれぞれの教育課程で学習内容や生徒の雰囲気が異なっており、コースごとの「色」があり、校内は多様な学習の場となっている。

また、「人物多様性」を掲げる本校では、「生徒の数だけ進路がある」を基本理念に「出会いと原体験」や、教科の垣根を越えた学びを通じて、生徒毎のキャリアを支援している。

2. 実践の背景

現在、本校では Chromebook を活用した ICTでの学習が多く行われている。Google for Education を活用し、Googleスライド作成や作成物を用いたプレゼン、Google フォーム を活用した小テストやアンケート、Google Meet をつないでのオンライン全校集会など、教科やシチュエーションによってさまざま。その中でも、コロナ禍の生徒のオンライン学習活動では「調べ学習」や「検索する」ことがより多くなった。そして世の中ではさまざまなSNSアプリやツールが出現し、生徒の多くはネットの情報

に依存している現状がある。ネットの情報の信憑性や信頼性が問題視されている現代社会では、一つの情報に依存するのではなく、正確な情報を自ら見極め選択する力が求められている。そのため、今回の実践では「新聞」という選択を生徒に与えることで、さまざまな視点で物事を多角的にみる力や、正確な情報を読み取る力を育成する。また、その正確な情報を伝える新聞はどのように私たちの元に届いているのかを知り、自らのキャリア選択につなげたいと考えた。

▼Google スライド を活用してプレゼンする生徒の様子

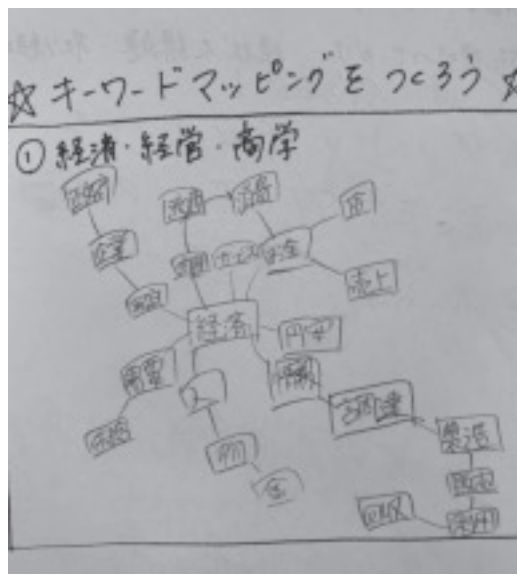


3. 実践内容 (1)

- ・ 教科：学校設定科目「探究基礎 I」
- ・ 学年：2学年総合コース（30名）
- ・ 単元：社会問題の課題解決策を考えよう
- ・ 目標：自分たちが生活する現代社会で起こっている事象に関心を持ち、正解のない問いに対して納得解を導き出す。
- ・ 概要：現代社会では多くの問題や事象が起こるが、それはなぜ存在するのか。また、社会をつくる組織と私たちの暮らす社会にどのような関連性があるのかを新聞記事から読み取り、経済、法律、地域など「社会科学」の視点で多角的に考察する。
- ・ 活動状況：

時間	活動内容・生徒の活動	活用ツール
1時間目	・ 単元内容、目的の共有 ・ 社会科学のテーマについてのキーワードマッピング作成（経済・経営・商学・法律・行政政策・地域）	Google スライド インターネット
2時間目	・ 身の回りで起こっている事象を見つける ・ その事象の新聞記事を探し読み取る	ネットニュース 新聞
3時間目	・ 新聞記事の要約 ・ 内容に対する問いを立てる ・ 課題発見、課題解決策を立てる	新聞
4時間目	・ 成果物の共有 ・ 意見交換、リフレクション	新聞

▼社会科学をテーマにした キーワードマッピング



▼新聞記事から読み取った社会問題に関する 課題と課題解決策

④ 社会問題に関するニュース (A)

(事例・課題・課題解決策)

経済・経営・商学

事例：高齢者の生活困窮問題

課題：高齢者の生活困窮問題

課題解決策：高齢者の生活困窮問題

事例：高齢者の生活困窮問題

課題：高齢者の生活困窮問題

課題解決策：高齢者の生活困窮問題

4. 実践内容(2)

- ・教科：倫理
- ・学年：3学年進学コース（73名）
- ・単元：第29回新聞配達に関するエッセーコンテスト（日本新聞協会）
- ・目標：馴染みのないテーマにおいてもアイデアや文章を絞り出す力をつける。
テーマに対して決められた時間内で一定程度の文章を作成する能力を向上させる。
推薦受験や面接試験で活かせる経験とする。
- ・概要：現代社会では若者の新聞離れが進んでいる。若者に限らず、日本新聞協会が公表した最新データによると、この5年間で失われた発行部数は1000万部にも及んでおり、このままだと15年後には日本から紙媒体での新聞が消えてしまう勢いすらある。特に新型コロナウイルスの影響によるオンラインツールの普及で、ニュースを知る手段としての新聞の必要性が減少しているのだ。自ら新聞を手にとることが少ない高校生にはこのような現実を踏まえたうえで、新聞の構成に触れてもらい、関心を持ってもらう。また、新聞と自分の間にあるエピソードを言語化することで、新聞の重要性を発見してもらう機会とする。
- ・活動状況：

時間	活動内容・生徒の活動	活用ツール
1時間目	・単元内容、目的の共有 ・新聞がどのように自分たちの元に届いているのかを知る ・新聞を実際に手に取り構成を知る	Google スライド Google ドキュメント 新聞
2時間目	・エッセーコンテスト テーマの材料集め	新聞
3時間目	・エッセーコンテスト下書き作成	新聞
4時間目	・エッセーコンテスト清書	新聞
5時間目	・エッセーコンテストへの応募、リフレクション	Google フォーム

▼エッセーコンテストの応募作品



5. 成果とリフレクション

2学年の探究基礎ではさまざまな社会問題に触れ、どのような課題があり、自分たちがどのような行動を取れば解決できるのかということ、新聞を通してイメージし考察することができていた。特に、今まで興味関心のなかった分野の新聞記事を友人に勧められて読み意見交換を行う生徒や、課題解決策をグループ内で共有し「できること」と「できないこと」を仕分け見極める生徒が印象的であった。

3学年のエッセーコンテストでは、新聞の構成や日常生活での新聞との関わりに関心を持つ生徒が多かったことが印象的であった。特に3学年は進路決定、進路活動が重要だが、自分の目指す進路についての情報をどこで収集するべきかという悩みを持つ生徒もいた。そこで「新聞を読む」という手段を見つけ、実際に新聞記事に触れることで新たな知識を得ることができた。また、新聞が自分たちの手元に届くまでに関わる「働く人」に関心を持ち、日本の将来を担う若者の一人として「働くこと」にも視点を当てたことが、生徒それぞれのキャリア選択につながったと感じる。

▼エッセーコンテストの取り組みを終えた生徒のリフレクション

新聞に関わる仕事の中で特に印象に残っている仕事は？	その理由を教えてください。	新聞の中で、自分の進路に一番関わる部分はどこだと思いますか？	その理由を教えてください。	新聞に触れる授業を受けて気づいたこと、感じたことを教えてください。
取材	取材が一番大事だしそこがないと新聞にならないから	経済面	自分の進路が経済分野で社会のお金の回りであったり企業と企業の関係性や、日本の企業の経営状況や海外との関係など様々な情報が集まっています。今自分が必要な情報が多く集まっています。経済面が今の自分の進路と一番深く関わっているのではないかと思うので経済面だと思えます。	自分の家は新聞を取っていないので、あまり新聞を読む機会がなく、読むときは基本スマホから興味のあるネットニュースを探して、それを見るぐらいでした。なので新聞について考えることがなかったのですが、新聞のことを知れて少し読んでみようかなと思いました。
校閲	誤字脱字がないか、その言葉の意味が合っているか全部目で確認して調べてっていう行為がすごいなと思ったから。地味だけど大切な仕事だなと感じた。	総合面	医療系や病院についてなど大々的に取り上げることあるから。そんな新聞に載っているわけではないが感染症や病院のニュースで話題になることもある。医療の自由問題につながるし、専門知識など載っているし総合面にも載るほどのことだから入試などに役立つから。	新聞は地味だが、意外とてまひまかかっていて毎日発行されていてすごいとおもった。馬鹿にできない仕事だと思う。
配達	新聞を配る場合、朝はとて早起きになると思う。しかも、新聞配達員は直接配達されることはわかってたけど、そんななか新聞配達という仕事を志す人は少ないなとおもったし、感謝しなければいけないなとおもった。	社会面	現代の社会について知ることが必要。国家や最近気になったニュースなど聞かれることも多いので日頃から知っておくべき。だから見たほうがいいと心の底からおもった。怖い世の中なので世の中にはどんなひとがいるかを知っておくべき。	普段は新聞のことなど考えたことがないので、今回新聞について深く学べてよかった。新聞を作るにはいろいろな人が関わっていることがびっくりした。ニュースばかりではなく、新聞も読んでみようかなとおもった。
配達	今回のエッセイを書く課題を通して、新聞配達について考えることが多くなりました。家族でその話をしてみたら、私のエッセイの題になった配達員さんのお話をしてくれちゃった。父が中学生の頃に新聞配達をしてたという話だったり、新聞に関しても、新聞配達に関しても関心が高まるきっかけになったからです。	国際面	大学は国際系に進む予定なので、国際面をよく読んでおく必要があると感じたからです。普段は、ネットやテレビで国際系のニュースや情報を得ますが、新聞を見るほうが正確性もあって、文字を間違ってたりとミスが多いので、読める機会があればぜひたくさん読んでほしいなと思います。	新聞はもう需要もなく、全てデジタル化するのではないかなと思っていたのですが、新聞も心待ちにしている人や、作る人、配達することにやりがいを感じている人がたくさんいることに驚きました。時代の流れが変わっても、変わらないものがあるということも新聞を通してよくわかりました。
校閲	昔、校閲の仕事をしている父の人が主人公のドラマがありました。その頃は新聞の校閲ではありましたが文筆をひたすのとは、漢字間違えや文章がおかしいかのチェック仕事をしていて大変だなと思った記憶がありました。	社会面	社会面で社会のいろんなことを知り、今自分は何をしなればならないのか、どのような対策方法があるかなど考え、国内だけではなく外国との比較をし、今の日本にどういったことが足りないのか考える力を養うため。	今はネットですぐにニュースが見れる。しかも自分の興味のあるニュースだけを見られる。ですが新聞は自分が興味のないニュースも書いてあるため、自然と知識が入り時事問題が得意になると感じました。
			私の進路は美術系なんですけど、美術の中でもアートに近くて文芸系は、書籍や絵画の作品なども取り上げていて、	今は何でもスマホの時代で、新聞が身近ではなくなくなってしまっていたけれど

6. 最後に

本校では日常的に Chromebook を活用し情報収集やレポート作成などを行ってきたが、今回のNIE実践授業では新聞記事に触れ、「自分にできる社会問題の解決方法」や「進路選択・キャリア選択のヒント」を生徒自身が導き出せるよう、深い学びの実現を意識した学習形態とした。生徒にとっての当たり前にはインターネットが存在し、検索すれば求めている答えをすぐに教えてくれることが普通だ。しかし今回の学習ではインターネットから視線を離し、新聞記事や新聞の背景にいる人々に注目させたことで、授業者としても物事を多角的な視点で考察することが重要だと再確認することができた。今後のNIE実践授業では、より生徒が主体的に学び、生徒自身の力になるよう取り組んでいきたい。

編集を終えて

「ぼくは、このきじをえらんだよ。わけは・・・」「わたしは、この記事の写真を見て・・・」
「この記事は、ここに貼ったら良いのでは・・・」全校児童 27 名が 6 つの縦割りグループに分かれ、児童 1 人ひとりが選んだお勧めの記事で作成する「まわし読み新聞」の活動が、2022 年 11 月、根室管内別海町立中西別小学校で公開されました。「相手に伝えること」を目標に、1 年生から 6 年生までがグループとなり、自分の言葉で記事を選んだ理由を友だちに伝えようとする姿、友だちの考えをしっかりと聞こうとする姿がたくさんが見られた有意義な活動でありました。この「まわし読み新聞」は、「記事を読み選択する」「理由を言葉で伝える」「記事の感想を文字で書く」「互いに交流し気付きを深める」等の活動を通して、読解力・思考力・表現力・言語能力等を育てることができるツールであります。さらに、互いを尊重しようとする心を育てることにもつながる活動でもあり、中西別小学校の子どもたちに定着してきていることが感じられました。

高等学校では、2022 年度から新学習指導要領が本格実施となりました。各校では、探究的な学習等で、地域の特色を生かした実践が行われています。今、ヨーロッパで起こった戦争が、私たちの身近な生活にまで影響を及ぼしている、グローバル化された世界の現状から、子どもたちの生きる時代は、ますます予測不可能な時代といえます。この時代を生きていく子どもたちのために、小中学校で育まれた力がしっかりと高等学校にも受け継がれ、子どもたちの「生きる力」となることを願うばかりです。

さて、2022 年度 N I E 実践報告書では、校内において子どもたちが日常的に新聞と触れあえる環境整備の工夫や教科の中での単元計画に位置付いた実践事例が多く報告されています。学校の教育課程にしっかりと新聞活用を位置付けることで、学校としての体系的な取組が可能となります。このためには、学校が自校の児童生徒の実態をしっかりと捉え、「育てたい子どもの姿」を明確にして、どの場面で新聞を活用することがねらう子どもの姿に結びつくのかを明確にしなければなりません。

本編が有効活用され、皆様方の学校でねらう子どもの姿の育成に、この実践が活かされることを願っております。

北海道 NIE 推進協議会

NIE コーディネーター 上村 尚生

2022 年度 NIE 実践報告書

2023 年 5 月発行

北海道 NIE 推進協議会 編

事務局 北海道新聞社みらい教育推進室
〒060-8711 札幌市中央区大通西 3 丁目 6
TEL 011-210-5802 FAX 011-210-5826
e-mail nie@hokkaido-np.co.jp



Newspaper in Education